

Newsletter

The United Graduate School of
Agricultural Sciences
Kagoshima University

鹿児島大学 大学院 連合農学研究科
ニュースレター

Volume 38, 2018

佐賀大学 鹿児島大学 琉球大学

目 次

◇鹿児島大学大学院連合農学研究科長挨拶……………	籾 井 和 朗	1
◇鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長挨拶……………	寺 田 竜 太	2
◇退職の挨拶		
鹿児島大学大学院連合農学研究科へのお礼と退職のご挨拶……………	白 武 義 治	3
雑感・雑記……………	曾 根 晃 一	4
◇旧代議委員の挨拶		
感謝と思い……………	中 村 真 也	6
代議委員退任にあたって……………	北 原 兼 文	7
代議委員の任期を終えて……………	木 村 郁 夫	8
◇新代議委員の挨拶		
ご挨拶……………	和 田 康 彦	9
ご挨拶……………	芝 山 道 郎	10
ご挨拶……………	小 林 正 治	11
代議委員就任のご挨拶……………	鬼 頭 誠	12
Life and Achievements of a Student and Delegate Member of Rendai	Md. Amzad	
In Japan ……………	Hossain	13
◇新入生の素顔		
平成 29 年 10 月入学……………		15
平成 30 年 4 月入学……………		21
◇学生の研究活動 —2017 年度在学生の学会等発表—……………		36
◇研究室紹介……………		71
◇留学生の近況……………		72
◇修了生より……………		73
◇学会賞等受賞……………		74
◇連大行事と活動		
平成 29 年度 連合農学研究科学位記授与式(後期)……………		85
平成 30 年度 農学研究科入学式……………		86
平成 30 年度 入学式告辞(平成 30 年 4 月 13 日)……………		87
平成 29 年度 全国連合農学研究科協議会……………		89
連合一般ゼミナール「農学共通講義」……………		91
中間発表会……………		93
ティーチング・アシスタント(TA)研修会……………		94
連合農学研究科「男女共同参画セミナー」と「ハラスメント防止のための講演会」を開催……………		95
分野別セミナーの開催……………		96
平成 29 年度 連合農学研究科(博士課程)		
「農学特別講義 I(一般セミナー)」実施報告……………		98
平成 29 年度 連合農学研究科「人材養成学生支援セミナー I」実施報告……………		101

先進の研究推進事業成果発表会を開催	103
◇資料 一学生数・教員組織等一	
年度別入学者数	106
平成 29 年 10 月・平成 30 年 4 月入学生及び指導教員名簿	109
平成 29 年度 奨学金及び研究助成金受給状況・入学料及び授業料免除状況	112
学位記授与状況	113
平成 29 年度 学位取得者名簿	114
平成 29 年度 学位取得者（課程博）就職状況	115
研究科教員組織	116
代議委員会委員名簿	117
平成 30 年度 年間行事予定表	118
平成 29 年度 連合農学研究科活動記録	119
代議委員会委員・連大事務室事務係メールアドレス一覧表	121
編集後記	122

◇ 連合農学研究科長挨拶



鹿児島大学大学院連合農学研究科長
 和 井 和 朗

鹿児島大学大学院連合農学研究科長として2期目になります。昨年（平成29年度）の連大の特記事項として、鹿児島市ジェイドガーデンでの1年生、2年生合同の一般セミナー、学位記授与式・入学式、さらに研究科長裁量経費による先進的研究推進事業などが挙げられます。一般セミナーでは、75名の連大生が参加し、講師として京都大学、琉球大学、鹿児島大学の先生をお迎えし、講義後には活発な質疑応答があり、各自の今後の研究の展開に役立つものであったと思います。施設見学では、鹿児島大学水産学部附属練習船かごしま丸乗船や南海食品(株)月揚庵でのさつまあげの試食、並びに情報交換セミナーでの研究紹介と討議を通じて、連大生の交流を深めることができました。また、平成29年度の博士号学位取得者は15名であり、授与式での晴れやかな笑顔を拝見し真にうれしく思うとともに、今後も農水産学分野における知の蓄積にさらに貢献されていくことを祈念いたします。

研究科長裁量経費による先進的研究推進事業では、各研究科・構成大学間共同で研究を推進する先進的研究を連大独自に公募し、平成29年度は5件（総額1200万円）を支援しました。この事業では、連大を核とした科研費などの外部資金獲得に向けての基盤づくりを目指しています。平成30年3月28日に先進的研究推進事業成果発表会を、SINETを利用して開催し、構成大学教職員および学生に研究成果の紹介を行いました。研究課題「黒麹菌・白麹菌研究拠点形成に向けた網羅的遺伝子発現解析とネットワーク構築」、「地すべり発生の早期検知を実現するIoT減災クラウドシステムの構築」、「食品機能成分におけるバイオアベイラビリティ予測のためのモデル構築」など、先進研究並びに地域課題研究に関する構成大学間での共同研究が大いに期待されます。その他の支援としては、「女性教員への公募型研究支援」、「連合農学研究科研究助成支援（一般助成、女子学生支援、海外研究プログラム）」、「国際会議支援」、「分野別セミナー開催支援」等を行っています。連大の活性化のために、多くの先生からの申請をお待ちしています。

平成30年度は、鹿児島連大設立30周年を迎えます。11月30日に、鹿児島大学稲盛会館において記念式典を行います。多くの方々にご出席いただき、連大の将来についてのご意見をいただければ幸いです。また、連大の修了生も国内外から参加していただければと思います。研究を軸に、同じ時代を切磋琢磨した連大生の繋がりを強くしていきたいと考えております。今後とも構成教員のご協力の下、これまでに築きあげてきた連大の仕組みを維持しながら、さらなる連大の発展のために前進していきますので、よろしくお願い致します。

◇ 連合農学研究科副研究科長挨拶



ご挨拶

鹿児島大学大学院連合農学研究科副研究科長
寺田 竜太

新入生の皆さん、鹿児島大学大学院連合農学研究科への入学、おめでとうございます。これからの3年間は実り多いものとなり、目標である博士の学位を取得されることを期待しています。また、連大に参加していただいている教員の皆様には、日頃より連大の教育研究活動にご協力いただいておりますことを厚く御礼申し上げます。

昨今は、研究倫理の重要性が広く認知されており、連大でも入学オリエンテーションにおいて研修会も設け、新入生の皆さんに研究者としての倫理観と、研究不正の防止についての意識を持っていただいているところです。研究者の使命の一つとしては、研究を通して科学の進歩や社会生活の向上に貢献することにあります。これは社会からの信頼の上に成り立っています。コンプライアンスの遵守はもちろんのこと、研究におけるねつ造、改ざん、盗用は、研究における極めて悪質な不正行為になります。「盗用」と聞くと、かなり悪質な行為のイメージがありますが、「コピペ (Copy & Paste)」と聞くといかがでしょうか？少し軽いイメージになるかもしれませんが、コピペも盗用行為です。論文を含めた他人の著作物から、無断で盗用することになります。学生のみなさんが論文やレポートの原稿を執筆される際には、自分のオリジナルの文章力で勝負していきましょう。

研究における不正行為には、論文の二重投稿や不適切なオーサーシップも含まれます。二重投稿は言語道断ですが、不適切なオーサーシップとはどういうことでしょうか？近年、(連大ではありませんが)共同研究者の承諾を得ずに論文を投稿し、問題になるケースを伝え聞くことがあります。研究分野によっては、投稿時に共著者の承諾を確認する雑誌や、論文にその旨を明記させる雑誌も出てきました。学位論文の提出には、投稿論文の共著者の同意が必要です。論文を投稿する際には共著者の承認を得た上で投稿することを忘れないようにしましょう。また、研究における法令の遵守も重要な研究倫理です。法を犯している意識がなくても、法令に抵触している場合があります。特に、海外では、生物資源の取り扱いに関する法令が日本と大きく異なる場合もあり、無断で採取して日本に持ち帰ると、重大な法令違反になる場合があります。生物資源の採取に際しては、日本国内はもちろんのこと、海外においても現地の法令等に抵触することのないよう十分注意して下さい。

入学の冒頭から耳の痛いようなことを書き連ねてしまいましたが、このようなことに気をつけて研究に取り組めば、みなさんには充実した3年間になることは言うまでもありません。連大としては、学生と指導教員の先生の研究が円滑に進むべく、最大限の配慮をする予定です。3年後に、学生のみなさんが晴れて博士の学位を取得されることを心より期待しています。

今年度が皆様にとって実り多き1年になりますことをお祈り申し上げます。

◇ 退職の挨拶

鹿児島大学大学院連合農学研究科へのお礼と退職のご挨拶

佐賀大学農学部

教授 白武 義治

2018年3月31日をもって佐賀大学農学部を定年退職いたしました。目まぐるしく変動した時代の中で、大過なく職責を全うできましたことは、ひとえに皆様方のご指導ご支援の賜物と心より感謝申し上げます次第です。

私は鹿児島連大には、1994年10月から助教授として、2001年4月からD^④*教授として兼任し、23.5年間お世話になりました。この間、多くの連大生の指導に関わることができ、特に主指導教員として担当しました学生10名が博士学位を受けました。彼らはスリランカ、インドネシア、バングラデシュ、中国、韓国、マダガスカルの留学生でした。お陰様で、彼らは大学の教員に7名、農林省の研究員に1名、民間企業に2名が就業し、大学長、教授、研究所所長などに就任して当該国のために大活躍しております。2017年度まで研究科長裁量経費を13年間連続で頂き、年に1度、学位取得した留学生たちが集い国際会議・研究報告会を開催できました。彼らにとって学位取得後の研究にも非常に有意義であり、大変なご支援を頂いたと考えております。また、私は連大代議委員を2004年4月から2年間、2016年4月から2年間の2期を務めさせて頂きました。2期目には生物生産科学専攻長を仰せつかり、連大運営の一部に寄与できましたことは甚だ幸せなことでした。

現在、各国の就業先から彼らのメール、電話による連絡が頻繁に届きます。その情報は嬉しく楽しいことばかりではないのですが、それらを見聞きする時、鹿児島大学大学院連合農学研究科と先生方に対し感謝し、あらためて有難いと思います。

なお、私は引き続き長崎ウエスレヤン大学の現代社会学部経済政策学科に教授として勤務し、地域・産業連携推進センター長を兼務することになりましたが、在職中に賜りました皆様方からの教訓を大切に心新たに職務に専心努力して参りますので今後とも変わらぬご支援ご交誼を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、鹿児島大学大学院連合農学研究科のますますのご発展と教職員皆様のご健勝を心より祈念して、ご挨拶とさせていただきます。

*：主指導教員資格者



雑感・雑記

鹿児島大学 農学部

教授 曾根 晃一

自分の衣鉢を継ぐ人材を育てたくて、農林水産省林野庁森林総合研究所から鹿児島大学農学部に赴任して24年が経ちました。研究者としてのキャリアの半分以上を鹿児島大学で過ごしたことになります。衣鉢を継ぐ人材といっても、何も研究者の育成だけではなく、旧帝大と異なり、地方大学は研究者養成が主目的にはなりにくいので、自分の考え方や生き様に共感したり反発したり、何らかの形で影響を与えて、多様な人材を世に送り出したいと考えていました。国研ではひたすら研究さえしておれば良かったので、鹿児島大学に赴任直後は、研究と教育のバランスを如何にとるのかという問題に直面しました。学生の多くは大学院への進学という進路の選択肢を持っていなかったため、研究を通して学生を育てることは十分にできたとは思えませんが、今振り返ってみると、教育に関しては「概ね可とすべし」であったと考えています。

一方、研究に対する欲求を満たしてくれたのが連大でした。修士の教育経験が無いとの理由で最初の年は教員資格が得られず、赴任2年目に資格を得たので、22年半連大にお世話になったこととなります。連大生は学位の取得を目標に日々研究しているので、院生との日常のディスカッションを通して、私自身多くのことを学ぶことができました。また、他大学の先生や異分野の先生と交流を持つことができ、視野が格段に広がったと思います。連大の研究費を通じた経済的メリットもさることながら、多くの教員の方や若い研究者を目指す学生と知り合えたことは、私にとってすばらしい財産となっています。

しかし、連大進学を素直に勧めることができなかつた自分がいたことも事実です。毎年連大への入学者数は定員を超え、多くの博士を世に送り出しています。ところが、彼らの受け皿となる研究所や大学のポストは、毎年減少しています。そのため、多くのODが世にあふれています。大学院進学希望の学生に対して、「学位取得までは責任が持てるが、その後については・・・」といわざるを得ないのが現状です。多くの学位取得者が職に就けないでいる状況は、知のスポイル以外の何物でも無く、大きな損失です。私が学生であった頃と異なり、人事は公募が原則となり、それを勝ち抜くためには、より多くの業績が求められるようになりました。現在鹿児島大学農学部では、ODのために学術特定研究員という制度がありますが、無給でTAやRAにも成れず、ただただタダで農学研究科に在籍しているのが現状です。連大科長の裁量経費で期限付きでも良いので雇用し教育経験を積みせるとか、ODに対する何らかのケアを検討しても良いのではないのでしょうか。

また、これは連大の持つ特殊性でやむを得ないことなのですが、カリキュラム自体に疑問を感じ続けていました。より幅広い識見を得るために、一般セミナーが開講されています。そこでは、英語で

それぞれの講師の専門分野のトピックスを紹介しています。しかし、全くの異分野のことを英語で話された場合、多くの日本人学生はついていけず、日本語で行った場合外国人留学生からは不評です。研究者の養成が連大の主たる目的であれば、自らの専門やそれに近い分野の知識を深めることの方がより重要ではないかと思います。であれば、一般セミナーでの講演を各専攻単位で実施するとか、専攻での学生間の発表とそれについてのディスカッションの時間を増やすとかといったことも考えられます。

この春創立 30 年を迎えた鹿児島連大が時代の変化に対応しつつ、益々充実・発展されることを心から祈念いたします。長い間お世話になり、ありがとうございました。

- 琉球大学 農学部
教授 弘中 和憲

- 鹿児島大学 農学部
教授 秋山 邦裕

◇ 旧代議委員の挨拶



感謝と思い

農水圏資源環境科学専攻
地域資源環境工学連合講座
琉球大学 農学部
教授 中村 真也

退任のご挨拶を書くにあたり、各構成研究科を代表する先生方が並び座る中、初めての代議委員会を無難に終えた後の安堵感をまず思い起こしました。緊張しつつ控えめにやり過ごしたあの時から2年が経ったとは、過ぎゆく時の速さを改めて実感させられます。この間、代議委員の役目を大過なく果たすことができたのも初井研究科長、寺田副研究科長、代議委員の先生方及び南室長代理を始めとする連大スタッフのみなさまの多大なご助力のおかげです。深く感謝申し上げます。

代議委員会では様々な議題がありましたが、「3年以内での学位取得率低下」は特に印象に残っています。私自身にも国費外国人留学生の指導に3年半を要した過去があり、いろいろ棚に上げて、そして自戒の意も含めつつ複雑な気持ちで教授会メンバーに努力を求めたことを覚えています。

3年以内学位取得率が低い現状は一方で、厳しい学位認定要件の下でなされてきた学位審査が、レベルを落とすことなく現在も行われていることを映し出しているものと言えるかもしれません。鹿児島連大(以下、連大)の特徴のひとつ、「フルペーパー2編」の要件は、他の連合農学研究科に比して厳しいものであり、これをクリアできた者に博士号を授与してきたことは連大の誇るべき点だと思います。2編のフルペーパー査読にしっかりと取り組んでいた学生は、学位取得後も着実に業績を積み重ねています。国内のみならず国際的にも存在感のある研究実績があり、また、所属先でリーダーとなる連大修士生は数多くいますが、この要件が力をつけるきっかけとなり、活躍の基礎を形作ったことは間違いありません。今後もこれを堅持し、連大の学位取得者の質保証として社会の認知を促し、連大修士生の強みとして一層アピールしていくべきでしょう。

教員の指導に充てる時間の確保(管理・運営業務分担の不均衡の是正)、指導能力審査のたゆまぬ改善、入試におけるより適切な学生評価等は、「3年以内学位取得率の向上」に繋がるように思いますが、なかなかこれといった妙案は浮かんできません。多様な教員の知恵を出し合えるという連大の利点がここでも発揮され、よりよい改善策が生まれると信じています。個人的には、連大の先輩教員の皆様よりも私たちの成績が悪いという事実を重く受け止め、自己確認と自己研鑽を怠らず、教員に求められる資質・能力の向上に日々努めようという決意を新たにしているところです。

代議委員として何か一つでも改善に繋がることをしたいと考え、初年度第2回の代議委員会からいくつかの提案をしました。経験はもちろん、能力さえも不足していて、時には稚拙なやり方で代議委員のみなさまにご迷惑をおかけした場面もあったかと思えます。ご容赦をお願いするとともに、代議委員会での様々なご意見や議事の進め方から学ばされることも多くあったことについて、改めて感謝申し上げます。これからは一構成員に戻りますが、連大への思いと愛着はこれまでに大きくなくなって、連大にわずかでも貢献したいと強く思っています。ありがとうございました。



代議委員退任にあたって

応用生命科学専攻
生物機能化学連合講座
鹿児島大学 農学部
教授 北原 兼文

連大では、構成大学間において学生を始めスタッフ間の様々な相互交流があり、2年間の代議委員の任務は密度の濃いものでした。ほぼ毎月開催される代議委員会は、佐賀や沖縄開催もあり、ご当地交流には楽しい思い出ができました。また、代議委員会に同期して入学試験検討委員会と教務委員会が開催され、私は前者の委員長を拝命しました。検討課題には定員充足の超過問題や入試成績と標準修業年限内の学位取得率との乖離問題等の難題がありましたが、いずれも具体的な対策を出せないまま終わってしまいました。入試制度の多様化においては、渡日前入学者選抜制度を導入することになりましたが、対象者が限定的になっていますので今後の状況に合わせて改正されればと考えております。代議委員の任務で少々辛かったのは、各種イベントのセミナーや講義の講師を依頼することでした。日頃、多忙な先生に講師をお願いするのは心苦しく思うところで、快くもお引き受け頂きました先生方には厚く御礼申し上げます。退任前の大仕事は、伝統となりつつある第6回分野別セミナー（農芸化学）の開催でした。3大学の教員と連大生、連大進学予定の修士学生、そして開催大学所属の修士と学部学生が40名参加して、初日に先端講演会と学生によるポスター発表、交流会を実施し、2日目に地域の分野関連企業を視察しました。参加学生は、先端講演、ポスター発表および交流会等を通して、分野の近い学生同士や教員との情報交換により、今後の博士論文研究の遂行と論文作成に大いに役立ったと思います。

個人的には、代議委員2年目に大学と所属学会の要職が複数重なり、自由な教育研究活動が削がれ、肉体的・精神的に疲弊した時期もありました。そんな中、連大の社会人卒業生との共同研究で平成29年度日本応用糖質科学会技術開発賞を受賞したことは非常に喜ばしい出来事でした。当該卒業生は職場の中堅幹部で多忙な本務もあり苦勞して学位を取得しましたが、この受賞により気も晴れたことでしょう。一方、代議委員の任を終えない若輩者が連大研究科長の候補者意向投票に名前が挙がりましたことは驚きと戸惑いの思い出にもなりました。

連大は平成30年度に設立30周年を迎えます。これまで培ってきた連大の組織と教育研究制度は貴重であり、その歴史でご尽力なされた先輩諸氏に感謝と尊敬の念を抱きます。この節目の当事者として、設立30周年の記念式典が盛会となるよう応援し、益々の連大の発展を祈念して代議委員退任のご挨拶と致します。

代議委員の任期を終えて

応用生命科学専攻
食品機能科学連合講座
鹿児島大学 水産学部
教授 木村 郁夫

代議委員の任期2年間は、非常に速く過ぎました。代議委員としての対応の他に、社会人博士課程の学生の研究と論文作成指導、大型競争的資金による研究開発事業の研究代表者対応、鹿児島大学かごしまCOCセンター事業の対応など、非常に忙しい充実した日々を過ごしていたため、振り返ると“あっ”という間の2年間でした。代議委員となって、連大の各構成大学の先生と非常に密接な時間を過ごすことが出来ました。各委員の分野はそれぞれ違うけれども、連大の運営に携わり、色々なことを決めて力を併せて実行に移すなど、連大の運営の仕組みや連大の皆様の顔と考え方を知る良い機会となりました。

代議委員2年目には農学特別講義（一般セミナー）の企画・運営の担当となり対応いたしましたが、事務職員の皆様の手厚いご協力と連大の各教員、水産学部連大教員皆様にしっかりしたご対応をしていただき、大変充実したセミナーを運営することができました。この場をお借りして、お礼申し上げます。一般セミナーは連大の行事の中でも、各教員が各学生と密接に議論しあう重要な教育行事であり、今後とも活発な活動として発展することが期待されます。

2年前の代議委員就任挨拶で私の研究内容について記載しましたが、取り組んでいた研究成果は地元の水産業界で応用され始めました。これらの研究活動は、私の研究室の学生が主体となり成果を挙げ、地元の漁業者の方達も研究内容を理解していただき生産活動に応用され、また、製品の販売では非常に優秀な流通業者の応援もいただけるようになりました。チームでの取組がとても大切であることを実感しております。

私の大学の任期も残すところ1年となりました。大学での教員生活は10年と短いものですが、連大の代議委員としての活動は私にとって重要な経験となりました。残り一年を思い残すことなく、きちっとやりきることを約束して代議委員任期終了の挨拶と致します。

最後に代議委員としての対応を支援していただいた靱井研究科長、寺田副研究科長、連大事務職員の皆様、代議委員の皆様にお礼申し上げます。

- 生物生産科学専攻
熱帯資源・植物生産科学連合講座
琉球大学 農学部
教授 本村 恵二

◇ 新代議委員の挨拶

ご挨拶



生物生産科学専攻
動物資源生産科学連合講座
佐賀大学農学部
和田 康彦

平成 30 年度より連大の代議員を仰せつかった佐賀大学の和田と申します。何かと先生方にはご迷惑をおかけすることがあるかと思いますが、よろしく願いいたします。

初めて鹿児島を訪問させていただいたのは農林水産省に入省した年の秋で、羽田空港から鹿児島空港まであっという間の快適なフライトでした。研究室長に連れられて和牛の生産現場を見学するための鹿児島訪問でしたが、空港からも県の職員の方の車に乗せてもらったので全く関東の県を訪問しているのと同じような感じだったのを記憶しています。2 回目に鹿児島に行ったのは、佐賀大学に赴任した翌年、連大の研究科委員会に初めて出席したときでした。この頃はまだ九州新幹線はできておらず、佐賀から JR の在来線の特急に乗ったのですが、熊本からはカーブが多く、同じ九州なのに筑波から行くよりも、ずっと大変だったのには大いに驚いたものでした。その後、九州新幹線が開通し、理由がないと鹿児島出張が日帰りになるくらいに交通の便が良くなったのには隔世の感があります。

最初、どうしてこんな面倒くさい連合大学院のような組織を作っているのか理解できなかったのですが、鹿児島大学や琉球大学、宮崎大学で開催される博士論文審査会に出席する中で、連大の良さがわかってきました。学会ではどうしても専門の近い先生方としか話さないのですが、それよりは少し広い連合講座の中で、少し離れた分野の学生さんたちの発表を聞いたり、先生方とディスカッションできる機会は非常に貴重なもので、その中で私自身も非常に勉強になりましたし、研究の発展にもつなげることができて感謝しております。もちろん、博士論文審査会だけでなく、セミナーや中間報告会など、最近の旅費がなくて、なかなか学会にも行けない学生諸君にも良い機会を提供できているのではないかと思います。

昨今、何かと騒がしい世の中ですが、今後とも、現在のような連合大学院のシステムを維持したいと思しますので、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

ご挨拶



農水圏資源環境科学専攻
地域資源環境工学連合講座
鹿児島大学教授 農学部
芝山 道郎

平成 30 年度より新たに代議員を務めることになりました。これから 2 年間、たいへんお世話になりますが、どうぞよろしくお願いたします。私は平成 24 年の夏に鹿児島大学に着任いたしました。それまでは、つくばの農水省系の独法研究機関・農業環境技術研究所に在職していました。転出後まもなく改組があって、現在は国立研究開発法人・農研機構・農業環境変動研究センターに衣替えしました。こちらに着任以来、5 年が飛ぶように過ぎ、早いものですでに 6 年目に入りました。

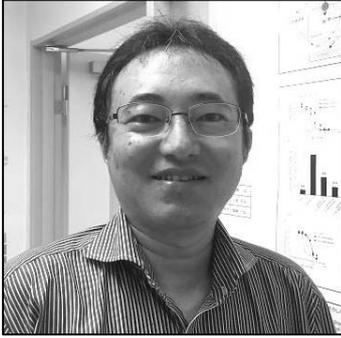
大学卒業と同時に旧農林省の農業技術研究所に配属となり、圃場作物の非破壊・非接触計測法の研究に携わりました。当時はまだパソコンなども普及しておらず、黎明期の衛星リモートセンシングデータをミニコンや磁気テープとラインプリンタで解析しました。また改造したスペクトロメータを野外に持ち出して、終日作物の分光反射特性を炎天下で計測するなど、さまざまなことを試みました。経験や勘が頼りの作物の診断法を機械化することが目的でしたが、今思い出してみると、対象の真の情報を取得するための、サンプリング調査の方にむしろ多くの時間を費やしていました。最近では農業技術の情報化の流れも大きくなりつつありますが、システムの最前線ともいべきセンシングの分野にはまだ解決すべき課題が多いのが現状です。昨今はデジタルカメラをはじめ、機器の小型化と低コスト化には目をみはるものがあり、工夫次第で面白い研究もできそうです。大学では若い学生の新鮮な発想力と真摯な取り組みに触発されつつ、発展途上の作物センシング技術に取り組んでいます。

勤務地は、埼玉県鴻巣市、茨城県つくば市、栃木県西那須野町（現 那須塩原市）と、関東を中心に幾度か転勤を経験しましたが、九州・鹿児島はまったく初めての地です。先輩・同僚教員のみなさまに助けられながら、曲りなりにもなんとか日々の職務を続けています。

連大ではこれまでに副査を 2 回、主査を 1 回務めました。このときの主査は定年でご退職の先生の途中リリーフ役ということで、実質的には博士を育てた経験はございません。また、連大代議員の仕事の内容や行事のスケジュールなどもまだ十分に把握・理解できていません。鹿大農学部には、私より識見も実力もある先生がいらっしゃるのですが、諸般の事情で今回は私がお引き受けすることになりました。なんとか無事、次代のホープに引き継げるよう努めてまいりたいと存じます。靱井研究科長、寺田副科長をはじめ、代議員のみなさまや事務部門の方々にお教えを賜りながら勤めを果たしていきたいと考えています。

連大は九州、沖縄という地域内ながら、お互い地理的にも距離のある各構成大学間でうまく連携を取りながら、ひとつの大学院として機能していることにたいへん感銘を受けるとともに、そこで運営に携わる方々のご苦勞は並大抵のものではないと日頃より感じています。本年度は連大発足から 30 周年の節目の年ということでさらに行事なども企画されています。新米の代議員ではありますが、微力ながらお役に立てるよう努力したいと思います。

ご挨拶



応用生命科学専攻
食品機能科学連合講座
鹿児島大学教授 水産学部
小松 正治

この度、代議員を仰せつかりました鹿児島大学水産学部の小松正治と申します。前代議員の木村郁夫先生から代議員の就任依頼をいただきました。今から二十数年前に鹿児島連大で博士の学位を取得したOBとして、連大への恩返しができればと思い、就任をお引き受けいたしました。ご迷惑をおかけすることもあると思いますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

私が博士課程に在籍していた当時は、食品化学研究室（林 征一 教授）に所属し、二ホンウナギや甲殻類の血清または血リンパリポタンパク質、特に卵黄前駆体複合タンパク質のビテロゲニンの性状について研究し、既知分子の新たな機能性を見出すことを目指す研究をしておりました。学位取得後は水産学部を離れ、生命科学系の複数の研究室を渡り歩き、生命科学に対する多様な考え方や手技を学びました。10年ほど前に水産学部に戻る機会を得まして、現在は、水生生物に特化せず多様な生物資源に由来する化合物の機能性について研究しています。とは言いましても水産学部に所属している立場として、富栄養化した湖沼などに発生するアオコに着目し、アオコを形成するシアノバクテリアの一部の種が産生する肝臓毒マイクロシスチンの機能性についての研究に力を注いでいます。マイクロシスチンは、動物の肝臓を標的とし、プロテインホスファターゼ活性を阻害して細胞死を誘発する毒性化合物として知られています。また、曝露条件次第では細胞増殖を活性化することも知られており、変異細胞に作用すると発がんを誘発する発がんプロモーターとしても機能します。最近、私どもの研究室では、マイクロシスチンが肝臓を標的とするメカニズムを明らかにしました。また、マイクロシスチン曝露後に剥離・浮遊した死にゆくはずの細胞が復活し、性質の異なる細胞に変化することを突き止めました。現在、鹿児島連大への進学を希望している修士課程の留学生を中心にその性状解析を進めています。この現象は胚発生、傷の修復、ならびにがんの転移との関連が示唆されるものであり、今後の研究の進展を楽しみにしています。

学生たちと研究の面白さや楽しさ、時には苦しさを共にしながら、代議員として鹿児島連大の発展に微力ながら貢献できればと思っています。

代議委員就任のご挨拶



農水圏資源環境科学専攻
生物環境保全科学連合講座
琉球大学教授農学部
鬼頭 誠

本年度から代議委員を務めることになりました。連大の指導学生はおりませんし、同じ連合講座からは佐賀大の染谷先生が代議委員を務めており、今回は順番ではないと思っておりました。就任するからには責任を持って鹿児島連大の発展に微力ながら全力を尽くしたいと思っております。初めてのことでご迷惑をおかけするかと思いますが、よろしくお願いいたします。

私は植物栄養肥料学を専門にしています。主にマメ科植物の窒素固定とリン栄養を菌根菌との関係も含めて研究を行っています。最近ではマメ科ではありませんがソバのリン栄養に関する研究も行っていきます。また、これらの研究成果の一部を利用した農業教育にも関心を持っており、救育学部の技術・家庭科、美術科、社会科の教員とも共同研究を展開し始めています。過去の研究業績など詳細はHP (<https://kouchiriyou.jimdo.com>) をご覧ください。

連大との関わりを振り返ると副指導教員になって以来15年以上が経っておりますが、実質的に指導した学生は留学生が1名だけであり、その他は副指導教員や論文審査委員として、また、プロジェクト研究のメンバーとして多額の教育研究費を使わせていただいているだけだったように思います。今後は連大学生の主旨指導教員としてさらに貢献していきたいと思っています。私の専門分野に関連した「ひたむきさ」のある学生がおられましたら是非ご紹介ください。

Life and Achievements of a Student and Delegate Member of Rendai in Japan



Course: Science of Bioresource Production
Major: Tropical Bioresource and Plant Resource Production
Professor, Faculty of Agriculture, University of the Ryukyus
Md. Amzad Hossain

I have been appointed as a delegate member of the United Graduate School of Agricultural Sciences (Rendai), Kagoshima University for two years (April 2018 to March 2020). I would like to express my gratitude to all academic members for giving me such the opportunity to involve myself in development activities of the Rendai. As I am a non-Japanese with limited knowledge in law and regulation, I am trying my best to accomplish my responsibilities with the kind support of office staffs and other professors. I feel proud to introduce my life and achievements in Japan as a student and delegate member of this Renadai.

I received B. Sc. Ag. degree from Sher-e-Bangla Agricultural University (former name BAI, BAU) in 1990 and came to Japan in 1992 as a private research-student of the University of the Ryukyus. My respected supervisor professor Yukio Ishimine started discussion about research topic and asked me to learn power tiller operation from the third day of my arrival in Japan. A technician started to teach me power tiller operation, but it was difficult to me. I tried my best to follow him, and the technician said me majime, but I did not understand the word that time. We both had language problem in Japanese or English, but we understood each other through our eyes and body languages.

I continued my research successfully, but faced a big problem in the master entrance examination. The entrance examination for foreign private students was in Japanese. I took part in the examination but did not succeed. I got frustration but continued my research with patience and published an article in the University journal next year. I was so lucky that some professors including dean attended in my paper presentation at the VII Pacific Science Inter-Congress held in Okinawa in 1993. After the session, some professors congratulated me, and Professor Teruo Higa asked me to meet him in his office in the following day. I met professor Higa who provided me 30,000 yen per month as scholarship from his own fund though I was working with other professor. I still feel that amount of scholarship more valuable than any amount of money. The faculty professors discussed about my admission problem and changed the entrance examination rule from Japanese to English and I succeeded in the entrance examination next year.

My achievement in research-student period was highly appreciated and I was awarded Rotary Yoneyama Scholarship for master's study. I joined monthly gathering of Rotary Club, and came to know that the scholarship money is coming from the donation of the club members, and some members' children do part time job for their education expenses. I understood the value of the scholarship and worked hard in master's course. The outstanding achievement in master's course gave me opportunity to obtain Japanese government scholarship for the doctoral study.

When I was in third year of doctoral course, my research advisor professor Ishimine offered me to work with him in his lab as researcher of a company (Manda Fermentation Co. Ltd.). I started my job just after completion of my Ph. D. In the second year of my job, I was promoted to next position and my salary was increased by

30%. I was working on weed, sugarcane, turmeric and plant growth promoters.



Weed Science Society Award, 2005



Okinawa Research Promising Award, 2014

My publications were recognized valuable in science societies and I received Prominent Achievement Award of Weed Science Society of Japan in 2005. The University of the Ryukyus recognized my achievement and recruited me as associate professor for five years. In 2011, the University of the Ryukyus recruited me permanently as associate professor of Faculty of Agriculture. I have developed cultivation technology of turmeric for sustainable production and a turmeric variety 'Ryudai gold'. I did collaboration research with many companies and developed several products from turmeric. My works were recognized valuable in education, sciences, agricultural production and industrial purposes locally and internationally, and I received Okinawa Research Promising Award in Natural Science in 2014.

I became vice advisor in 2009 and major advisor in 2010 for the doctoral course of Rendai. I have already supervised four doctoral students as major advisor and one as vice advisor. Presently, I am major advisor for five doctoral students. I have supervised seven MS students and 13 undergraduate students of the University of the Ryukyus. I am the author of 50 referred papers, 19 non-referred papers, 6 review and symposium papers, 45 abstracts and two book chapters. My research and academic activities were broadcasted four times on television and published 15 times in reputed newspapers. I delivered special-lecture 72 times to the farm and industry oriented organizations, and received 19 research grants from different organizations. I received JSPS invited researcher and special researcher from other countries. I have been serving as editor and reviewer of several international journals. All my research, academic and social activities were highly appreciated and the University of the Ryukyus promoted me to professor in a very special way.

I believe that responsibilities, gratefulness, honesty and sincerity make life more powerful and enjoyable. You have to love the place and people where you are now. When you live one day more you must return at least what you consume in the day. Do your responsibilities just to satisfy yourself, not to show other people. Your sincerities and works must be recognized by the surrounding people if you do not want it, and you can change something for your better life as well as others.

As a student and delegate member of Rendai, I would like to say that it is a wonderful academic organization where highly specialist professors supervise each student efficiently. Students from different countries earn multidisciplinary knowledge related to agriculture and human life. I wish all the members including past, present and future students of Rendai will continue their dedication to improving quality food, environment and health in the world.

◇ 新入生の素顔

平成29年10月入学（6名）

【生物生産科学・Science of Bioresource Production】 熱帯資源・植物生産科学・Tropical Bioresource and Plant Resource Production

ウィーナボン チャンタシン
Weenaporn Juntasin (Thailand)



Title of Research: Studies on Seed Production of *Brachiaria* spp. under Different Climatic Conditions and Cultivation Practices for Maximizing Seed Yield

Advisory Professor: Dr. Yasuhiro Kawamoto (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Dr. Yoshimi Imura (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Dr. Shin Okamoto (Kagoshima University)

“Sawasdee!” (mean “hello” in Thai), my name is Weenaporn Juntasin from Thailand, the land of smile. Thailand, officially the Kingdom of Thailand and formerly known as Siam, is a country at the center of the Indochinese peninsula in Southeast Asia. My country embraces a rich diversity of cultures and traditions. With its proud history, tropical climate and renowned hospitality, the kingdom is a never-ending source of fascination and pleasure for international visitors. I obtained my BSc. (Biology) major Zoology and MSc. (Agriculture) major Animal Science from Chiangmai University, Thailand in 1999 and 2004 respectively. I started my first job as an animal husbandry technical officer for Heifer International (Thailand), the international non profit organization working to end hunger and poverty around the world by providing livestock and training to struggling communities since 2004. I used to work as a researcher, corporate editor (Thai language), Secretary for CEO and knowledge resource division manager of Farm Chokchai Group, Thailand for more over seven years (2005-2012). In 2006, I got an opportunity to visit Japan for one month as Thai youth representative in the ASEAN-Japan youth invitation program, it is held by Japan International Cooperation Agency (JICA). I am serving as a government staff under the Department of Livestock Development (DLD), Ministry of Agriculture and Cooperatives, Thailand. I have been working as an animal husbandry technical officer at Lampang Animal Nutrition Research and Development Center, Bureau of Animal Nutrition Development from 2012 until now. Since I worked as a government officer in DLD over five years, my research interests are ruminant nutrition, especially cattle feed management, forage crop management, roughage quality and security. I got a chance to join the research project entitled “Evaluation of breeding and promising lines of *Brachiaria* for new varieties” at University of the Ryukyus for three weeks (1st-24th February, 2017). It is the collaborative project between University of the Ryukyus and DLD, Thailand which tried to developing and testing a new variety of grass for livestock feeding and will be expanded to farmer in the future. Now I am a PhD student in the Tropical Pasture Science Laboratory, I will study the effect of different climatic conditions on *Brachiaria* hybrids seed production and improve seed yield and seed quality of *Brachiaria* hybrids by seed crops management practices and also identify the best method to break seed dormancy and promote germination of *Brachiaria* hybrid seeds. I really want to improve the quality of roughage in Thailand which can maximize nutritive value, production, digestibility and absorption. Finally, high quality roughage will reduce farm operation cost and will give better living conditions of farmers.

I hope that I will be able to gained scientific knowledge, experiences and establish good relationships with new people during three-year study in Japan which will give more benefits for my country.

Finally, I would like to pass my special gratitude to Professor Dr. Yasuhiro Kawamoto, who is my inspiration for his helpful support and supervision for my study in Japan. I would like to say thank you for giving me an opportunity and everything you have done for me.

地域・国際資源経済学・Regional and Global Resource Economics

グエン ティ キム クエン
Nguyen Thi Kim Quyen (Vietnamese)



Title of Research: The current Situation and Issues with the Shrimp farming Industry in Vietnam:
Management Improvement for the Mekong Delta

Advisory Professor: Masaaki SANO (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Mizuho KUGA (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Syunsuke KOSHIO (Kagoshima University)

Hello, my name is Quyen from Vietnam. I was born in 1987 in Vinh Long province, located in the Mekong Delta, Vietnam. I pursued my Bachelor in Agricultural Economics in 2009 in Cantho University, Vietnam. After that, I was recruited to be a lecturer of Department of Fisheries Economics and Management, College of Aquaculture and Fisheries, Cantho University, Vietnam. During the period of 2012 – 2014, I followed Master degree in Aquaculture and Aquatic Resources Management, Asian Institute of Technology, Thailand. From October 2017, I have become the first year student of doctoral course in Kagoshima University, Japan under the scholarship of Loans from Cantho University Improvement Project.

My favorite research topic is management of shrimp industry which was motivated by the current situation of shrimp in my country. Shrimp products play an essential role of the economy by volume and value. However, farmers have faced great challenges to decreasing production, low quality, disease outbreak and uncertain market. The study will be carried out from 2017 to 2020 with two times of data collection in Vietnam. Currently, I am going to conduct research with literature review and follow doctoral course program at Kagoshima University. After finishing doctoral program here, I will back to Vietnam with the professional and comprehensive knowledge to partly improve management of shrimp industry of the country. In order to achieve such desire, I am looking forward to learning and sharing with enthusiasm members and students of the university. Together with my willingness to learn new things and strong motivation, it's believed that my target will be reached someday.

Regarding my hobby, I really enjoy outdoor activities and learnings/discovering new things. I also like to talk and share with others, hence, making new friends is also my desire.

Thank you so much for such a valuable opportunity!

Sincerely yours,

【応用生命科学・Biological Science and Technology】
生物機能科学・Bioscience and Biotechnology

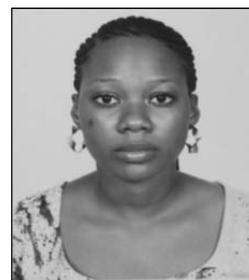
フィファメ オリアン ウ ス アゾ
Fifamè Auriane OUSSOU-AZO (Beninese)

Title of Research: Research and development of early detection methods for Cashew-devastating pathogens

Advisory Professor: M. C. Mundé'lanji VESTERGAARD (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Taiki FUTAGAMI (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Genta KOBAYASHI (Saga University)



Hi everyone, I am Auriane OUSSOU-AZO, student in the United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University. I come from Benin, a West African country. My education until Master is received in my country. I graduated from the Faculty of Agricultural Sciences at the University of Abomey-Calavi, where I studied agronomy with focus on Forestry Resources Management. Then, I come to Japan, to continue with doctoral courses in biological sciences and technology.

My interest in this new field of study lies in its use and application to detect and control pathogens in forestry as well as in other fields. The results will be beneficial as well for my country than for others including Japan

In addition to the physical, moral and technical environment, the city of Kagoshima offers me the opportunity to discover Japan, to know and learn about its culture and to collaborate with a great diversity of the scientific world.

【農水圏資源環境科学・Resource and Environmental Science of Agriculture,
Forestry and Fisheries】
生物環境保全科学・Environmental Science and Conservation Biology

たけごし めぐみ
竹腰 恵 (日本)



研究題目：ジャガイモそうか病の予測診断と生態学的防除技術に関する研究
主指導教員：境 雅夫 (鹿児島大学)
第一副指導教員：池永 誠 (鹿児島大学)
第二副指導教員：染谷 孝 (佐賀大学)

はじめまして。10月より社会人ドクターとして入学しました、鹿児島大学所属の竹腰 恵と申します。私は宮城県・仙台市生まれの、東京農工大学／大学院を修了...と、これまで九州とはご縁のない生活を送ってきましたが、この度、境先生をはじめとした素晴らしい先生方と巡り合うことができ、鹿児島大学連大博士課程で改めて研究をご指導いただけることとなりました。修士課程修了後は現在に至るまで、片倉コープアグリ株式会社 (旧：片倉チッカリン(株)) という有機質肥料会社に就職し、主に有用な有機物や微生物を利用した資材の開発業務を行っております。博士課程ではジャガイモそうか病にターゲットを当てて研究を行う予定です。

ジャガイモそうか病は、*Streptomyces*属によって引き起こされる病害で、土壌および種いもによって伝染され、その防除策の一つとして土壌消毒や化学農薬が使用されておりますが、安全性やコストなどの問題から代替技術が求められています。そこで、一般的にそうか病菌は酸性条件下で活動が抑制されるという性質を利用して土壌のpH矯正による対策が行われてきましたが、化学性による対策だけでは防除が困難になりつつあり、生物性の改善による対策も必要とされています。一方、近年ではそうか病に限らず土壌病害の防除策として、土壌診断に基づいた適切な対策および土壌環境 (とくに生物性) を健全に維持することによる病原菌を定着させない! 増やさない! 予防対策が望まれています。いくつかの有機質資材においてはジャガイモそうか病に対して予防効果が期待できるとの報告が為されています。そこで私の研究では有機質資材によるそうか病発病抑制メカニズムを解明することで、これら資材をより有効的に活用したそうか病防除体系の構築を目指す予定です。

実験ベースは弊社研究所 (茨城県土浦市) のため、お会いする機会は少ないかもしれませんが、これからよろしくお願ひ致します。

トラン グ エ ン ド ヨ イ ホ ア
TRAN NGUYEN DUY KHOA (Viet Nam)

Title of Research: Development of the digestive system in greater amberjack (*Seriola dumerili*)
and red seabream (*Pagrus major*) larvae

Advisory Professor: KOTANI Tomonari (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: ISHIKAWA Manabu (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: KOSHIO Shunsuke (Kagoshima University)



Tran Nguyen Duy Khoa was born on 17 October 1988 in Ben Tre, Vietnam. From 1994 to 2006, he had primary school, secondary school and high school in Ben Tre province. When Khoa was a high school student, he won an award in biology for gifted students in his province.

After passing a tough exam in 2006, Khoa entered Can Tho University - one of the most prestigious universities in Vietnam. He completed his program and received Bachelor of Science in Aquaculture in 2010 with a good result. Following his graduation, Khoa was recruited by College of Aquaculture and Fisheries, Can Tho University as a young researcher in the field of marine aquaculture. He was involved in several projects related to Coastal Aquaculture.

In 2012, Khoa got a scholarship for his Master program in Institute of Tropical Aquaculture, Universiti Malaysia Terengganu, Malaysia. He finished his program on November 2015 on fish health management, then went back to Can Tho University and continued his work as a lecturer, focusing on crustacean and marine fish breeding, marine aquaculture.

From October 2017, after passing the entrance examination, He started his Doctoral course in Faculty of Fisheries, Kagoshima University under Vietnamese government scholarship. His research will be concentrated on marine fish breeding and larval culture

チ ョ ウ ヨ ウ コ ン
ZHANG YUKUN (CHINESE)

Title of Research: Studies on the probiotics and fermented soybean meal for cultured fish species

Advisory Professor: Manabu Ishikawa (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Shunsuke Koshio (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Yutaka Takeuchi (Kagoshima University)



My name is Zhang Yukun, come from Xi'an city of China. It is a great honor for me to have this chance to do Ph.D course in Kagoshima University. Two years ago, I had ever studied in Kagoshima University Faculty of Fisheries as a research student for half year (2015.04—2015.09) and obtained guidance from prof. Shunsuke Koshio. I was deeply attracted by the developed fisheries science in Kagoshima University. Therefore, I applied for the Japanese government scholarship. After 9 months of learning Japanese in MEXT, I returned to Kagoshima University as a research student in October, 2016 and finally became a member of the United Graduate School of Agricultural Sciences in October, 2017.

During my undergraduate period in Northwest A&F University, China, I studied about animal science, which laid a foundation for further study. My Master's major was Special Economic Animal Breeding and my research fields were animal nutrition, feed science and technical, microbiology, immunity, molecular biology. During the Master's period in Northwest A&F University, my study was about the effects of *Bacteroides fragilis* and *Bacillus subtilis* on young rabbits' intestinal microflora and immune. During the research student period in Kagoshima University Faculty of Fisheries, my study was about the effects of probiotics as feed supplements for red sea bream.

In my doctoral study, I will continue to study on the probiotics for cultured fish species and also aim to develop the fermented soybean meal which would improve the nutritional value of soybean meal by altering the native composition. Fish

meal is the most expensive ingredient in aqua feed, reducing the amount of fishmeal in diet formulations, without reducing fish performance, could have a positive impact on the profitability of commercial fish production. What's more, study on the processing technology and application of fermented soybean meal will have a positive effect on partial substitution of fish meal. I strive to gain more knowledge on my field of expertise and face the difficulties calmly and bravely in the life. Now I live together with my wife and soon to be born daughter, so it is important to keep balance of the family and hard study. I will enjoy and cherish the life in Kagoshima and I regard it as my second hometown, which is really a beautiful city. The experience here will be my most valuable memory forever.

平成 30 年 4 月入学 (24 名)

【生物生産科学・Science of Bioresource Production】
熱帯資源・植物生産科学・Tropical Bioresource and Plant Resource Production

レ ト ロ ン ル
LE TRONG LU (Vietnamese)

Title of Research: Interaction between Iron and Macronutrients on productivity and qualities of strawberry (*Fragaria x ananassa* Duch.) grown under different light qualities in plant factory

Advisory Professor: Dr. KAWAMITSU Yoshinobu (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: Dr. URESHINO Kenji (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: Dr. YAMAMOTO Masashi (Kagoshima University)



シン チョオ- モイ ク'イン-

Xin chào mọi người! (Good morning everybody!) My name is LE TRONG LU (it will be nice to call me ル). I am a son

レ ト ロ ン ル

of an agricultural area in the Middle of Vietnam, named Phu Yen province, living in “agricultural atmosphere” that maybe the reason which made me love agriculture and choose it for studying. I love to travel to many places to see how different people in different regions do agriculture, how wonderful it is! This can be explained why I finished my bachelor thesis in the highland (Da Lat city), and my master dissertation in the Southern (Ho Chi Minh City) of Vietnam, and now I reached my destination - Okinawa, Japan and joining study of The united Graduated School of Agriculture Science, Kagoshima University.

For my study in Ph.D. course, I focus on the productivity and qualities of strawberry in the plant factory conditions under effects of mineral nutrients. Using plant factory, we can bring plants to anywhere for growing, however the main issues are yield, qualities of plant products and energy issues. Because I think yield and qualities of plant products is the final goal of crop production. So, now I first focus on studying elements that affect on yield, qualities of strawberry in my study.

To have chance to study in Japan and to become a student of The united Graduated School of Agriculture Science, Kagoshima University, I am really grateful to my Sensei Dr. Quynh Thi Nguyen and Prof. Dr. KAWAMITSU Yoshinobu. Through six months of Kenkyu sei period at laboratory of KAWAMITSU Sensei, I can make sure that I am so lucky and I can learn many things here from study style to the way of thinking that can support me to complete myself. 先生、どもありがとうございます。

I really want to make friends and to communicate with everybody. For my opinion, strong and sincere friendship will support our development, make us stronger. So, let make a science network which based on the same original education source from Rendai! This is my email address to connect: letronglu1990@gmail.com

Last thing, I would like to show my respect and gratitude to The united Graduated School of Agriculture Science, Kagoshima University for giving me a chance to share my information also my story.

Thank you so much!

Title of Research: Strategies of Transient Submergence Tolerance Cope with
Translocation of Photosynthetic Products in Rice Plant

Advisory Professor: Jun-Ichi Sakagami (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Shigehisa Okamoto (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Yoshinobu Kawamitsu (Ryukyus University)



I was born in Kudus (Central Java) then spent my childhood in Klaten, a small city in Central Java, Indonesia. I began having interest in agriculture since elementary school because sometimes I joined my uncle's visiting research field on various agricultural crops, especially rice. Observing plant growth is kind of pleasure for me. Since then, I decided that would enter university which has major in agriculture.

I moved to Bogor (West Java) to attend my bachelor degree in the Departement of Agronomy and Horticulture, Bogor Agricultural University after passed national exam of public university entrance. I did research on Fertilizer and Decomposer Influence on Organic Rice Growth and Production for my bachelor thesis which published in AGH Online Journal 1(1):149-155, 2014.

My master degree I enrolled in the study program of Agronomy and Horticulture, Graduate School of Bogor Agricultural University in 2013 funded by Directorate General of Higher Education (Ministry of Research, Technology and Higher Education, Indonesia). I interest on studying plant stress physiology because most of unused land in Indonesia are marginal land which potential to be planted but lack of several things regarding optimum condition for plant growth. By modifying cultivation methods and improving plant characters, marginal land can be utilized to gain more crop production. I focused my research on Rice Adaptation to Submergence Stress, screened local genotypes which has tolerance possibility to overcome anaerobic condition. Regarding this research, I received developing countries travel support from ACIAR (Australian Centre for International Agricultural Research) to present "Study of Root Rice System on Various Depth of Submergence" on the 9th Symposium for International Society of Root Research (ISRR9) which was held in Canberra, Australia at October 2015. This study was also published on AGRIVITA Journal of Agricultural Science 39(2):119-127, 2017.

I'm pursuing my Doctoral degree in United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University with Japanese Government Scholarship from The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT). I belong to Tropical Bioresource and Plant Resource Production's major chair, course of Science of Bioresource Production. Continuing my previous study, I specified my study on flash flooding, specific flooding type occurs on tidal swamp area which mostly located in Sumatra and Kalimantan (Indonesia). The role of plant hormone and photosynthetic product distribution during flash flooding will determine plant tolerance mechanism, but no clear evidence has been reported. I'd like to investigate the correlation between them in my doctoral research. If plant hormone controls the whole mechanism, plant adaptation to flash flooding can be manipulated by controlling plant hormone activity. It will make possibility to expand rice extensification program in tidal swamp area which will contribute to increase rice productivity.

なかお よしひろ
中尾 祥宏 (日本)



研究題目：イネの天水直播栽培における種子プライミング技術体系の確立

主指導教員：坂上 潤一 (鹿児島大学)

第一副指導教員：朴 炳宰 (鹿児島大学)

第二副指導教員：鄭 紹輝 (佐賀大学)

鹿児島大学熱帯作物学研究室所属の中尾祥宏と申します。鹿児島で生まれ育ち、地元の大学に入学して6年が経ちました。この度、無事、連合農学研究科に進学することができ大変うれしく思っております。進学にあたっては鹿児島大学の先生方、他大学の先生や先輩方からも多くの応援や後押しをいただき、大変感謝しております。

所属研究室では熱帯地域における作物の安定生産を目指した研究を行っています。研究活動ではこれまでインドネシアや東アフリカのウガンダ共和国に訪れました。特に、研究の対象としているサブサハラ以南のアフリカ地域では稲作地域の71%が天水条件で行われており水資源を降雨や河川の氾濫水に依存しています。そのような地域で安定的かつ持続的な農業生産を達成できるようなイネの栽培技術の開発に向けた研究を行っています。昨年度は実際に半年間、アフリカのウガンダ共和国に派遣していただき、自身の研究を行いながら現地の農業生産の現場に触れることができました。そこでは山積する問題、技術普及と研究のギャップを痛感しました。また自身の見識の狭さと研究の現状に強い危機感を覚えました。この三年間で少しでも、理想とする研究者に近づくことができるよう精進して参ります。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いたします。

ひやね しんいち
比屋根 真一 (日本)



研究題目：サトウキビの蒸発散特性と生長曲線解析法を用いた収量予測に関する研究

主指導教員：川満 芳信 (琉球大学)

第一副指導教員：平良 英三 (琉球大学)

第二副指導教員：鄭 紹輝 (佐賀大学)

本研究では、サトウキビの生育、収量を気象要因の総合指数である蒸発散量との関係から推定する方法を確立する。既報において、サトウキビ圃場における蒸発散特性を明らかにするため、宮古島の夏植えにおいて熱収支ボーエン比法を用いて蒸発散量の測定を行った。更に、基準蒸発散量に作物係数を乗じる方法での蒸発散量の推定の可能性を検討した。また、サトウキビの生育や蒸発散量に影響を及ぼす土壌水分量の推定方法を確立するため、タンクモデル法のサトウキビ圃場への適応を試みた。

沖縄県糸満市において一般的に栽培されている品種 NiF8 を供試して、植付け時期と収穫時期を変えた栽培を行い、サトウキビ畑における蒸発散量と生長、収量および乾物重との関係を検討し、気象要因の総合指標として蒸発散量活用の可能性を検討する。

沖縄県において長期間調査が行われている気象感応試験のサトウキビ生育および収量データを活用し、生長曲線解析法をもちいたサトウキビの生育および最終収量の推定、評価の精度の向上を試みる。さらに、生長曲線解析法をもちいたサトウキビの糖収量の予測とその評価精度の向上を試みる。

最後に、サトウキビの生育、収量と蒸発散量との関係から生長曲線解析法をもちいたサトウキビ生育、収量予測の可能性について考察を行い、沖縄県のサトウキビ生産の安定または向上に寄与する栽培管理技術について提案を行う

・蘭光 健人 (日本)

研究 題 目 :

主 指 導 教 員 : 一色 司郎 (佐賀大学)

第一副指導教員: 辻田 有紀 (佐賀大学)

第二副指導教員: 嬉野 健次 (琉球大学)

動物資源生産科学・Animal Resource Production

おやま ひでみ
小山 秀美 (日本)



研 究 題 目 : 黒毛和種の不良形質に関する遺伝育種学的研究

主 指 導 教 員 : 下桐 猛 (鹿児島大学)

第一副指導教員: 岡本 新 (鹿児島大学)

第二副指導教員: 川本 康博 (琉球大学)

鹿児島大学家畜育種学研究室所属の小山秀美と申します。現在は、独立行政法人家畜改良センター改良部情報分析課の方で勤務しております。

家畜改良センターは農林水産省の政策を実施する機関であり、全国的な視点での家畜(牛・豚・馬・羊・山羊・鶏)の育種改良(種畜造成等)、遺伝資源の保存、および優良な飼料作物種苗の供給等に努めています。北は北海道から南は宮崎県まで、全国に10牧場1支場があります。私の所属する情報分析課は本所である福島県にあります。生まれも育ちも西日本である私にとっては、東北は新鮮なことばかりです。例えば野生動物ですと、西では見かけないカッコウがいます。東北の春は遅いのですが、5月頃に職場で「カッコウ、カッコウ・・・」と鳴いています。初めは聞いたことがなかったのですごく感動しましたが、人間、すぐ飽きが来ます。彼らの声は大きく、一定間隔で2,3時間鳴き続けるので、カッコウがゲシュタルト崩壊しそうになることもしばしば。また、東北といえご存じの通り、冬が長く積雪量が多いため、身近にスノースポーツを楽しむことができます。さすがに寒いだけあって雪質は素晴らしいです。ただし、雪道運転には注意が必要です。運転を楽しみ過ぎたであろう車がスリップした結果、田んぼに刺さっているのを稀に見かけます。日々、驚きと発見の連続ではありますが、“その土地の良さ”に触れながら楽しく過ごしております。

少し話が逸れましたが、情報分析課の主な業務は、家畜の遺伝的能力評価です。中でも私は、黒毛和種の繁殖形質や枝肉形質における育種価評価やゲノミック評価を担当しております。

博士課程では、「黒毛和種の不良形質に関する遺伝育種学的研究」に取り組み、黒毛和種における難産や死産、白斑というような不良形質の遺伝的な関与や、他形質との関連性を調査することで原因を探索し、遺伝的改良の可能性を検討します。どうぞよろしくお願ひします。

マ
馬
レイコン
麗坤 (中国)



研究題目：中国における契約農業の展開に関する研究

主指導教員：坂井 教郎 (鹿児島大学)

第一副指導教員：田代 正一 (鹿児島大学)

第二副指導教員：内藤 重之 (琉球大学)

はじめまして。今年度より鹿児島大学連合農学研究科に進学しました、馬麗坤と申します。所属は鹿児島大学で、修士を通して鹿児島生活4年目になります。研究室に入ったときに感じた忘れずに、これまで以上に研究に励んでいこうと考えております。

私は現在、坂井教郎先生の農業経済学研究室に在籍しており、修士を通して、中国の契約企業と契約農民の収益現状について研究してきました。現在、中国における契約農業の展開に関する研究を実施しています。中国の契約農業に着目し、契約農業の発展方向、契約農家の取引実態および農家の所得の変化について明らかにすることを目的とします。中国では農民人口が多く、農民の生活レベルを高めることと農業所得の増加は中国政府にとって重要な課題となっている。三農問題の中核である農家を保護することのために、政府は農民專業合作社を導入し始めた。また、現在、農民は食品企業と契約することの経営形態も多くある。しかし、現在契約農家の経営実態、生産性およびの収益性については不明である。

現在、これらの中国の契約農業の発展における不明な点を解明するてがかりになるのではないかと考えて、研究を進めています。

これまでの大学生活が一瞬であったのと同様、これからの生活もあっという間に過ぎてしまうと思います。ひたすら研究に励み、研究者として生きていくためのスキルとセンスを身につけていきたいと考えています。これから3年間、学位取得に向けて精一杯励んでいきたいと思っております。どうぞよろしく願いいたします。

チンタカカラリヤッダ
Chinthaka Karalliyadda (Sri Lanka)

Title of Research: The Role of Social Influence on Planning and Management of Agricultural Resources in Sri Lanka

Advisory Professor: Miho FUJIMURA (Saga University)

First Vice-Advisory Professor: Tsuji KAZUNARI (Saga University)

Second Vice-Advisory Professor: Norio SAKAI (Kagoshima University)



I obtained my first degree in Agricultural Technology and Management at the University of Peradeniya in 2011 and Master's degree in Organizational Management in 2014. After the graduation in 2011, I worked in two private sector agriculture companies until 2014. During that period I travelled to many agricultural communities in Sri Lanka and was able to gain many insights about the rural farming sector. In the middle of 2014, I entered to the Department of Agricultural Systems, Faculty of Agriculture, The Rajarata University of Sri Lanka as a lecturer in Agricultural Extension.

Following the path of eminent scholars who did their post-graduate studies in Japan, I came to Japan and entered to the Saga University as a research student in October 2016. After having a little hard time to adjust to the Japanese culture (especially the language), I registered as a Master's student at the Graduate School of Regional Design in Art and Economics in April 2017. As food safety and standard agricultural practices are highly concerned in the current world agricultural industry, I conducted my research on

the compliance behaviour of certified organic farmers in Sri Lanka. I identified that the farmers' compliance behaviour is a single output of a complex process, which still lacks systematic investigations. Therefore, after graduating in 2018, I entered the United Graduate School of Agricultural Science, Kagoshima University to further study about the farmers' behaviour in more intensely. Professor Miho Fujimura, Tsuji Kazunari and Noriko Sakai welcomed my research proposal and accepted to provide their valuable guidance to pursue my determination. Therefore I believe that their experiences and kindness will brighten my future.

As a young academic, I am excited to learn the essentials that need to master for a successful academic career. I believe the coming three years will be a wonderful time to enjoy and learn those things. Therefore, I am grateful to all those who are supporting me including the Japanese government for providing a scholarship (MEXT) and all other necessities to have a healthy life and a peaceful environment to carry out my studies.

きとう けいこ
鬼頭 景子 (日本)



研究題目：現代的水産業の発展に貢献しうる高等教育のあり方に関する研究

主指導教員：佐野 雅昭 (鹿児島大学)

第一副指導教員：久賀みず保 (鹿児島大学)

第二副指導教員：安樂 和彦 (鹿児島大学)

私は、鹿児島大学水産学部に教員として勤務しており、社会人として本年度より入学いたしました。水産学部での学生の海外への留学や研修参加の支援や留学生の受け入れ、英語開講科目を担当するなどグローバル化に関する業務を行なっています。その中で、水産業からの水産学部卒業生へのニーズは高いと感じていますが、社会がどのような専門知識や能力を持っている人材を必要とし、水産学部として期待されている人材を輩出できているのかを自問するようになり、連大の博士課程に入学することを決心しました。一般的に、大学へのニーズが専門知識を持ち合わせた人材ではなく、総合的な能力を求められるものに変化しているように感じられる中で、水産業での国際化も近年加速しており、大学での水産教育も変化していく必要があるかもしれません。

私自身、日本での大学生活は1年足らずで、学部・修士とアメリカ・オランダに留学し、日本の大学事情を分からないまま教員を始めてしまい、少し勝手が違って自国にいるのに違い（カルチャーショック？）を感じることもあります。修士まで専門としていた分野は環境科学・陸水学でしたが、キャリアを積むに従って、祖父が従事していた水産分野へと導かれたような気がしています。

これまでは目上の方々と仕事をさせていただくことが多かったのですが、現在の立場では大学院生また教員として若い世代とふれあう中で時代の変化も感じつつ、水産業の将来について考えていければと思っています。

【応用生命科学・Biological Science and Technology】
生物機能科学・Bioscience and Biotechnology

とかしき じきあん
渡嘉敷 直杏 (日本)



研究題目：黒麹菌 *Aspergillus luchuensis* の分子生物学的手法を用いた機能解析
主指導教員：外山 博英 (琉球大学)
第一副指導教員：水谷 治 (琉球大学)
第二副指導教員：二神 秦基 (鹿児島大学)

こんにちは。今年度より鹿児島連大に入学しました渡嘉敷直杏です。黒麹菌の分子生物学的な研究を行うための形質転換系の構築をベースに研究をしています。

身近な糸状菌である黄麹菌や白麹菌といった麹菌の遺伝子機能などを調べる際には、プロトプラスト-PEG 法という手法で麹菌の遺伝子操作を行うことが最も一般的です。これは多細胞生物である麹菌の細胞壁を酵素で溶かし、細胞膜を剥き出しにした単細胞状のプロトプラストに対して、DNA や酵素といったツールを導入することで形質転換を行う方法です。黒麹菌ではプロトプラストが長年取得できず、この方法を用いた研究で遅れが出ており、その解決を図ることがこれまでの私の主な研究内容にあたります。現在は黒麹菌の細胞壁を構成しているであろう α -1,3-glucan 合成遺伝子を破壊した株において順調に、安定してプロトプラストを得ることができ、今後は実験する上で絶対に必要になるマーカー遺伝子の取得をめざし、実験をより応用面へ進めていきたいと考えています。

鹿児島連大には多くの麹菌を取り扱う研究者が所属しているので、引き続き琉球大学で頑張りますが、研究に関して広くご指導いただける機会が得られればいいなと思います。また、趣味が旅行と散歩なので、鹿児島、佐賀に訪問できることはとても楽しみです。よろしくお願ひします。

こばやし みゆ
小林 未侑 (日本)



研究題目：PQQ とキノン類縁化合物による骨代謝と骨免疫に及ぼす影響に関する研究

主指導教員：外山博英 (琉球大学)
第一副指導教員：橘信二郎 (琉球大学)
第二副指導教員：坂尾こず枝 (鹿児島大学)

はじめまして。この度連合農学研究科に入学いたしました、小林未侑と申します。私が所属する琉球大学では、年間を通して鮮やかな花が咲いており、様々な種類の鳥やコウモリなどの動物を見ることができ、この環境をととても気に入っています。農学部に住む猫のみいちゃんは推定7歳で、私の大学生活は常にみいちゃんとともにあります。みいちゃんの写真が「猫めぐりカレンダー」に2度も採用されたことが、私の自慢です。

私は学部生時代から、ピロロキノリンキノン (PQQ) の生理学的作用について、細胞培養実験による研究を続けています。PQQ とは微生物によって作られる酸化還元酵素の補酵素で、自然界に広く分布し、身近な食品にも含まれている物質です。ビタミンB 群様の生理活性を示すバイオフィクターで、抗酸化作用や神経保護作用など多彩な生理活性が報告されています。経口摂された PQQ は速やかに腸管吸収され、ほとんどが体外に排出してしまうため、生体内濃度は極めて低く保たれます。一方、ヒトの母乳中からは、他の組織に比べて高濃度の PQQ が検出されており、PQQ が新生児の骨格形成や骨代謝、免疫系などに関与している可能性があります。これまでの研究で、水溶性である酸化型 PQQ の他に脂溶性のトリメチル化体 PQQ、また同じくキノン骨格を有するコエンザイム Q₁₀ が破骨細胞分化を抑制し、骨芽

細胞分化の初期応答を刺激することが示唆されています。

近年、日本の総人口に対する高齢人口の割合は27%を超え、高齢化が進む私たちの国では約1000万人の骨粗鬆症患者がいると推定されています。今後、世界的な超高齢化社会の到来にともない、骨粗鬆症に対する予防および治療法の改善は、公衆衛生学的にも喫緊の課題となっています。本研究では、PQQ およびキノン類縁化合物を用いて、骨代謝や骨免疫に及ぼす影響について、メカニズムを明らかにし、PQQ の生理学的意義について考察したいと思っています。また、PQQ が骨粗鬆症などの疾患に有効であることを期待しています。学位を取得できるように精一杯頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

そう でんとう
曾 伝 濤 (中国)



研究題目：紅麴における特徴的製造工程の意義の解明と呈味向上を目指した基礎研究

主指導教員：吉崎 由美子 (鹿児島大学)

第一副指導教員：高峯 和則 (鹿児島大学)

第二副指導教員：橘 信二郎 (琉球大学)

今年度から鹿児島大学大学院連合農学研究科応用生命科学専攻に入学しました曾伝濤と申します。私は中国国内の専攻が白酒醸造で、発酵食品に関しては、既にしっかりとした基礎を身に着けました。学部3年生の時は、学校の友好交流プロジェクトを通じて、日本で一年間の留学生活をおくりました。一年間で、たくさんの交流活動および見学活動に参加してから、日本の専念という精神を理解した上に、その精神に感心します。中国国内の専攻が白酒醸造で、鹿児島では先進の科学技術および実験設備を保有しているため、専攻学習の有利な武器になりました。そして、中日両国の交流が頻繁になっている時代背景のしたで、中日両国はたくさんの分野で相互依存し、相互促進しています。ですので、修士も鹿児島大学に所属していました。2018年3月、大学院生を卒業して、同年博士募集の試験に参加し、合格しました。

修士の研究テーマは紅麴製造における浸漬工程の効果です。紅麴とは、*Monascus* sp. で造られる麴の一つであり、中国の南部や台湾、日本の一部の発酵食品の製造に用いられます。中国における紅麴製麴法は、*Aspergillus* 属菌で造られる日本の白、黒、黄麴の製麴法とは異なる点が二つあります。一つ目は製麴前に、種麴を予め3%酢酸で3時間浸漬または醸造酒（アルコール度数10程度）で24時間浸漬の前処理を行うことです。これら前処理は、紅麴の雑菌汚染を妨ぐために行われていると考えられていますが、その詳細は明らかになっていません。二つ目は、紅麴製麴途中で麴に多量の水を散布することです。この散水工程は製麴中に一回から数回行われます。今までの実験では、この製麴における浸漬の効果と最適な浸漬条件を検討しました。

博士課程では、紅麴の研究を続けたいと思います。この紅麴における特徴的製造工程である2つの「浸漬」工程に着目し、その意義を理解することを目的に研究を進めます。

これから三年間どうぞ、よろしくお願いいたします。

・八木 永 (日本)

研究 題 目 :

主 指 導 教 員 : 金子 哲 (琉球大学)

第一副指導教員 : 高島 幸司 (琉球大学)

第二副指導教員 : 藤田 清貴 (鹿児島大学)

食品機能科学・Food Science and Nutrition

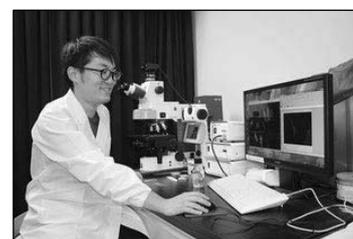
ほんだ あきのぶ
本田 晃伸 (日本)

研 究 題 目 : ティラピアシアリダーゼの生理機能の解明およびその養殖業への
応用法の開発

主 指 導 教 員 : 塩崎 一弘 (鹿児島大学)

第一副指導教員 : 小松 正治 (鹿児島大学)

第二副指導教員 : 藤田 清貴 (鹿児島大学)



初めまして、私は応用生命科学専攻食品機能学連合講座に所属している本田晃伸です。指導教員は塩崎一弘先生で、学部生の頃からお世話になっています。

学部生の頃から、ティラピアのシアリダーゼについて研究を行ってきました。糖鎖は胚発生や分化、環境変化に対応し変化することが知られています。糖鎖の末端にはシアル酸があり、脱シアリル化により糖鎖分解が始まります。シアリダーゼは糖鎖の末端にあるシアル酸を遊離することにより、糖鎖分解の初発反応を担っています。また、シアリダーゼによる脱シアリル化は糖鎖分解を促進するだけでなく、糖鎖分子のコンホメーションやレセプターによる認識機構、細胞接着や免疫機構などにも大きな影響を与えます。

したがって、糖鎖分解の初発反応を担うシアリダーゼは生物の様々な生理現象に関わっている重要な酵素と言えます。哺乳類では4種類のシアリダーゼ (Neu1、Neu2、Neu3 および Neu4)が存在し、酵素学的性状や細胞内局在、生理機能はそれぞれ異なっています。一方、魚類におけるシアリダーゼの報告は限られたものとなっていて、ゼブラフィッシュやメダカといった小型魚類のみでの研究しかありません。そこで、私は世界的に養殖されており、全ゲノム配列が利用可能であるティラピアに注目し、ティラピアのシアリダーゼについて研究を行ってきました。博士課程ではさらに研究に励み、糖鎖に注目したティラピア養殖の改善方法を開発していきたいと思っています。

論文2本投稿して3年でしっかり卒業できるよう頑張ります。これから3年間よろしくお願ひします。

むろい ゆきこ
室井 由起子 (日本)



研究題目：アミロイド病および糖尿病に対する食品素材の予防効果に関する研究

主指導教員：和田 浩二 (琉球大学)

第一副指導教員：高良 健作 (琉球大学)

第二副指導教員：渡邊 啓一 (佐賀大学)

初めまして。本年度より、連合農学研究科に入学しました室井由起子と申します。出身は、福岡県北九州市で、一度も福岡を離れたことがありません。鹿児島には、試験の時にいき、温泉の泉質の良さに感動して、これから何度か行く機会ができるので、楽しみです。休みの日は、美味しいものを食べて、温泉に入ることが多いです。

現在は、九州栄養福祉大学で働きながら、社会人として、勉強していく予定です。大学では管理栄養士免許を取得し、その後病院で働き、修士課程は、スポーツ栄養を専門として学んできました。スポーツは自分が行うより、観戦やサポートをすることが大好きです。今までは、人を対象として栄養指導等を専門に行ってきたため、これから、食品の機能性の研究を行うことがはじめてであり、不安な気持ちと楽しみな気持ちと半分半分です。

研究内容は、アミロイド病および、糖尿病に対する食品素材の予防効果についてです。鶏卵ペプチドおよび明日葉カルコンを使ってアミロイド線維について形成抑制効果を、抗糖尿病については二糖類分解酵素阻害、ポリオール経路阻害効果、グリケーションおよびAGEs産生抑制効果について研究していく予定です。

集中講義等で、会うことがあると思いますので、どうぞ仲良くしてください。よろしく申し上げます。

先端応用生命科学・Advanced Life Science

ま え だ ま ゆ み
眞榮田 麻友美 (日本)



研究題目：*Aspergillus luchuensis* 由来フェノール酸脱炭酸酵素に関する研究

主指導教員：平良 東紀 (琉球大学)

第一副指導教員：外山 博英 (琉球大学)

第二副指導教員：後藤 正利 (佐賀大学)

はじめまして。この度、連合農学研究科に進学しました眞榮田麻友美と申します。所属は琉球大学で応用微生物学研究室に配属されています。こう見えてハーフですが周りの人の顔立ちが濃い人が多いため、あまりハーフだと思われたことがありません。そして、英語が全然しゃべれず、生まれも育ちも沖縄なので生粋のウチナンチュと勝手に思っています！私の地元は沖縄の北部の山、海、川に囲まれた山間の小さな集落の出身です。現在は、地元からみたら都会な琉球大学付近に住んでいます。地元から出て7年になりますが、学部生の頃は地元のなまりがすごかったらしいですが（自覚がありません）、今では、なまりも抜けて都会に馴染んできていると思っています！

そして、私の研究内容は、沖縄の伝統的な蒸留酒である泡盛の古酒の特徴香として知られているバニリンの前駆体を作る酵素の研究をしています。バニリンの生成過程は原料米中のフェルラ酸 (FA) が黒麹菌のフェルラ酸エステラーゼによって遊離し、遊離したFAが脱炭酸されることでバニリンの前駆体である4-ビニルグアヤコール (4-VG) に変換され、貯蔵中に非酵素的酸化によってバニリンに変わることが知られています。これまでに、FAから4-VGへの変換は酸や熱、酵母や乳酸菌が保有するフェノール酸脱炭酸酵素 (PAD) によって行われていると考えられていました。一方、*Aspergillus luchuensis* のゲノム上に細菌や *Candida* 属と相同性を有する配列が存在することが知られています。私は、

学部生の頃から *A. luchuensis* 由来フェノール酸脱炭酸酵素 (AIPAD) の諸性質や誘導条件および麹中での発現確認などを行ってきました。博士課程では、誘導物質の同定および4-VG ができるまでの生成メカニズムについての解明を行いたいと思います。そして、バニリン香に富む泡盛ができればいいなと思っています。

これから、共通セミナーなどでお会いすることがあると思いますが、これからよろしくお願いします。

シャクン
Xie Kun (China)

Title of Research: Studies on the prevention effects and mechanisms of *Ampelopsis Grossedentata* (Vine tea) on metabolic syndrome

Advisory Professor: De-Xing HOU (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: SAKAO Kozue (Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: OKU Hirotsugu (University of the Ryukyus)

Thank you for giving me an opportunity to introduce myself. My name is xie kun (謝クン), and I come from China. My major is biologic science and technology, I am in the functional food laboratory of Kagoshima university agriculture faculty, Currently, I'm studying the effect of tea polyphenol to the metabolic syndrome, I realized, I enjoy the working about food science and the connection to the human health, this somehow further boosted my interest towards my research.

For the life in Kagoshima, when the first time I came, it is amazing to see the city seated so close to a volcano, with a pleasant climate and the special weather called "Ash". I have been through the first spring in Kagoshima, enjoyed the sight of sakura blossom rain, tasted delicious sushi, mounted the Kaimon-dake, and feel the warm and kind of Kyushu people.

As a foreign student with a little known about Japanese language, it's hard to communication with local people when the first came. Every day is an adventure, although I am taking effort in study Japanese language and culture, it's still not good enough, even though the life of studying abroad is still full of hope and joy. And now, I'm going to find a new adventure, thanks for reading.

アブ ユウスフ ホッシン
• Abu Yousuf Hossin (Bangladesh)

Title of Research: Studies on anti-obesity compound in Okinawa traditional vegetables: Identification of chemical structure, bioavailability improvement and exploration of mechanism.

Advisory Professor: OKU Hirotsugu (University of the Ryukyus)

First Vice-Advisory Professor: IWASAKI Hironori (University of the Ryukyus)

Second Vice-Advisory Professor: NAGAO Koji (Saga University)

【農水圏資源環境科学・Resource and Environmental Science of Agriculture,
Forestry and Fisheries】
生物環境保全科学・Environmental Science and Conservation Biology

そばがき ともお
側垣 共生 (日本)

研究題目：複数の寄主植物種を利用する亜社会性昆虫における繁殖・生活史
形質の適応的分化

主指導教員：野間口 眞太郎 (佐賀大学)

第一副指導教員：徳田 誠 (佐賀大学)

第二副指導教員：辻 和希 (琉球大学)



皆さん、こんにちは。佐賀大学所属の側垣共生です。

出身は教員養成系の大学ですが、修士課程より佐賀大学大学院農学研究科に進学し、子育てを行うカメムシの研究に取り組んできました。世間では、臭気や大量発生による不快害虫として、また農作物の害虫として忌み嫌われることの多いカメムシですが、その仲間には親が子育てを行う種も複数知られています。その中で私が材料にしているのは、ミツボシツチカメムシという、認知度も低く害虫にすら認定されない小さなカメムシです。この種では雌親が単に卵を守るだけでなく、孵化直後の幼虫のために栄養卵と呼ばれるお弁当のようなものを用意したり、巣に餌を運んできたりと、人間ばりの子育てを行います。かと思えば、ちょっと驚かせるだけで子を放置して自分だけ逃げたりして、甲斐甲斐しさとルーズさが入り混じった昆虫です。そんなミツボシツチカメムシ (とその近縁種) の子育て行動に魅せられて、何か面白い発見ができないかと日々奮闘しています。

博士課程での研究課題は農業とは直接関係のない研究テーマですが、生物の進化や多様性を理解するために重要であると考えています。このテーマを中心に、関連した様々なことにチャレンジしながら、博士課程の三年間が有益なものとなるように頑張りたいと思います。皆さん、切磋琢磨しながら一緒に頑張りましょう。どうぞよろしくお願ひします。

まつむら たかし
・松村 崇志 (日本)

研究題目：昆虫におけるストレス応答性性の解析

主指導教員：早川 洋一 (佐賀大学)

第一副指導教員：鈴木 章弘 (佐賀大学)

第二副指導教員：坂巻 祥孝 (鹿児島大学)

わだ ひでとし
和田 英敏 (日本)



研究題目：汎世界分類群シロカサゴ科シロカサゴ属の分類学的研究

主指導教員：本村 浩之 (鹿児島大学)

第一副指導教員：寺田 竜太 (鹿児島大学)

第二副指導教員：山本 智子 (鹿児島大学)

はじめまして、農水圏資源環境科学専攻の和田英敏です。鹿児島大学総合研究博物館で館長を務められている本村浩之教授のもとで魚類の分類学的研究に励んでいます。分類学とは生物学における基礎分野の一つであり、生物を種々の特徴によって分類し、体系的にまとめ整理をおこなうことでその実態を理解する学問です。つまり分類学は種、属、およびそれ以上の分類群を定義し名前を与えることのできる唯一の学問であり、現在我々が使用している生物の学名はこの学問の賜物です。生物に学名を適応する行為は命名と呼ばれますが、この行為は自然に存在する生物に対して一定の特徴をもとに種および属を定義するものです。一度生物に与えられた学名は後世まで残るものであるため、命名的行為における責任は重大なものです。過去には十分な他種との比較を行うことなく曖昧な定義により種の命名的行為を行っていた例も多く（現在もそのような例は散見されますが...）、このことにより適応すべき学名について混乱をきたしている分類群は多くあります。我々の研究対象である魚類についても例外ではなく、今なお曖昧な定義で記載された学名が用いられている種や適応すべき学名がわかっていない種も多く存在します。我々はこれらを整理し、魚類に対して明瞭かつ正確な定義をもって学名を与えることこそ現在の分類学における使命であると確信しているため、日夜研究に勤しんでいるのです。

私の研究対象であるシロカサゴ科シロカサゴ属魚類は、全世界の深海域に棲息しており深海底引き網（トロール漁法）により大量に漁獲され、食用として流通するにもかかわらず、現在有効とされている種内に複数種が含まれていることがわかっている非常に問題のある分類群です。博士課程の3年間という短い期間で、このような分類群を整理しそれぞれに正しい学名を与えることこそ、紛れもない社会貢献につながるものと確信しています。

はやさか おうき
早坂 央希 (日本)



研究題目：特定光波長照射による魚類の性転換誘導の検討

主指導教員：小谷 知也 (鹿児島大学)

第一副指導教員：竹内 裕 (鹿児島大学)

第二副指導教員：安樂 和彦 (鹿児島大学)

皆様、はじめまして。水産資源環境科学に入学しました早坂央希と申します。

私は、魚類の性転換に興味を持ち、初めは自然に性転換がおこるハタ科魚類について研究したいと思っていましたが、ある日偶然、環境を変化させることで、本来、性転換がおこらないメダカで性転換がおこることを見つけました。その後、性転換したメダカは機能的な配偶子を生産するのかなどを修士課程で調べました。

博士課程では、どのようなメカニズムで性転換が誘導されたのか、メダカ以外の魚、特に養殖対象魚でも同様の環境変化によって、性転換が誘導されるのか等について明らかにしていきたいと考えています。

環境を変化（人為的な制御）させることで、性転換が誘導できれば、効率の良い養殖ができると考えています。例えば、オスの精巣に価値があるトラフグや、魚卵に価値のあるチョウザメといった魚種では、オス、または、メスで市場価値

が異なる為、必要な性を選択的に生産することができれば、価値の高い魚のみを生産できます。私の研究も、このような水産業の役に立てればよいと思っています。

皆様、よろしくお願ひ致します。

しまだ なつみ
島田 菜摘 (日本)



研究題目：南日本産海産頭花植物の生理生態に関する研究

主指導教員：寺田 竜太 (鹿児島大学)

第一副指導教員：山本 智子 (鹿児島大学)

第二副指導教員：本村 浩之 (鹿児島大学)

指導補助教員：遠藤 光 (鹿児島大学)

はじめまして、連合農学研究科の農水圏資源環境科学専攻、鹿児島大学所属の島田菜摘です。14歳でスキューバダイビングを始め、鹿児島大学に進学してからもサークル活動を通しダイビング漬けの日々を過ごしてきました。鹿児島の海に潜り続けて今年で7年目となります。

私が所属する水圏植物学研究室は寺田竜太教授のご指導の元、海藻を中心にサンゴ、淡水藻、海草などを研究対象として扱っています。そのため、潜水による調査やサンプリングが必要とされることが多く、鹿児島大学水産学部4年で研究室に配属されて以来、潜水経験を活かしてサンプリングや調査を積極的に行ってきました。

その中でも私は卒業研究と修士論文で温帯性の一年生アマモと熱帯性のリュウキュウアマモについて研究を行い、並行して他の温帯性・熱帯性海草数種について研究を進めてきました。海草は陸上植物と同じ高等植物で花をつけ種子を作ります。沿岸部の重要な基礎生産を担っている一方で、生理生態学知見が不足し、現存量が減少している現状にあります。博士課程は、南日本に調査エリアを拡大し、引き続き海草の生理生態学知見を得ると共に、生育環境の把握や培養試験、モニタリング等により更に発展した研究を行いたいと考えています。

皆さんとの交流を通し、研究を楽しみつつ全てを成長の糧として吸収し実りある3年間にしたいと思います。セミナー等でお会いする機会を楽しみにしております。どうぞよろしくお願ひ致します。

そう らい
曹 磊 (中国)



研究題目：輝北ダムにおける窒素とリンの物質収支の解明とアオコの対策法に関する研究

主指導教員：吉川 毅 (鹿児島大学)

第一副指導教員：前田 広人 (鹿児島大学)

第二副指導教員：宇野 誠一 (鹿児島大学)

初めまして、この度鹿児島大学連合農学研究科に進学しました、曹磊と申します。鹿児島大学水産学部・微生物学研究室に配属されたから、いつの間に2年間が経ちました。今は後輩(4年生)の実験指導及び研究に関するアドバイスもしています。勿論自分の研究があるので、毎日充実しています。

私は、輝北ダムにおけるアオコの制御について研究しています。ほとんどの方はアオコという言葉が知らないと思います。アオコは、富栄養化が進んだダム湖、湖沼等において微細藻類が大量発生し水面を覆われている状態です。何故アオコを制御しないといけない質問があるかもしれません。アオコ大量発生によって、被害もあります。水面をアオコが覆うと、水草等の水生植物は、光合成ができなくなる最後死に至ります。水草場は淡水魚の産卵や稚魚の成育場所と

して重要であり、その消滅は生態系の破綻を招く恐れがあります。あとアオコは夜間の呼吸作用により溶存酸素が消費され、魚類等の動物が酸素欠乏により死滅します。ダム湖と湖沼は河川に比べて酸素の供給効率が低く、新鮮水による洗い流し効果も無い為、酸欠を招き易いです。また、アオコの死骸が湖底を腐敗すると、硫化水素等の還元性物質が発生し、また酸素を消耗します。そしてアオコはミクロシスチン等の毒素を生産する個体群が含まれており、赤潮と同様に魚類の鰓を閉塞させ窒息させる他にも、毒素によりカモ等の鳥類の肝臓組織に蓄積し斃死を引き起こすことがあります。アオコの制御は富栄養化の解決が重要な課題となります。今まで輝北ダムの栄養塩の物質収支は解明しない限り、栄養塩の総量が分かりません。今回の研究テーマは栄養塩の物質収支が中心として研究しています。

博士課程は一つ一つの問題を解決して進みます。正面から向き合って実りあるものにしたいと思います。

◇ 学生の研究活動

2017年度在学生の学会等発表

生物生産科学専攻（熱帯資源・植物生産科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Md. Harun - Ur- Rashid	Md. Harun-Ur-Rashid*, Hironori Iwasaki, Shigeki Oogai, Masakazu Fukuta, Shahanaz Parveen, Md. Amzad Hossain, Toyoaki Anai and Hirosuke Oku	Molecular characterization of cytosolic cysteine synthase in Mimosa pudica	Journal of Plant Research	131/319-329		Paper
Sheikh Muhammad Masum	*S.M. Masum, M.A. Hossain, H. Akamine, J.I. Sakagami, T. Ishii, S. Gima, T. Kensaku and P.C. Bhowmik	Isolation and characterization of allelopathic compounds from the indigenous rice variety ‘Boterswar’ and their biological activity against Echinochloa crus-galli L	Allelopathy Journal	43(1):31-42	Jun-18	Paper
寶川 拓生	Hiroo Takaragawa*, Kenta Watanabe, Ryuichi Kobashikawa, Dinh Thai Hoang, Yoshinobu Kawamitsu	Plasticity of Root Architecture Under Mixed Culture and Tiller Regulation in Sugarcane.	Sugar Tech	https://doi.org/10.1007/s12355-017-0567-x	2017.11	論文
寶川 拓生	Hiroo Takaragawa*, Kenta Watanabe, jaiphong Thannankorn, Mai Nakabaru, Yoshinobu Kawamitsu	Crop diversity in sugarcane: effect of mixed cultivars on the growth and yield of sugarcane.	International Sugar Journal		2017.11	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
寶川 拓生	寶川拓生*・薮田伸・渡邊健太・ 川満芳信	沖縄地域における播種期の違いが ヒマワリ6品種の生長および収量特 性に与える影響	日本作物学会紀 事			論文
Dinh Thai Hoang	First author	Photosynthetic response and nitrogen use efficiency of sugarcane under drought stress conditions with different nitrogen application levels	Plant Production Science	Vol 20, No 4, 412-422	27 Nov, 2017	Paper
Dinh Thai Hoang	First author	Effects of Drought Stress at Early Growth Stage on Response of Sugarcane to Different Nitrogen Application	Sugar Tech	Online	1 Dec, 2017	Paper

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
Islam Md. Rasadul	Islam Md. Rasadul	Genetic variation of sensitivity to photoperiod and Accumulated Temperature in Soybean mini-core collections lines	4-7 Jun, 2017	Jeju, South Korea	Poster
栗原 一寿	* 栗原一寿・惣慶嘉・椎名卓・ONDOA MANGA Tobie・VUNDI Fidele Magloire	イネ草姿の目視による幼穂分化期の特定	2017.10.21-22	香川県高松市	口頭発表
Sheikh Muhammad Masum	*Sheikh Muhammad Masum, Md. Amzad Hossain, Hikaru Akaminae, Takahiro Isii, Takara Kensaku, Prasanta Chitta Bowmik	Allelopathic potential of Bangladesh indigenous rice variety 'Boterswar'	18-22 Sep, 2017	Kyoto, Japan	Oral
寶川 拓生	寶川拓生*・Dinh Thai Hoang・笠井建吾・川満芳信	草型の異なるサトウキビ品種の混植が群落構造および光利用に与える影響	2018.3.29-30	宇都宮大学農学部	口頭
Dinh Thai Hoang	Dinh Thai Hoang	EFFECTS OF DROUGHT STRESS AND NITROGEN APPLICATION ON GROWTH AND SUGAR QUALITY OF SUGARCANE AT EARLY GROWTH STAGE	14-15 Oct, 2017	Hanoi, Vietnam	Oral
Majumder Md. Sagirul Islam	Majumder Md. Sagirul Islam	Influence of Tropical Green Manure Crops for Improving Growth, Yield and Quality of Turmeric (Curcuma Longa L.) in Okinawan Red Soil, Japan	19-20 Dec, 2017	Kuala Lumpur, Malaysia	Oral
豊元 大希	*豊元大希, 植村真郷, 保木良太, 池本悠一郎, 田浦悟, 一谷勝之	イネ日印交雑後代に見られる新規雑種弱勢現象	2017.12.8	佐賀市	ポスター発表

生物生産科学専攻（動物資源生産科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol./page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Khatun Hafiza	Khatun Hafiza	Sericin Enhances the Developmental Competence of Heat-Stressed Bovine Embryos	Molecular Reproduction and Development		25 Jan, 2018	Paper
Asep Setiaji	Asep Setiaji and Takuro Oikawa	Analysis of Non-Genetic Factors Influencing Reproductive Traits of Japanese Black Heifer		119/012026	1 Mar, 2018	

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
江頭 潤将	*江頭潤将、曾我康吏、山口博之、和田康 彦、山中賢一	黒毛和種における OPU 由来体内成熟卵子を 用いた効率的な体外胚生産系の検討	2017.10.21-22	佐賀	口頭発表
周本 剛大	周本剛大*, 植田啓一, 山口さやか, 佐野 文子	クジラ型パラコクシジオイデス症と高度病 原性真菌症との血清学的交差反応	2017.9.30-10.1	石川県金沢市	ポスター発 表
川瀬 史恵	Iciko Nishi*, Fumie Kawase, Tomomi Kurane, Keiichiro Ohta, Hideki Tatemoto, Toshihiro Konno	Mural trophectoderm specific activation of adhesion competence in peri-implantation murine blastocyst.	27-29 Sep, 2017	沖縄	ポスター発 表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
Asep Setiaji	Asep Setiaji and Takuro Oikawa	A Study on Different Penalty Method for Interval First to Successful Insemination in Japanese Black Heifer	27-30 Mar, 2018	The University of Tokyo	Oral
Asep Setiaji	Asep Setiaji and Takuro Oikawa	Analysis of Non-Genetic Factors Influencing Reproductive Traits of Japanese Black Heifer	25-26 Oct, 2017	Diponegoro University, Indonesia	Oral
Moe Lwin	Moe Lwin, Su Lai Yee Mon, Yukio NAGANO, Kotaro KAWABE, Shin OKAMOTO, Takeshi SHIMOGIRI	Genetic diversity of Myanmar cattle breeds using complete mitochondrial D-loop sequence	11-12 Nov, 2017	Tokyo	Poster

生物生産科学専攻（地域・国際資源経済学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
出花 幸之介	出花 幸之介	南西諸島におけるさとうきびの長期連作と収量の漸減	沖縄の農業と経済	第6号 64-70	2017.8	
出花 幸之介	*比屋根真一、出花幸之介、高江洲賢文、高江洲和子	さとうきび畑における雑草防除マニュアル		124 ページ	2018.3	
Chewning Javier Eduardo	CHEWNING PRECIADO Javier Eduardo	General Food Preferences and Consumption Trends Amongst Japanese Millennials, with Emphasis on Seafood	Journal of Regional Fisheries			

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏 名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
出花 幸之介	*出花幸之介、内藤重之、杉村泰彦	夏植え株出し体系の導入によるサトウキビの大規模経営の展開	2017.9	佐賀大学	口頭発表
出花 幸之介	*比屋根真一・伊禮信・下地格・仲宗 根弘 晃・出花幸之介・高江洲賢文	沖縄県のサトウキビ畑における雑草 発生の 実態調査	2017.4.15-16	宮崎市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
Tran Quoc Nhan	Tran Quoc Nhan	Analysis of contract farming between paddy farmers and an agribusiness firm in the Mekong delta of Vietnam	Jul-18	Iwate	Oral
Pham Quoc Hung	Pham Quoc Hung	Participating in the Certification Production and Farmers' Crop Income - The Case of Chili Production in Dong Thap Province, Vietnam-	29 Sep - 1 Oct, 2017	The Saga University	Oral
Nguyen Thi Kim Quyen	Nguyen Thi Kim Quyen* Masaaki SANO, Mizuho KUGA	Research Plan: The current Situation and Issues with the Shrimp Farming Industry in Vietnam: Management Improvement For the Mekong Delta	8-10 Nov, 2017	JADEGARDEN PALACE, Kagoshima	Oral
Chewning Javier Eduardo	CHEWNING PRECIADO Javier Eduardo	What role does the ecolabel fill in the Japanese fisheries industry?	8-10 Nov, 2017	Kagoshima	Poster
Chewning Javier Eduardo	CHEWNING PRECIADO Javier Eduardo	Development and Impact of MSC Certification on Japanese Fisheries: A Case Study of the Kyoto Danish Seine Fishing Federation	18 Nov, 2017	Tokyo	Oral

応用生命科学専攻（生物機能科学連合講座）

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
瀬戸口 翔	*瀬戸口翔, 水谷治, 高橋徹, 山田修, 益留綾菜, 岩井謙一, 高瀬良和, 外山博英, 二神泰基, 玉置尚徳	黒麹菌 <i>Aspergillus luchuensis</i> の pepA 破壊および高発現が芋焼酎の香気に与える影響	2017.12.9 2017.12.13	沖縄 鹿児島	口頭発表
瀬戸口 翔	*瀬戸口翔, 水谷治, 高橋徹, 山田修, 岩井謙一, 高瀬良和, 外山博英, 二神泰基, 玉置尚徳	黒麹菌 <i>Aspergillus luchuensis</i> の酸性プロテアーゼ遺伝子 pepA 破壊および高発現が芋焼酎醸造に与える影響	2017.9.11-14	東京	ポスター発表
門岡 千尋	門岡千尋*, 泉津弘佑, 奥津果優, 吉崎由美子, 高峯和則, 後藤正利, 玉置尚徳, 二神泰基	白麹菌におけるクエン酸輸送体遺伝子の昨日解析	2017.8.31-9.1	熊本	口頭発表
門岡 千尋	門岡千尋*, 泉津弘佑, 奥津果優, 吉崎由美子, 高峯和則, 後藤正利, 玉置尚徳, 二神泰基	白麹菌におけるミトコンドリア局在型クエン酸輸送体 CtpA と YhmA の機能解析	2017.11.16-11.17	佐賀	口頭発表・ポスター発表
Oussou-Azo Fifame Auriane	OUSSOU-AZO FIFAME AURIANE*	Research and development of early detection methods for cashew-devastating pathogens	8-10 Nov, 2017	Kagoshima	Oral

応用生命科学専攻（食品機能科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Manikharda	Manikharda*, Makoto Takahashi, Mika Arakaki, Kaoru Yonamine, Fumio Hashimoto, Kensaku Takara, Koji Wada	Influence of Fruit Ripening on Color, Organic Acid Contents, Capsaicinoids, Aroma Compounds, and Antioxidant Capacity of Shimatogarashi	Journal of OleoScience	67/113-124	2018	Paper
Manikharda	Manikharda*, Takahashi M., Yonamine K., Arakaki M., Asikin Y., Takara K., Wada K.	Flavor characteristics and antioxidant properties of Okinawan chili pepper, Shimatogarashi (<i>Capsicum frutescens</i>).	Food Science and Technology Research	23/425-435	28 Jul, 2017	Paper
島元 紗希	Saki Shimamoto*, Daichi Ijiri, Mana Kawaguchi, Kazuki Nakashima, Osamu Tada, Hiroki Inoue, Akira Ohtsuka.	β 1- and β 2-adrenergic receptor stimulation differ in their effects on PGC-1 α and atrogen-1/MAFbx gene expression in chick skeletal muscle	Comparative Biochemistry and Physiology, Part A	211,1-6	18 Jun, 2017	Paper
島元 紗希	Kazuki Nakashima*, Aiko Ishida, Saki Shimamoto, Daichi Ijiri, Akira Ohtsuka.	Effects of Insulin-Like Growth Factor-I on the Expression of Atrogen-1/MAFbx in Chick Myotube Cultures.	The Journal of Poultry Science	54, 247-252	2017.7	論文
島元 紗希	井尻大地*, 宝蔵直樹, 島元紗希, 川口真奈, 古川愛理, 多田司, 友 永省三, 中島一喜, 大塚彰	ブロイラー初生ヒナへの飼料給与 の開始日齢が鶏肉の脂質過酸化, ドロップ量, 肉色, 低分子代謝産物 濃度, および味認識装置により測 定された味覚特性に及ぼす影響.	日本畜産学会報			論文

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
Manikharda	Manikharda*, Takahashi M., Yonamine K., Arakaki M., Takara K., Wada K	Flavor characteristics and antioxidant properties of Okinawan chili pepper, Shimatogarashi (Capsicum frutescens)	Aug, 2017	Kyoto	Oral
金城由希子	*金城由希子、高橋誠、上地俊徳、高良健作、広瀬直人、水雅美、和田浩二	黒糖非糖類画分のストレス負荷マウスにおけるストレス低減効果および生体内抗酸化活性に及ぼす影響	2017	神奈川	口頭発表
島元 紗希	島元紗希*・井尻大地・東園みさと・中島一喜・大塚彰	ブロイラーヒナにおける初期成長期の増体量および骨格筋タンパク質分解量の個体差と飼料摂取量との関連性	2017.9.4-6	長野県伊那市	口頭発表
島元 紗希	井尻大地*、井之上弘樹、島元紗希、高橋宏敬、川嶋祐貴、佐藤渉、大塚彰	paracoccus carotinifaciens 乾燥菌体の飼料給与が適温環境下または暑熱環境下で飼育されたブロイラーの骨格筋の色調、カロテノイド含量、および脂質過酸化度へ及ぼす影響	2017.9.4-6	長野県伊那市	口頭発表
島元 紗希	島元紗希*、井尻大地、中島一喜、大塚彰	骨格筋細胞においてβ2アドレナリン受容体作動薬クレンブテロールは microRNA を介して FoxO1 mRNA の発現を抑制する	2018.3.27-29	東京大学	口頭発表
島元 紗希	西木場菜央*、川口真奈、島元紗希、友永省三、藤田芳和、井尻大地、大塚彰	米糠外皮のラットへの給与が肝臓における低分子代謝産物濃度に及ぼす影響	2018.3.27-29	東京大学	口頭発表
島元 紗希	興梶瑠香奈*、西木場菜央、島元紗希、井尻大地、中島一喜、大塚彰	レイヤー初生ヒナへの飼料給与開始の遅延が適温および暑熱環境下での産卵成績と卵質に及ぼす影響	2018.3.29-30	東京大学	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
大石 一樹	*Oishi, K., Miyazaki, M., Nishimura, W., Komatsu, M., Shiozaki, K.	Desialylation of ganglioside regulates triglyceride accumulation in fish liver	2017.9.22-24	東京	口頭発表
大石 一樹	*大石一樹、宮崎未奈、高瀬 諒、西村 渉、 小松正治、塩崎一弘	魚類肝臓細胞におけるガングリオシド脱シ アリル化を介した脂質蓄積制御機構の解明	2017.12.6-9	神戸	ポスター発 表

応用生命科学専攻（先端応用生命科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Fina Amreta Laksmi	Matsujirou Ishibashi, Ryo Kawanabe, Norie Amaba, Shigeki Arai, Fina Amreta Laksmi, Kenta Komori, Masao Tokunaga	Expression and characterization of the Renilla luciferase with the cumulative mutation	Protein Expression and Purification	volume 145 page 39-44	28 Dec, 2017	Paper
矢野 敏史	Satoshi Yano*, Shusong Wu, Kozue Sakao, and De-Xing Hou	Wasabi 6-MSITC induces apoptosis in human colorectal cancer cells through p53-independent mitochondrial dysfunction pathway	BioFactors			Paper
矢野 敏史	Wu S*, Yano S, Hisanaga A, He X, He J, Sakao K, Hou DX.	Polyphenols from Lonicera caerulea L. berry attenuate experimental nonalcoholic steatohepatitis by inhibiting proinflammatory cytokines productions and lipid peroxidation.	Molecular Nutrition & Food Research	Volume 61/1600858	18 Apr, 2017	Paper
矢野 敏史	Wu S*, Yano S, Chen J, Hisanaga A, Sakao K, He X, He J, Hou DX.	Polyphenols from Lonicera caerulea L. Berry Inhibit LPS-Induced Inflammation through Dual Modulation of Inflammatory and Antioxidant Mediators.	Journal of Agricultural and Food Chemistry	65/pp 5133-5141	28 Jun, 2017	Paper

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
高島 智也	*高島 智也, 鮫島立志, 深溝 慶, 大沼 貴之	エリシター切りだしに関与する二種のダイズ由来グルカナーゼの機能	2017.9	神奈川県藤沢市	口頭発表
高島 智也	*高島智也, 砂川陵, 上地敬子, 平良東紀	LysM 融合キチナーゼの抗真菌活性	2017.12	沖縄県宜野湾市	口頭発表
高島 智也	*高島 智也, 深溝 慶, 大沼 貴之	ITC を用いた Loopful 型キチナーゼとキチンオリゴ糖の相互作用解析	2017.8	沖縄県宜野湾市	ポスター発表
高島 智也	高島 智也, 砂川 陵, 上地 敬子, 平良 東紀	リュウキュウイノモトソウ由来 LysM ドメイン多連結体および多連結体融合キチナーゼの抗真菌活性	2018.3	愛知県名古屋	口頭発表
大貝 茂希	大貝茂希*, 福田雅一, 渡邊啓一, 奥宏典	植物由来ミモシナーゼの反応機構及びシスタチオンβ-リアーゼとの分子進化的関係の解明	2017	京都	口頭発表
中村 嘉孝	中村嘉孝*・紙谷喜則・竹元渉・勝目一成・甲山航平・大久津昌治・石橋松二郎・鶴丸博人	メタン発酵消化液のユーグレナ添加効果に関する検討	2017.9.22	佐賀	口頭発表
中村 嘉孝	中村嘉孝*・竹元渉・甲山航平・紙谷喜則・濱中大介・石橋松二郎・鶴丸博人	中温メタン発酵が Salmonella 属細菌の菌濃度に与える影響	2017.11.24	福岡県北九州市	ポスター発表
印 璇	吉崎由美子, 奥津果優, 二神泰基, 玉置尚徳, 高峯和則	小曲米酒の製造工程における固体糖化の新規的な意義 New significance of the solid-state saccharification process in xiaoqu-mijiu production	2017.9.6-8	東京	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
印 璇	吉崎由美子, 奥津果優, 二神泰基, 玉置尚 徳, 高峯和則	The significance of solid-state saccharification process in Xiaoqu-Mijiu production 小曲米酒の 製造における固体糖化の工程の意義	2017.9.11-14	東京	ポスター発 表
印 璇	竹内春佳, 吉崎由美子, 奥津果優, 二神泰 基, 玉置尚徳, 高峯和則	中国で市販されている小曲米酒の風味の特 徴	2017.10.11-12	東京	口頭発表

農水圏資源環境科学専攻（生物環境保全科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
安達 修平	安達 修平	アブラムシが運ぶ厄介なウイルス病	現代農業	2017(6),82-85	2017.6	著書
安達 修平	*Shuhei Adachi, Takashi Kidokoro, Michio Chiba, Makoto Tokuda	Comparisons of seasonal fluctuations in <i>Uroleucon nigrotuberculatum</i> (Hemiptera: Aphididae) densities between 2003-2004 and 2015-2016 in northern areas of its distribution range in Japan	Applied Entomology and Zoology			論文
安達 修平	*Shuhei Adachi, Yoshiyuki Matsumoto, Hiroyuki Yoshitomi, Daisuke Sasaki, Makoto Tokuda	New distribution records of <i>Aphis nasturtii</i> (Hemiptera: Aphididae) in Japan	Japanese Journal of Systematic Entomology	23(2), 191-193	2017.11	論文
Elsayed Ayman Khamis	(*Elsayed, A. K.), Karam, H.H., Tokuda M.	new <i>Gephyraulus</i> species (Diptera: Cecidomyiidae) inducing flower bud galls on the European sea rocket <i>Cakile maritima</i> Scop. (Brassicaceae).	Applied Entomology and Zoology	52(4)/553-558	18 Nov, 2017	Paper
Elsayed Ayman Khamis	(*Elsayed, A. K.), Ogata, K, Kaburagi, K., Yukawa, J., Tokuda, M.	A new <i>Dasineura</i> species (Diptera: Cecidomyiidae) associated with <i>Symplocos cochinchinensis</i> (Loureiro) (Symplocaceae) in Japan.	Japanese Journal of Systematic Entomology	23/81-86	18 Jun, 2017	Paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Elsayed Ayman Khamis	(*Yoshida, K.), Elsayed A. K., Matsuura, H., Horigome, M., Aizawa, T., and Tokuda, M.	Occurance of Dasineura oxycoccana (Diptera: Cecidokiidae) infesting cultivated blueberry in Japan.	Japanese Journal of Applied Entomology and Zoology	61(1)/25-28	2017	Paper
金井 賢一	金井 賢一	喜界島のオオゴマダラ, 6月~11月 の個体数変動	SATSUMA	(158) : 29-32	2017.6.30	論文
金井 賢一	金井 賢一	鹿児島市城山町黎明館前でコムラ サキを目撃	SATSUMA	(158) : 56	2017.6.30	その他
金井 賢一	金井 賢一	鹿児島市郡山町でのアシビロヘリ カメムシの記録	SATSUMA	(158) : 107	2017.11.18	その他
金井 賢一	金井 賢一	鹿児島県固有のクワガタムシ	自然だより	134	2017.7.1	その他
金井 賢一	金井 賢一	外来種に注意!	自然だより	135	2017.8.1	その他
金井 賢一	金井 賢一	口永良部島の昆虫	自然だより	140	2018.1.3	その他
金井 賢一	金井 賢一	新島の昆虫	自然だより	142	2018.2.1	その他
金井 賢一	金井 賢一	イモムシ・ケムシの好き嫌い	南日本新聞紙面 「カゴラボ」		2017.5.15	その他
金井 賢一	金井 賢一	イモムシ・ケムシの弱肉強食	南日本新聞紙面 「カゴラボ」		2017.6.5	その他
金井 賢一	金井 賢一	ハイイロゴケグモ	南日本新聞紙面		2017.6.14	その他
金井 賢一	金井 賢一	カブトムシ・クワガタムシの固有種	南日本新聞紙面 「カゴラボ」		2017.6.26	その他

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
金井 賢一	金井 賢一	カブトムシ・クワガタムシの外来種	南日本新聞紙面 「カゴラボ」		2017.7.10	その他
金井 賢一	金井 賢一	鹿児島島の生物多様性	南日本新聞紙面 「カゴラボ」		2017.5.29	その他
金井 賢一	金井賢一*・山根正気	口永良部島の火砕流跡地でのアリ 相調査	Nature of Kagoshima	(43) : 281-285	2017.5.29	論文
金井 賢一	金井賢一*・中村璃海・中村 太 一	喜界島における夏季のオオゴマダ ラ消長について	鹿児島県立博物 館研究報告	37	2018.3.30	論文
金井 賢一	金井賢一*・福元正範・榊俊輔・ 入田隼一	鹿児島港本港区にてハイイロゴケ グモを確認	鹿児島県立博物 館研究報告	37	2018.3.30	論文
金井 賢一	金井賢一*・福元正範・榊俊輔	新島（鹿児島湾）の昆虫	鹿児島県立博物 館研究報告	37	2018.3.30	論文
金井 賢一	金井賢一*・守山泰司	トカラ列島中之島・小宝島の昆虫 (2017年)	鹿児島県立博物 館研究報告	37	2018.3.31	論文
金井 賢一	金井賢一*・守山泰司	トカラ列島のチョウ類	鹿児島県立博物 館研究報告	37	2018.3.30	総説
金井 賢一	金井 賢一	口永良部島の昆虫（2017年，他）	鹿児島県立博物 館研究報告	37	2018.3.30	論文

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
小野 雅弥	*小野 雅弥・早川 洋一・濱 洋一郎・吉賀 豊司	Caenorhabditis elegans の体表脂質による昆虫血球の活性化抑制	2017.9.20-22	北海道	口頭発表
安達 修平	*Shuhei Adachi・Takashi Kidokoro・Michio Chiba・Makoto Tokuda	Global warming and invasion by Corythucha marmorata (Hemiptera: Tingidae) on the population dynamics of Uroleucon nigrotuberculatum (Hemiptera: Aphididae) near northern distribution limits in Japan	2017.9.4-8	Turkey, Cappadocia	口頭発表
安達 修平	Shuhei Adachi・Ryosuke Yasaka・Kazusato Ohshima・*Makoto Tokuda	Wild hosts and aphid vectors of turnip mosaic potyvirus in Japan	2017.9.4-8	Turkey, Cappadocia	口頭発表
安達 修平	*安達修平・本間智己・松田浩輝・中林ゆい・八坂亮祐・大島一里・徳田誠	カブモザイクウイルス分子系統集団の置き換わりに野生イヌガラシがおよぼす影響	2018.2.1	熊本市	口頭発表
安達 修平	*徳田誠・鈴木義人・Muryati・藤田将平・安達修平	昆虫体内における植物ホルモン内生量の比較およびアブラムシ体内における急速なサイトカイニン前駆物質合成の可能性	2017.9.2-4	松山市	口頭発表
安達 修平	*安達修平・尋木優平・松田浩輝・吉田一貴・八坂亮祐・大島一里・徳田誠	非永続伝染性ウイルスの感染拡大に広食性・狭食性アブラムシが果たす役割	2017.9.2-4	松山市	ポスター発表
安達 修平	*手塚絢美・安達修平・喜多章仁・徳田誠	塩生植物を寄主とするイソマツヒゲナガアブラムシの生活史と海水耐性	2017.9.2-4	松山市	ポスター発表
Elsayed Ayman Khamis	(*Elsayed, A.K.), and Tokuda, M.	Life history of bud gallers associated with Schoepfia jasminodora (Schoepfiaceae).	18 Mar, 2017	Japan, Tokyo	Oral

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
Elsayed Ayman Khamis	Fujita S., Adachi S., Elsayed A. K., (*Tokuda M.)	Life history, host range and adult behavior of a predacious gall midge <i>Diadiplosis hirticornis</i> (Diptera: Cecidomyiidae), a native natural enemy of <i>Planococcus kraunhiae</i> (Hemiptera: Pseudococcidae).	18 Oct, 2017	Japan, Tokyo	Oral
Elsayed Ayman Khamis	(*Elsayed, A. K.), Karam, H. and Tokuda, M.	A new <i>Gephyraulax</i> species (Diptera: Cecidomyiidae) associated with <i>Cakile maritima</i> (Brassicaceae).	18 Sep, 2017	Japan, Ehime	Poster
Elsayed Ayman Khamis	(*Elsayed, A. K.), and Tokuda, M.	Life history of two leaf bud gallers associated with the deciduous tree <i>Schoepfia jasminodora</i> (Schoepfiaceae) in Japan.	18 Jul, 2017	France, Tours	Poster
Elsayed Ayman Khamis	(*Elsayed A. K.), Uechi N., Yukawa J., Tokuda M.	A new <i>Schizomyiina</i> genus (Diptera: Cecidomyiidae) associated with grapes <i>Vitis</i> spp. (Vitaceae) in Palearctic and Nearctic regions	18 Mar, 2017	Taiwan, Taipei	Oral
鹿子木 聡	上室 剛・津田勝男・坂巻祥孝	農薬散布量が異なる場合における茶樹葉層内のクモ類個体数	2017.11.15	埼玉県さいたま市	口頭発表
鹿子木 聡	猪口真帆実・池之上祐紀・津田勝男・坂巻祥孝・上室 剛	農薬散布量削減による天敵を保護したチャのハダニ防除体系に関する研究	2018.3.27	鹿児島大学（鹿児島市）	口頭発表
金井 賢一	金井賢一*・守山泰司	トカラ列島のチョウ類	2017.5.13	鹿児島市	口頭発表
金井 賢一	金井賢一*, 榎俊輔, 福元正範	新島の昆虫相解明 ～小さな島の生き物のあり方～	2017.11.18	鹿児島市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ ポスター発表者に*印）members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
Riska	Inudo, K., Sato, Y., Nakamura, M., Fukumoto, T., Takushi, T., Fuji, S., Iwai, H.	The new potyvirus causes deformed fruits of Passiflora edulis in Japan is proposed as the new species East Asian Passiflora distortion virus (EAPDV) phylogenetically distinguished from East Asian passiflora virus (EAPV)	26-28 Apr, 2017	Japan, Iwate Prefecture, Morioka city	Oral

農水圏資源環境科学専攻（地域資源環境工学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
李 雨桐	李 雨桐*； 山岡 賢；阿部真己；畑 恭子； 中野 拓治	農業集落排水施設流入汚水量の実態と影響要因に関する研究	農業農村工学会 論文集			論文
李 雨桐	中野拓治*；李 雨桐；阿部真己；畑 恭子	状態空間モデルの適用を通じた農業集落排水施設流入水の日水量負荷変動と変動特性抽出に関する研究	農業農村工学会 論文集	86 巻 (2018) 1 号 I_9-I_17	2018.1.12	論文
齋藤 晴紀	齋藤晴紀*、酒井一人、靱井和朗、中村真也	隣接する地下水流域間の地下水流入出に関する研究	雨水資源化システム学会誌	vol.23/No.1/pp.35-42	2017.7	論文
知念 良之	*知念良之・西野吉彦・芝正己	「沖縄県多良間島における産業用および家庭用燃料資材調達の歴史的変遷」	日本森林学会誌	第 99 巻（3 号）, 129-135pp	2017.6	論文
Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna	M. H. J. P. Gunarathna*, Kazuhito Sakai, Tamotsu Nakandakari, Kazuro Momii, Tsuneo Onodera, Hiroyuki Kaneshiro, Hiroshi Uehara and Kousuke Wakasugi	Optimized Subsurface Irrigation System (OPSIS): Beyond Traditional Subsurface Irrigation	Water (MDPI, Switzerland)	Water 2017, 9, 599	12 Aug, 2017	Paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna	Kuddithamby Gunaan, Manjula Ranagalage, M. H. J. P. Gunarathna, M. K. N. Kumari, Meththika Vithanage, Tharmalingam Srivaratharasan, Suntharalingam Saravanan and T.W.S. Warnasuriya	Application of Geospatial Techniques for Groundwater Quality and Availability Assessment: A Case Study in Jaffna Peninsula, Sri Lanka	ISPRS International Journal of Geo-Information	ISPRS Int. J. Geo-Inf. 2018, 7, 20	12 Jan, 2018	Paper
Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna	M.H.J.P. Gunarathna, Armando N Espino, Rubenito M Lampayan	Water Productivity of Aerobic Rice Production Systems		82pages	22 May, 2017	Book

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
Rajapakse Pathirannehel age Sakalya Samadhi Rajapakse	R.P. Sakalya S. Rajapakse*, Munehiro Tanaka, Huynh Van Kiet, Shoichiro Fuji	Variation of fruit quality and taste related sensory perception of two apple cultivars `Ohrin` and `Sunfuji` stored in different refrigerated containers	06-08 April 2017	Sri Lanka, Kandy	Oral

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
Rajapakse Pathirannehel age Sakalya Samadhi Rajapakse	Darshani Weerahewa*, R.P. Sakalya S. Rajapakse	Cytological changes and some postharvest quality traits of leeks grown in soil incorporated with partially burnt rice hull as a low cost silicon source	6-8 Apr, 2017	Sri Lanka, Kandy	Oral
Rajapakse Pathirannehel age Sakalya Samadhi Rajapakse	R.P. Sakalya S. Rajapakse*, M. Tanaka	Comparison of rice hull biochar and cedar bark as growing media on the yield and postharvest quality of strawberry cultivar 'Sachinoka'	12-14 Sep, 2017	Korea, Jeonju	Oral
Rajapakse Pathirannehel age Sakalya Samadhi Rajapakse	R.P. Sakalya Samadhi Rajapakse*, Munehiro Tanaka	Quality evaluation of Japanese strawberry 'Sagahonoka' in refrigerated shipping container	22 Sep, 2017	Japan, Saga	Poster
李 雨桐	李 雨桐*; 山岡 賢; 阿倍 眞己; 畑 恭子; 中野 拓治	農業集落排水施設における水量負荷特性の把握と運転効率化への試み	2017.8.29-9.1	神奈川県藤沢市	口頭発表
李 雨桐	李 雨桐*; 中野 拓治; 山岡 賢	亜熱帯地域の農業集落排水施設における水量負荷の実態と影響要因	2017.9.26-27	和歌山県和歌山市	口頭発表
齋藤 晴紀	齋藤晴紀*、酒井一人	沖縄県宮古島における隣接する流域間の地下水流入出に関する研究	2017.10.12-13	岡山市	口頭発表
知念 良之	*知念良之, 芝正己	「造船用材調達観点からみた琉球王国時代の森林資源管理政策」	2017.10	長崎県諫早市	口頭発表

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
知念 良之	*知念良之, 芝正己	「林政八書」の分析から見る沖縄県における森林の特徴	2017.8	沖縄県那覇市	口頭発表
Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna	Mawanane Hewa Janaka Prasad Gunarathna	Evaluation of Pedotransfer functions for estimating soil moisture constants: A study in dry zone of Tropical Sri Lanka	18-19 Jan, 2018	Seoul, South Korea	Oral
泉川 良成	*泉川良成、伊禮翔太、平良英三	NIR法を用いた劣化サトウキビの品質評価に関する基礎研究	2017.8.4	沖縄県那覇市	ポスター発表
泉川 良成	*泉川良成、平良英三	NIR法を用いた刈り置きサトウキビの成分評価法開発に関する基礎的研究	2017.9.21-22	佐賀市本庄町	口頭発表
泉川 良成	*泉川良成、伊禮祥太、宇良浩乃進、平良英三	NIR法を用いた劣化サトウキビ品質評価法開発に関する基礎的研究	2017.11.15-17	茨城県筑波市	口頭発表
Mayakaduwa ge Nadeeka Kumari	MKN Kumari*, Kazuhito Sakai	Assessment of surface water quality in tank cascade system: A case study in Ulagalla cascade, Sri Lanka	18-19 Jan, 2018	Seoul, south Korea	Oral
楫田 優希	*楫田優希・甲山航平・那賀昌輝・紙谷喜則	大豆加工工程における機能水の有効利用に関する基礎的研究	2017.9	佐賀	ポスター発表

農水圏資源環境科学専攻（水産資源環境科学連合講座）

● 著 書 ・ 論 文 等

氏 名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Borlongan, Iris Ann* Nishihara, Gregory N. Shimada, Satoshi Terada, Ryuta	Effects of temperature and PAR on the photosynthesis of <i>Kappaphycus</i> sp. (Solieriaceae, Rhodophyta) from Okinawa, Japan, at the northern limit of native <i>Kappaphycus</i> distribution in the western Pacific	Phycologia	56(4): 444-453	27 Apr, 17	Paper
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Borlongan, Iris Ann* Nishihara, Gregory N. Shimada, Satoshi Terada, Ryuta	Photosynthetic performance of the red alga <i>Solieria pacifica</i> (Solieriaceae) from two different depths in the sublittoral waters of Kagoshima, Japan	Journal of Applied Phycology	29(6): 3077-3088	2017	Paper
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Borlongan, Iris Ann* Matsumoto, Kazuya Nakazaki, Yoshiki Shimada, Natsumi Kozono, Jumpei Nishihara, Gregory N. Shimada, Satoshi Watanabe, Yuki Terada, Ryuta	Photosynthetic activity of two life history stages of <i>Costaria costata</i> (Laminariales, Phaeophyceae) in response to PAR and temperature gradient	Phycologia	57(2): 159-168	11 Jun, 18	Paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Terada, Ryuta* Matsumoto, Kazuya Borlongan, Iris Ann Watanabe, Yuki Nishihara, Gregory N. Endo, Hikaru Shimada, Satoshi	The combined effects of PAR and temperature including the chilling-light stress on the photosynthesis of a temperate brown alga, <i>Sargassum patens</i> (Fucales), based on field and laboratory measurements	Journal of Applied Phycology		2017	Paper
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Fukumoto Rika, Borlongan Iris Ann, Nishihara Gregory N., Endo Hikaru, Terada Ryuta*	The photosynthetic responses to PAR and temperature including chilling-light stress on the heteromorphic life history stages of a brown alga, <i>Cladosiphon okamuranus</i> (Chordariaceae) from Ryukyu Islands, Japan	Phycological Research			Paper
Dossou Hounsa Degnon Serge	Serge Dossou*, Shunsuke Koshio, Manabu Ishikawa, Saichiro Yokoyama, Mahmoud A.O. Dawood, Mohammed F. El Basuini, Adissin Oliviera, Amr I. Zaineldin	Growth performance, blood health, antioxidant status and immune response in red sea bream (<i>Pagrus major</i>) fed <i>Aspergillus oryzae</i> fermented rapeseed meal (RM-Koji)	Fish and Shellfish Immunology	75./ 253-262	31 Jan, 18	Paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
上野 綾子	*緒方沙帆・Rocille PALLA・上野綾子・佐藤正典・鈴木廣志・山本智子	奄美大島沿岸における干潟底生生物相	日本ベントス学会誌	72号 27-38	2017.8	論文
上野 綾子	*藤井椋子・上野綾子・山本智子	奄美大島笠利湾手花部干潟におけるミドリシャミセンガイの干潟内分布と底質環境	Nature of Kagoshima	43号	2017.3	論文
Dossou Hounsa Degnon Serge	Serge Dossou*, Shunsuke Koshio, Manabu Ishikawa, Saichiro Yokoyama, Mahmoud A.O. Dawood, Mohammed F. El Basuini, Abdelaziz Mohammed El-Hais, Adissin Olivier	Effect of partial replacement of fish meal by fermented rapeseed meal on growth, immune response and oxidative condition of red sea bream juvenile, Pagrus major	AQUACULTURE		7 Feb, 2017	Paper
三次 充和	mitsukazu mitsugi*, hiroshi suzuki	life history of an invasive freshwater shrimp Neocaridina davidi (Bouvier, 1904), (Decapoda: Caridea: Atyidae) in the Tomoe River, the Boso Peninsula, eastern Japan	crustacean research	vol.47 page:9-16	10 Feb, 2018	Paper
福井 美乃	*福井美乃・本村浩之	トカラ列島臥蛇島沖で観察されたホシフグの繁殖行動	Nature of Kagoshima	43: 243-248	2017.3	論文

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
福井 美乃	*Mizuki Matsunuma, Yoshino Fukui, Hiroyuki Motomura	Review of the <i>Ostichthys japonicus</i> complex (Beryciformes: Holocentridae: Myripristinae) in the northwestern Pacific Ocean, with description of a new species	Ichthyological Research	https://doi.org/10.1007/s10228-018-0625-8	2018.3	論文
福井 美乃	*Yoshino Fukui・Hiroyuki Motomura	New records of <i>Oxycheilinus samurai</i> (Perciformes: Labridae) from Indonesia and New Caledonia	Cybium	41(4): 376-378.	2017	論文
松井 英明	*Hideaki Matsui, Ryo Okawa, Kazuhiko Anraku, Tomonari ~Kotani	Application of spectrophotometry to estimate the optimum culture conditions for <i>Nannochloropsis</i> <i>oculata</i> as a diet for zooplankton	Aquaculture Science	65 巻 3 号、209— 219		論文
Md. Mosaddequr Rahman	Md. Mosaddequr Rahman*, Jun Ohtomi	Reproductive biology of the deep-water velvet shrimp <i>Metapenaeopsis sibogae</i> (De Man, 1907) (Decapoda: Penaeidae)	Journal of Crustacean Biology	37(6), 743-752	Nov, 2017	Paper
Md. Mosaddequr Rahman	Md. Mosaddequr Rahman*, Jun Ohtomi	Relative growth and morphological sexual maturity of the deep-water velvet shrimp <i>Metapenaeopsis sibogae</i> (Crustacea, Decapoda, Penaeidae)	Invertebrate Reproduction & Development			Paper

氏名	著者名（共著の場合は全員の氏名、 ファーストオーサーに*印） authors(*first author)	論文題名 title	雑誌名 journal	巻（号）、頁 vol.page	出版年月 date of issue	論文、著書、総説、 紀要、その他 paper/book/review /bulletin/others
王 偉隆	Weilong Wang*, Manabu Ishikawa, Shunsuke Koshio, Saichiro Yokoyama, Mahmoud A.O. Dawood & Yukun Zhang	Effects of Dietary Astaxanthin Supplementation on Survival, Growth and Stress Resistance in Larval and Post-larval Kuruma Shrimp, Marsupenaeus japonicus	Aquaculture Research			Paper
小園 淳平	*小園淳平, Gregory N. Nishihara, 遠藤光, 寺田竜太	鹿児島県産淡水紅藻オキチモズク Nemalionopsis tortuosa (Thoreaales) の光合成における光阻害と低温の 複合作用	藻類	第 66 巻, 第 1 号, 1~6 頁	2018.3.14	論文
王 偉隆	Weilong Wang*, Manabu Ishikawa, Shunsuke Koshio, Saichiro Yokoyama, Md. Sakhawat Hossain, Amina S. Moss	Effects of dietary astaxanthin supplementation on juvenile kuruma shrimp, Marsupenaeus japonicus	Aquaculture			Paper
張 煜坤	Yukun Zhang*, Hongxiao Cui, Defa Sun, Lihui Liu, Xiurong Xu	Effects of doe-litter separation on intestinal bacteria, immune response and morphology of suckling rabbits	World Rabbit Science	v. 26, n. 1, p. 71-79	29 Mar, 2018	Paper

● 口頭発表・ポスター発表・講演

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Iris Ann G. Borlongan*, Gregory N. Nishihara, Satoshi Shimada, Ryuta Terada	Photosynthetic performance of the red alga <i>Solieria pacifica</i> (Solieriaceae) from two different depths in the sublittoral waters of Kagoshima, Japan	13-19 Augt 2017	Szczecin, Poland	Oral
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Iris Ann G. Borlongan*, Gregory N. Nishihara, Satoshi Shimada, Ryuta Terada	Effects of PAR and temperature on photosynthesis of different life history stages of <i>Costaria costata</i> (Laminariales, Phaeophyceae)	8-13 Oct, 2017	Kuala Lumpur, Malaysia	Oral
Iris Ann Gorriceta Borlongan	Iris Ann G. Borlongan*, Gregory N. Nishihara, Satoshi Shimada, Ryuta Terada	Assessment of photosynthetic performance in the two life history stages of <i>Alaria crassifolia</i> (Laminariales, Phaeophyceae)	24-25 Mar, 2018	Kuala Lumpur, Malaysia	Poster
Amina Salina Moss	Shunsuke Koshio Manabu Ishikawa Saichiro Yokoyama Truong Nhu Mahmoud Dawood Weilong Wang	REPLACEMENT OF SQUID AND KRILL MEAL BY SNAIL MEAL <i>Buccinum striatissimum</i> IN PRACTICAL DIETS FOR JUVENILE KURUMA SHRIMPS <i>Marsupenaeus japonicus</i>	24-27 Jul, 2017	Kuala Lumpur, Malaysia	Oral
Amina Salina Moss	Shunsuke Koshio Manabu Ishikawa Saichiro Yokoyama	Effects of dietary phospholipids extracted from snails <i>Buccinum striatissimum</i> on the growth performance stress resistance immune response and fatty acid composition of juvenile kuruma shrimps <i>Marsupenaeus japonicus</i> Bate	25-26 May, 2017	Osaka, Japan	Oral

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ ポスター発表 oral/poster
Adissin Tohouindo Olivier Oswald	Aquatic Animal Laboratory *Adissin Tohouindo	Nutritive value of microalgae as aquafeed in kuruma shrimp, <i>Marsupenaeus japonicus</i> (Bate)	8-11 Nov, 2017	Jade Garden Japan Kagoshima city	Oral
Dossou Hounsa Degnon Serge	SERGE DOSSOU*, SHUNSUKE KOSHIO, MANABU ISHIKAWA, SAICHIRO YOKOYAMA, PHILIPPE LALEYE, ANTOINE CHIKOU, MOHAMED F.EL BASUINI, MAHMOUD A.O. DAWOOD	Effect of partial replacement of fish meal by graded levels of yeast-fermented rapeseed meal on growth, immune responses and oxidative stress of juveniles red sea bream, <i>Pagrus major</i> .	26-30 Jun, 2017	CAPE-TOWN, SOUTH AFRICA	Oral
Dossou Hounsa Degnon Serge	SERGE DOSSOU*, SHUNSUKE KOSHIO, MANABU ISHIKAWA, SAICHIRO YOKOYAMA, MAHMOUD A.O. DAWOOD, MOHAMED F.EL BASUINI, OLIVIER ADISSIN, AMR I. ZAINELDIN	Effects of replacing fish meal by a blend of fermented canola meal and soy protein concentrate in diets for juvenile red sea bream, <i>Pagrus major</i>	24-27 Jul, 2017	KUALA-LUMPUR, MALAYSIA	Oral
Dossou Hounsa Degnon Serge	SERGE DOSSOU*, SHUNSUKE KOSHIO, MANABU ISHIKAWA, SAICHIRO YOKOYAMA, MAHMOUD A.O. DAWOOD, MOHAMED F.EL BASUINI, OLIVIER ADISSIN, AMR I. ZAINELDIN	ニホンコウジカビ (<i>A. oryzae</i>) で発酵させた菜種油粕がマダイ稚魚 (<i>P. major</i>) の成長、非特異的免疫および抗酸化能 におよぼす影響	8-10 Nov, 2017	KAGOSHIMA, JAPAN	Poster
上野 綾子	*Ryoko Ueno, Masanori Sato, Tomoko Ymamoto	Seasonal change in population structure of <i>Simplisetia erythraeensis</i> at tidal flats in southern Japan	3-5 Nov, 2017	Kumamoto, Japan	Poster

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
上野 綾子	*Ryoko Ueno, Masanori Sato, Tomoko Yamamoto	Seasonal change in population structure of wide distributed species, <i>Simplisetia erythraeensis</i>	4-9 Dec, 2017	Philippines, Cebu	Poster
張 振龍	ZHANG ZHENLONG, Hirohiko Nakamura	Seasonal transport variation over the entire Kuroshio region	11-13 Apr, 2017	Korea, JeJu	Poster
張 振龍	ZHANG ZHENLONG, Hirohiko Nakamura	Seasonal transport variation over the entire Kuroshio region	19-21 May, 2017	Japan, Tokyo	Oral
三次 充和	三次充和*, 鈴木廣志	福島県の3河川の下流域から採集されたヌマエビ類4種	2017.10.6-7	日本、柏市	ポスター発表
幅野 明正	*幅野明正、安樂和彦、大川諒、日永康晴、山中有一、三橋延央	中深層性魚類の分光視感度	2017.3.26-30	日本、東京	ポスター発表
幅野 明正	*幅野明正・安樂和彦・山中有一・三橋延央・大富潤	鹿児島湾における中深層性魚類の日周鉛直移動メカニズムの解明	2017.12.9	日本、下関	口頭発表
福井 美乃	*Yoshino Fukui and Hiroyuki Motomura	Two undescribed species of the genus <i>Iniistius</i> (Labridae) from Australia and the Philippines.	2017.10.4	タヒチ・パペーテ	ポスター発表
福井 美乃	*福井美乃・Alama Ulysses・本村浩之	フィリピン大学魚類コレクションの創設とパナイ島の魚類多様性	2017.9.15-18	北海道函館市	口頭発表
Viliame Pita Waqalevu	Viliame Waqalevu*, Shojiro Miyauchi, Zhang Shuo, Tomonari Kotani	Comparison of growth ratio and fatty acid content in <i>Brachionus rotundiformis</i> and <i>B. plicatilis</i> fed three common Japanese nutritional enrichment diets	Mar, 2017	Tokyo University of Marine Science and Technology - 東京海洋大学	Paper

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
Viliame Pita Waqalevu	Viliame Waqalevu, Akinobu Honda, Matsui Hideaki, Atsushi Yamamoto, Kazuhiro Shiozaki, Tomonari Kotani	Nutritional evaluation of two types of euryhaline rotifers <i>Brachionus plicatilis</i> sp. complex and digestive enzyme response at first feeding in Japanese Flounder	Oct, 2017	Papeete City, French Polynesia	Oral
松井 英明	*Hideaki Matsui, Kazuhiko Anraku, Tomonari Kotani	Using spectrophotometry optimal harvest timing of microalgae during batch cultivation period can be determined for efficient enrichment of rotifer	2017.9.4-7	ベルギー、ゲント	ポスター発表
松井 英明	*Hideaki Matsui, Mitsuharu Matsumoto, Tomonari Kotani	The comparison of intracellular structure and eicosapentaenoic acid accumulation of <i>Nannochloropsis oculata</i> cells between nutrient-repleted and -depleted phases	2017.9.22-24	日本、東京	口頭発表
Md. Mosaddequr Rahman	Md. Mosaddequr Rahman*, Jun Ohtomi	Relative growth of the deep-water velvet shrimp <i>Metapenaeopsis sibogae</i> (Decapoda, Penaeidae)	22-24 Sep, 2017	Tokyo University of Marine Science and Technology	Poster
Md. Mosaddequr Rahman	Jun Ohtomi*, Zannatul Farhana, Md. Mosaddequr Rahman	Reproduction and growth of <i>Parapenaeus lanceolatus</i> (Decapoda, Penaeidae) in Kagoshima Bay, Japan	22-24 Sep, 2017	Tokyo University of Marine Science and Technology	Poster
Md. Mosaddequr Rahman	Md. Mosaddequr Rahman*, Jun Ohtomi	Reproductive biology of <i>Metapenaeopsis kyushuensis</i> (Decapoda, Penaeidae) in Kagoshima Bay, Japan	26-30 Mar, 2018	Tokyo University of Marine Science and Technology	Oral
王 偉隆	Weilong Wang*, Manabu Ishikawa, Shunsuke Koshio, Saichiro Yokoyama	Optimum supplementation of astaxanthin for kuruma shrimp, <i>Marsupenaeus japonicus</i>	24-27 Jul, 2017	Kuala Lumpur, Malaysia	Oral

氏名	共同研究者氏名（全員の氏名、口頭・ポスター発表者に*印） members(*presenter)	口頭・ポスター発表題目 oral/poster program title	開催期間（西暦） period	開催地：国名,都市名 place:country,city	口頭発表・ポスター発表 oral/poster
王 偉隆	Weilong Wang*, Manabu Ishikawa, Shunsuke Koshio, Saichiro Yokoyama	Interactive effects of dietary vitamin E and astaxanthin on the performances of kuruma shrimp, <i>Marsupenaeus japonicus</i>	10.23-27, 2017	China, Huzhou	oral
Md Masum Billah	Billah MM* and Uno S.	Heavy metals and their geo-chemical speciation in coastal sediments	8-10 Nov, 2017	Kagoshima, Japan	Poster
小園 淳平	*Jumpei Kozono, Gregory N. Nishihara, Ryuta Terada	Habitat characteristics and the effect of temperature and irradiance on the photosynthesis of an endangered freshwater red alga, <i>Thorea okadae</i> from Kagoshima, Japan	2017.10.8-13	マレーシア, クアラルンプール	ポスター発表
小園 淳平	*小園淳平, Gregory N. Nishihara, 遠藤光, 寺田竜太	鹿児島県産淡水紅藻数種のストレス環境下における光合成活性	2017.12.2-3	長崎県長崎市	口頭発表
Islam Teiba	Islam Teiba	Application of PSB	2017.11.7-9	Japan, Okinawa	Oral
Islam Teiba	Islam Teiba	Isolation of photosynthetic bacteria (PSB) and dynamic changes of microbial community in Yamagawa bay sediment	2017.11.15-17	Japan, Kagoshima	Poster
河野 真知	*河野真知, 宇野誠一, 國師恵美子, 小山次朗	7,12-ベンズアントラセンキノンのヒメダカ胚に対する影響メカニズムの解明	2017.9.1-2	東京都	口頭発表

◇ 研究室紹介

応用生命科学専攻
生物機能化学連合講座
応用微生物学研究室（佐賀大学農学部）
後藤正利 小林元太

私どもの応用微生物学研究室では、有明海の干潟に生息する細菌叢、乳酸菌、クロストリジウム菌、清酒酵母、麹菌といった多様な微生物を対象として研究を行っています。乳酸菌については、佐賀県内から好低温性乳酸菌を分離して、食品産業で利用可能な有用乳酸菌のライブラリー化を進めると同時に、分離した乳酸菌の特異な低温適応機構を明らかにしようとしております。当研究室では、毎年寒の時期になりますと佐賀大学ブランド清酒「悠々知酔」を佐賀県内酒蔵にご協力いただき、製造しております。学生が主体となって酒造計画をたて、醸造を行い、販売も行うという、お酒が商品として社会に出ていくことまでを実学として学ばせています。「悠々知酔」の酒質の多様化を目指して、清酒酵母の分離と育種改良を行っています。有用形質を示す酵母が得られたら、その形質獲得の遺伝的要因を明らかにする予定です。沖縄は泡盛、鹿児島は焼酎、そして佐賀は日本酒作りが盛んな地域です。「悠々知酔」の造りに利用可能な黄麹菌の分離も行っています。白麹菌がクエン酸を特異的に高生産する遺伝的要因を明らかにしようとして連大醸造微生物学研究室と共同研究を進めています。また、タイからの特別研究大学院生とともに、タイの発酵食品 Sufu の製造に用いられる紅麹菌に関する研究も進行中です。

佐賀大学農学部では農水圏研究プロジェクトと名付けられた植物工場（農）やノリ養殖（水）に関する研究プロジェクトが2018年からスタートしました。当研究室は、佐賀大学農水圏プロジェクトの川村嘉応特任教授、木村圭講師とともに、ノリの生育にどのような微生物が関与しているのか、また微生物を使って安定的なノリの養殖や高品質化などができないかなど、ノリ研究における微生物側からの協力を行っています。



◇ 留学生の近況

ビリアメ ビタ ワ カ レ ブ
Viliame Pita WAQALEVU (Fijian)

Title of Research: Development of Live Feed Technology at First Feeding
for the Leopard Coral Grouper, *Plectropomus leopardus*

Advisory Professor: Tomonari KOTANI (Kagoshima University)

First Vice-Advisory Professor: Atsushi YAMAMOTO
(Kagoshima University)

Second Vice-Advisory Professor: Kazuhiro SHIOZAKI
(Kagoshima University)

Year entered: April 2016



My name is Viliame, I am from Fiji and I am currently a third year student in the PhD program. The fisheries sector is an important industry in Fiji as most communities depend on it. As the fisheries industry is an extractive industry which impacts natural populations, I decided to undertake studies in aquaculture, especially in commercially important species such as the leopard coral grouper (*Plectropomus leopardus*) along with important Japanese species, the red sea bream (*Pagrus major*) and Japanese flounder (*Paralichthys olivaceus*).

As my field of research is heavily dependent on the availability of fish eggs, my experiments are seasonal and span throughout the year: Japanese flounder (winter season), red sea bream (spring and autumn) and leopard coral grouper (summer). The focus of my research is the development of suitable live feed for the important stage of first feeding, i.e. from eggs hatching until around 7-9 days post hatch as this period is usually accompanied by high mortality in most species. The live feed that I work with is the commonly utilized euryhaline rotifer, *Brachionus plicatilis* sp. complex, comprising of two different morphotypes, the super small (SS) *B. rotundiformis* and the Large (L) *B. plicatilis*. My research is split into two phases: (i) development and assessment of different enrichments on SS and L type rotifer and, (ii) impacts of these enriched live feed on the early development of the three fish species that I study. Since beginning my research, I have presented a poster presentation at the annual national Japanese Society of Fisheries Science conference (Tokyo, Japan), an oral presentation at the Indo-Pacific Fish Conference (Pape'ete, French Polynesia), submitted a paper to Fisheries Science with a second currently being compiled for submission. I was also selected for a fully funded 4 week research internship (April-May, 2018) at three French research institutions (Centre de Recherches Insulaires et Observatoire de l'Environnement (CRIOBE); and French Research Institute for the Exploitation of the Sea (IFREMER)) and the local Department of Marine and Mineral Resources (DRMM) of the French Polynesian government. During this internship I worked on the morphological development of early stage Orbicular Batfish (*Platax orbicularis*), an important food fish species in the Pacific.

I would like to thank my supervisor Associate Professor Tomonari Kotani and my academic advisors Professor Atsushi Yamamoto and Associate Professor Kazuhiro Shiozaki for their valuable advice and direction during my study. I hope that upon completion of my studies, I return to the Pacific to help further contribute to the existing capacity in the finfish aquaculture industry in the Pacific region. ありがとうございました。

◇ 修了生より



か も たかし
加茂 崇

平成 26 年 3 月 鹿児島大学大学院連合農学研究科 修了

平成 26 年 4 月 株式会社アルファ水工コンサルタンツ 入社

現在に至る

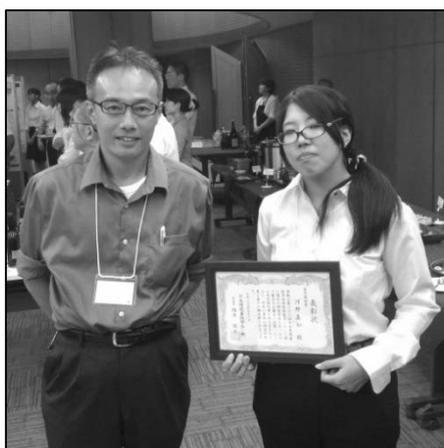
連大生の皆様、初めまして。平成 26 年 3 月に鹿児島大学大学院連合農学研究科を修了した、加茂崇と申します。連大生の時は、鹿児島大学水産学部の西隆一郎教授の研究室に在籍していました。

当時は、栄養塩供給の観点から砂浜地下水の意義を解明する研究を行っていました。沿岸域の生物生産にとって森川海の連環が重要で、これまで河川からの栄養塩供給について語られることは多かったのですが、近年は地下水からの栄養塩供給についても注目されつつあります。3 年間の連大生生活を思い出してみると、喉元過ぎれば熱さを忘れるではないですが、あまりつらいことは思い出せません(単に怠けていただけかもしれませんが)。ただ、修了後の進路のことや、そもそも 3 年間で修了できるのかといったことに対して不安を抱えていたのは覚えています。今思えば、誰もわからない未来のことを心配し、思い悩む時間があるなら、その時間を研究に充てていれば、もっといい成果を上げることができたのではないかと反省している次第です。精神論になってしましますが、何事も前向きな姿勢で取り組むことが目標を達成するための最短ルートではないかと思えます。

連大修了後、民間の建設コンサルタント会社である株式会社アルファ水工コンサルタンツに入社し、現在に至ります。現在の仕事内容は主に、漁港や漁場の整備計画に係る仕事に携わっています。漁場の適地選定を検討するために海底地形測量を行ったり、漂砂解析を実施し、航路埋没対策の検討を行ったりと様々な業務に携わっています。学生時代の研究内容とは畑違いの仕事に従事していますが、様々な業務経験を積むにつれて、いかに研究室という世界が狭く、学生時代の自分が井の中の蛙であったかということを感じ知らされる毎日です(今もあまり成長していないかもしれませんが…)。博士課程修了後、民間企業への就職を考える学生さんは少ないかもしれませんが、民間企業に勤めていても本人のやる気次第で学会発表はできますし、これからも積極的に学会という場に参加し、自己研磨に努めていきたいと思っています。

最後に、偉そうな事を言える立場ではないのですが、連大生皆様の今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

◇学会賞受賞等



所属：農水圏資源環境科学専攻

水産資源環境科学講座（鹿児島大学水産）

職名：連合農学研究科 3年

氏名：河野 真知

学 会 賞 名：日本環境毒性学会若手奨励賞

受賞研究題目：7,12-ベンズアントラセンキノンのヒメダカ胚に
対する影響メカニズムの解明

受賞年月日：平成 29 年 9 月 1 日

含酸素多環芳香族炭化水素類（oxyPAHs）は、ディーゼルエンジン車などの排気ガスから直接大気に排出される。また、多環芳香族炭化水素類が光や微生物等によって酸化されて生成するなど、様々な生成過程があり、環境中に広く分布するが、その生物に対する影響はほとんど知られていない。そこで数種の oxyPAHs をヒメダカ胚に受精直後から孵化直前まで暴露したところ、一定以上の暴露濃度で胚は発生中に様々な影響を受け、さらに頭部、脊椎骨、尾部などに奇形を呈する稚魚も孵化した。

特に 7,12-ベンズアントラセンキノ（BAQ）は、oxyPAHs の中でも毒性が強く、胚内の油球が黒化し孵化することなく死に至る、といった特徴的な影響が観察された。BAQ の胚への影響をさらに詳細に調べるためにメタボロミクス解析を行った結果、複数の代謝物に対照区とは異なる経時的変動が見られた。

そこで本研究では、メタボロミクスによって予測された影響が実際に個体に現れているのか、検証するため、BAQ 暴露された胚中のエトキシレゾルフィン O-脱エチル化活性（EROD）、過酸化脂質（TBARS）、カルボニル化タンパク質、アンモニア濃度、ATP などを測定し、BAQ 暴露による胚内の影響発現メカニズムの一端を明らかにすることを目的とした。

胚中のアンモニア濃度を測定したところ、暴露区で有意な増加が確認された。また、EROD は暴露濃度に比例して有意に増加し、ATP は暴露濃度依存的に減少していた。この結果から暴露により薬物代謝を行うための大量のエネルギーを生成するため、異化作用によりアミノ酸類が多く代謝され、過剰なアンモニアが生じたことが示唆された。アンモニアは毒性が強く、ニジマスの胚にアンモニアを水暴露すると奇形仔魚を誘発する報告もあることから、胚中の過剰なアンモニアが奇形誘発に関与していることが考えられた。

酸化ストレスの指標である TBARS とカルボニル化タンパク質を測定したところ、BAQ 暴露により有意に増加していた。このことから、胚中に取り込まれた BAQ が薬物代謝されたことに伴い、大量の活性酸素が生じ、強い酸化ストレスが誘発されたことが示唆された。また、この酸化ストレスに対応するため、胚中で抗酸化作用を持つアスコルビン酸（AsA）が、メタボロミクス解析時に見られた AsA の減少に強く関連していることが考えられた。さらに BAQ を暴露された胚から孵化した仔魚の軟骨を染色した結果、顎部分の軟骨の一部、尾部軟骨の形態異常や不形成及び欠損が観察された。AsA は、軟骨を形成するコラーゲン生成時に必須の物質であり、顎や尾部軟骨の形成不全は、BAQ 暴露による胚中の AsA 不足と関係している可能性が高いことが示唆された。



Belong: Science of Bioresource Producton
University Saga University

Year: D3

Name: Rehnuma Haque

Academic conference: 3rd World Congress on Public Health,
Nutrition & Epidemiology

Program Title: Strengthening Health Systems and Promoting
Awareness

Date of award: 2017.11.14

Rehnuma Haque is a medical graduate and earned her Master's in Public Health (MPH) in 2013 from North South University, Bangladesh. On the next year, 2014 she got a call for Japanese government scholarship (MEXT) and moved to Saga University under the supervision of Prof. Tsukasa Inaoka, Laboratory of Human Ecology as a graduate research assistant and from April'2015 she enrolled in a doctoral course in The United Graduate School of Agricultural Sciences, Kagoshima University.

Ms. Rehnuma has received the best poster award presented by 3rd World Congress on Public Health, Nutrition & Epidemiology in Osaka, Japan on November 13-14'2017. Her poster focuses on reproductive and child environmental health. She is interested to understand the basic information necessary to identify major routes of exposure to environmental toxicants such as pesticides with detrimental effects on child bearing aged women and also the toxicological impact of environmental chemical compounds on children in different stages of developmental milestone. She hopes that this research will help to protect developing children from environmental health hazards and promote a healthy adulthood. Prior to joining doctoral course, she was a research physician in enteric vaccine unit at the International Cholera and Diarrheoal Disease Research Centre, Bangladesh (icddr,b), an international research organization which aims to harness the power of high-quality research Bangladesh.



所属：応用生命科学専攻 生物機能化学連合講座
鹿児島大学

学年：1年

氏名：門岡 千尋

学会賞名：糸状菌分子生物学コンファレンス学生優秀
ポスター発表賞

受賞研究題目：白麹菌におけるミトコンドリア局在型クエン酸輸送体 CtpA と YhmA の機能解析

受賞年月日：2017年11月17日

白麹菌 *Aspergillus luchuensis* mut. *kawachii* は焼酎製造に用いられる麹菌であり、菌体外に多量のクエン酸を分泌生産する性質をもつ。このクエン酸は焼酎製造時において、もろみの pH を下げ、雑菌汚染を防ぐ上で重要である。このクエン酸の生産機構について、白麹菌の類縁菌であり、クエン酸の工業生産に用いられる黒カビ *Aspergillus niger* において、効率的なクエン酸の排出がクエン酸高生産に重要である可能性が指摘されているものの、排出の鍵となるクエン酸輸送体は糸状菌において同定されていない。本研究は白麹菌のクエン酸高生産機構に関与するクエン酸輸送体の同定とその機能解析を目的として行った。

白麹菌のゲノム上に、出芽酵母 *Saccharomyces cerevisiae* におけるクエン酸-リンゴ酸交換輸送体 Ctp1 と、クエン酸-オキソグルタル酸交換輸送体 Yhm2 のホモログとして *ctpA* 遺伝子および、*yhmA* 遺伝子を見出した。各遺伝子破壊株を構築し、表現型を観察した結果、*ctpA* 破壊株は野生株と比較して分生子形成能が低下した。一方、*yhmA* 破壊株は生育が遅延し、分生子形成能が低下した。次に各破壊株の菌体量あたりのクエン酸生産量を測定した結果、*ctpA* 破壊株は野生株の約40%、*yhmA* 破壊株は約20%に低下した。各 GFP 融合タンパク質の細胞内局在を観察した結果、いずれもミトコンドリアに局在することが示された。また、白麹菌を宿主として、TetOn システムの制御下で各 S タグ融合タンパク質を発現させ、タグ精製する系を構築した。各精製タンパク質をリポソームに再構成し、¹⁴C クエン酸の輸送活性を測定した結果、どちらも輸送活性を示した。以上の結果より、CtpA と YhmA は白麹菌におけるミトコンドリアに局在するクエン酸輸送体であり、白麹菌のクエン酸高生産機構に関与することが示唆された。一方で、両遺伝子の二重破壊株の構築を試みたが、破壊株は取得できなかったため、TetOn システムの制御下で *ctpA* を発現制御できる株を構築し、その後 *yhmA* を破壊した。この Tet-*ctpA*Δ*yhmA* 株は *ctpA* の発現非誘導時において、顕著な生育の遅延が確認された。この生育遅延の原因について、代謝物の観点から解析を行った結果、破壊株において細胞内リジン濃度が減少していることを見出した。そこで、Tet-*ctpA*Δ*yhmA* 株を発現非誘導条件において、リジンを添加した最小培地上で培養したところ、生育遅延が改善された。以上の結果より、白麹菌において、ミトコンドリアから細胞質へのクエン酸排出はクエン酸高生産に重要なだけでなく、リジン生合成にも必須である可能性が示唆された。



Belong: ANIMAL RESOURCE PRODUCTION

United Graduate School of Agriculture Science Kagoshima University

University of the Ryukyus

Year: D1

Name: ASEP SETIAJI

Academic conference: 124th Scientific Meeting of Japanese Society of Animal Science

Program title: English Presentation Award

Date of award: March 28, 2018



所属：鹿児島大学大学院連合農学研究科（鹿水）

職名：博士課程1年

氏名：小園 淳平

学会賞名：Outstanding Poster Presentation in the 8th Asian Pacific Phycological Forum

受賞研究題目：Habitat characteristics and the effect of Temperature and irradiance on the photosynthesis of an endangered freshwater red alga, *Thorea okadae* from Kagoshima, Japan.

受賞年月日：2017年10月13日

2017年10月8日から13日にかけて行われた8th Asian Pacific Phycological Forumにてポスター発表を行い、学生を対象とした上記の賞を受賞したのでここに報告する。

本研究は淡水に生育する大型紅藻チスジノリ *Thorea okadae* の生理生態について報告したものである。チスジノリは環境省レッドデータブックにおいて絶滅危惧II類に指定されている絶滅危惧藻類であり、保護・保全の為に早急な対策が求められている。研究ではフィールドにおいて生育環境を調査し、室内実験系において光合成活性という観点から至適な温度と光環境を明らかにすることを目的とした。フィールド調査の結果、河川の川床に生育するチスジノリは一日の温度・光環境が大きく変化する環境に晒されていることがわかった。また、低温時に強い光が当たると、光合成活性が著しく低下し、その後治癒期間においても十分に回復しないということがわかった。これらのことから、冬季の昼間における長時間低温・強光環境が光合成活性に影響を与えることが示唆された。

初参加となる国際学会において賞をいただけるということはまさに望外の結果であり、自身の研究内容がこの分野において一定の功績があると認められたように感じ嬉しく思った。発表前は海外の研究者を相手に私の英語力でうまく研究内容が伝わるかどうか自信がなかったが、発表中は質問に対するレスポンスを丁寧に返す事もでき、自信につながった。

本研究は私一人では決して成し遂げることはできず、様々な人々のご助力があって初めて発表に至ることが可能になった。研究内容や発表に対する姿勢を指導して下さった指導教員の寺田竜太教授、様々なサポートやアドバイスをしてくださった共同研究者の先生方に厚く感謝申し上げます。



所属：鹿児島大学農学部

職名：教授

氏名：岩井 久

学会賞名：日本植物病理学会賞

学会賞受賞研究題目：南部日本で発生する植物ウイルス病の診断と遺伝子解析に関する研究

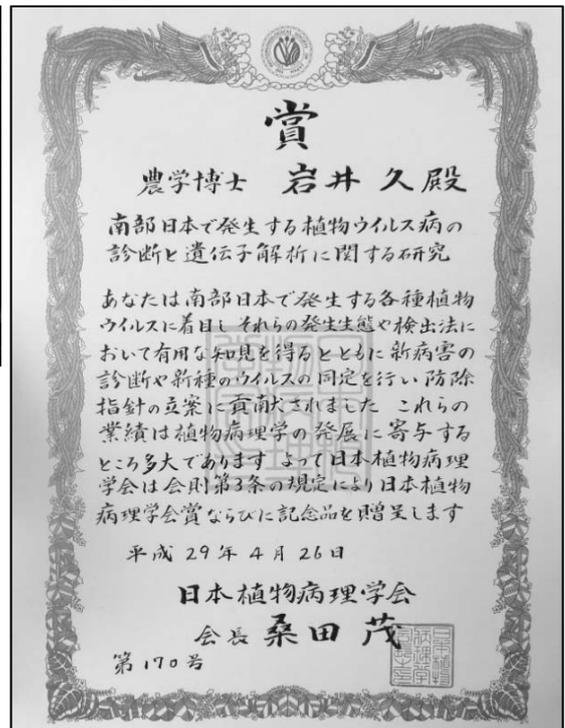
受賞年月日：平成 29 年 4 月 26 日（日本植物病理学会大会（盛岡市マリオス））

九州南端から台湾北東にかけて位置する南西諸島は年平均気温が 23℃で、果樹類や特用作物の種類が豊富ですが、大陸や東南アジアに比較的近く、媒介者の種類が多いことなどから、新病害を含む種々の植物病が盛んに報告されています。筆者らはこれまで南九州・大隅諸島・奄美群島を中心に植物病の診断と遺伝子解析を行ってきましたが、中でも特に頻繁に見られたのがアブラムシで媒介されるポティウイルス (potyvirus) です。ポティウイルス属 (*Potyvirus*) はポティウイルス科 (*Potyviridae*) を構成する 8 属のひとつでジャガイモ Y ウイルス (PVY) をタイプ種とした、(+)1 本鎖 RNA をゲノムに持つ、長さ 680~900nm のひも状ウイルスの集団です。これまでに扱ったポティウイルスとその宿主を列記すると、*Bean yellow mosaic virus* (グラジオラス、ソラマメ)、*East Asian passiflora virus* (EAPV、パッションフルーツ)、*Japanese yam mosaic virus* (ダイジョ、ヤマノイモ)、*Lily mottle virus* (テッポウユリ)、*Onion yellow dwarf virus* (ニンニク)、*Sweet potato feathery mottle virus* (サツマイモ)、*Pepper mottle virus* (ピーマン) *Soybean mosaic virus* (ダイズ)、*Sugarcane mosaic virus* (サトウキビ) など多岐にわたります。この中でも EAPV については、特に被害が大きかった奄美地域で、90 年代から防除に携わり、血清診断や遺伝子診断を利用して無毒苗を生産し、集落ぐるみでの植え替えを進め、多くの地域でウイルスを駆逐しました。このように、地元農家へ防除技術を提供してきた功績が評価され、本賞を受賞するに至りました。

マリオス会場
(盛岡市)での
受賞者講演



副賞の腕時計と
バンド上箱の刻印



所属：鹿児島大学水産学部

職名：准教授

氏名：佐々木 貴文

学会賞名：漁業経済学会

受賞年月日：2017年6月4日

2017年6月4日、漁業経済学会より、奨励賞をいただきました。漁業経済学会は、1952年に発足して以来、60年以上の長期にわたり漁業分野における経済学の深化と追究を続けてきた組織で、漁業に関する政策・生産構造・法制度・労働・歴史などを研究テーマとして活動しています。今回の奨励賞は、漁業経済学会が発行している学会誌『漁業経済研究』に掲載された3つの論文と2つの書評に対して「斯学の進歩に貢献」と評価された結果でした。今後も、微力ではありますが、漁業経済学の発展に尽力できればと願っています。

なお、3つの論文は次の通りです。(1) 佐々木貴文「「日台民間漁業取決め」締結とそれによる尖閣諸島周辺海域での日本および台湾漁船の漁場利用変化」、漁業経済学会『漁業経済研究』(第60巻第1号)、2016年1月、43～62頁。(2) 佐々木貴文「水産業と学歴の近代史－福井県立小浜水産学校における人材養成に注目して－」、漁業経済学会『漁業経済研究』(第57巻第1号)、2013年1月、87～105頁。(3) 佐々木貴文「近代日本の資本制漁業発達期における長崎県水産講習所の漁業者養成」、漁業経済学会『漁業経済研究』(第50巻 第3号)、2006年5月、23～51頁。



所属：鹿児島大学学術研究院農水産獣医学域農学系

職名：准教授

氏名：池永 誠

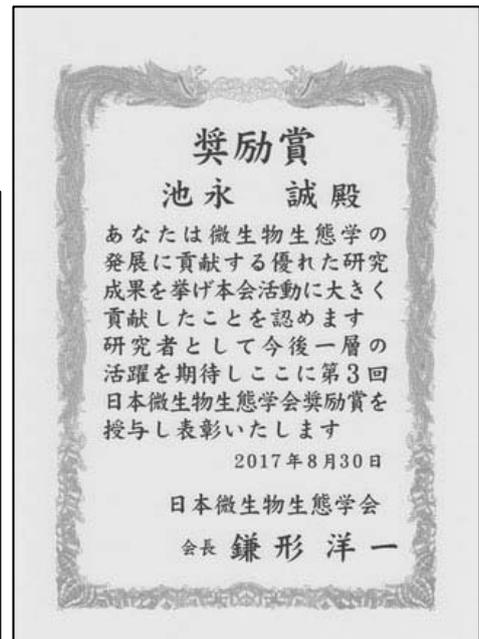
学会賞名：第3回日本微生物生態学会奨励賞

学会賞受賞研究課題：分子生態学的手法を用いた植物共存微生物の群集構造解析法の確立

受賞年月日：2017年8月30日

分子生態学的手法を用いた植物共存微生物の群集構造解析においては、宿主植物由来の DNA が混入し、16S rRNA 遺伝子を標的とした細菌の群集構造解析では、植物オルガネラ(ミトコンドリア・プラスチド)の DNA が、ITS 領域を標的とした糸状菌の群集構造解析では、主に宿主植物の DNA が過剰に PCR 増幅される重大な問題が存在する。分子生態学的手法が植物共存微生物の群集構造解析に適用されて以来、この問題は度々指摘されてきたが、満足のいく解決法は報告されて来なかった。本研究ではこの問題を解決するため、宿主植物に由来する DNA の PCR 増幅を抑制する一方で、植物共存細菌または植物共存糸状菌の DNA を選択的に増幅する方法を開発し、分子生態学的手法を用いて迅速かつ簡便に植物共存微生物の群集構造を解析する方法を確立した。本研究で確立した選択的 PCR 増幅法では、細菌・糸状菌解析いずれの場合もロックド核酸(LNA)を用いた。人工核酸の LNA は DNA に比べて熱安定性が高く、相補的な塩基にシビアである特徴を持つ。本研究ではこの特徴を応用し、細菌解析では、プライマーのアニーリング部位と競合する位置に、ミトコンドリアとプラスチド遺伝子に特異的な LNA オリゴをフォワード側とリバース側にそれぞれ設計し、PCR クランプ技術を適用する事によって、細菌遺伝子の選択的 PCR 増幅に成功した。本研究の結果、植物根だけでなく、種子や葉・茎等の細菌 DNA の割合が植物オルガネラ DNA に比べて低い試料でも、効果的に細菌遺伝子を選択的に増幅する事が可能となった他、種々の植物にも適用可能な LNA オリゴを設計し、本法を汎用性の高い解析法とした。他方、ITS 領域を標的とした糸状菌解析では、フォワード側に糸状菌に特異的な LNA プライマーを、リバース側に宿主植物に特異的な LNA オリゴを設計し、LNA プライマーと PCR クランプ技術の両方を適用する事により、植物共存糸状菌の DNA を効率的に増幅する事に成功した。宿主植物 DNA/糸状菌 DNA 比の大きな葉や茎では、宿主植物 DNA の増幅抑制がやや不十分であったものの、DGGE 解析でバンドパターンを見る限り、群集構造解析が十分可能なレベルに達していると判断された。さらに本研究では、種々の植物にも適用可能な LNA オリゴを設計し、細菌解析と同様に糸状菌解析においても本法を汎用性の高い解析法とした。

受賞講演の様子





所属：佐賀大学 農学部

応用生物科学科

生物資源開発学講座 熱帯作物改良学分野

職名：准教授

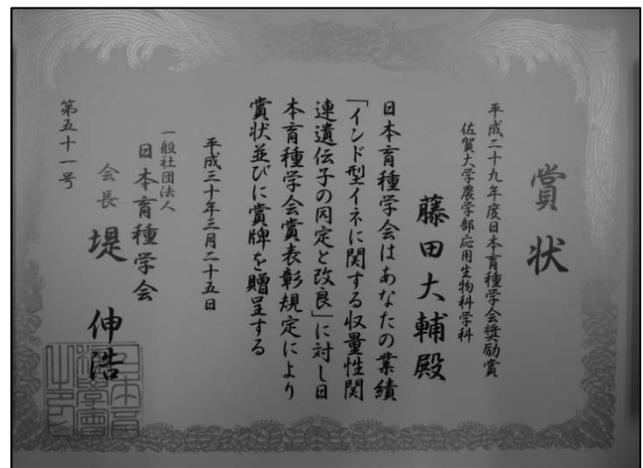
氏名：藤田大輔

学会賞名：平成29年度 日本育種学会奨励賞

受賞研究題目：インド型イネに関する収量性関連遺伝子の同定と改良

受賞年月日：2018年3月25日

1960年代の”イネの緑の革命”以後も熱帯地域のイネの収量と関連する形質の改善が求められていた。1990年代に収量性を改良するために、穂重型である熱帯日本型品種を用いて New Plant Type (NPT) 品種が育成されたが、収量増加には至らなかった。1990年代後半から、日本-IRRI 共同研究プロジェクトにおいて、この NPT の特徴づける形質を導入することで、熱帯で広く利活用されているインド型近代品種「IR 64」の遺伝的改良を試みてきた。「IR 64」を遺伝的背景に 10 集団の染色体断片置換系統群 (Chromosomal Segment Substitution Lines: CSSLs) や 20 系統の近似同質遺伝子系統 (NILs: near-isogenic lines) を育成・評価し、収量性に関連した遺伝子同定と有用系統の育成を実施してきた。特に、籾数増加に関する遺伝子座を詳細に解析し、1 穂籾数を増加する遺伝子 *SPIKE* (*SPIKELET NUMBER*、*NAL1* と同座) を特定した。*SPIKE* は、大きな穂を持つ NPT 品種に由来し、葉や 1 穂籾数などの形態を改善し、インド型品種の収量を約 20% 増加させた。DNA マーカー選抜育種により *SPIKE* が導入された東南・南アジアのインド型普及 5 品種 (PSBRc18、TDK1、Ciherang、Swarna、BR11) すべての遺伝的背景で、1 穂籾数の増加が確認された。その他にも候補者は出穂性、稈長、穂長、穂数、葉身長、葉身幅、籾数、籾重に関わる合計 72 の遺伝子座を同定した。





所属：鹿児島大学水産学部

職名：教授

氏名：木村郁夫

学会賞名：日本水産学会 水産学技術賞

受賞研究題目：生体内 ATP を利用した高品質冷凍水産物の
製造・流通技術の開発

受賞年月日：平成 30 年 3 月 28 日

水産物の品質は畜肉等に比べて低下しやすく、品質を長期間維持するための技術研究は水産食品学の主要な研究領域である。日本においては刺身や寿司などの「生食」文化があり、生肉としての品質維持が日本において重要であったが、近年では和食が世界文化遺産として登録されるなど世界中で寿司等の食文化が受け入れられ、高品質な生食用水産物の需要が高まっている。刺身商材として需要の高い養殖ブリの輸出は急増しており 138 億円（2015 年）となっているが、更に輸出量を伸ばすことが計画されている。一方、水産物の輸出・流通に関する未解決な技術課題は -20°C のような温度帯での冷凍保存と解凍処理をしても高品質な刺身として提供を可能とすることであり、本技術の確立については水産業界から強く要望されている。冷凍解凍処理は水産物に強烈な変性を惹起する工程であり、物性の軟化、ドリップの発生、赤身肉や血合肉の褐変などを引き起こし、刺身の商品価値を低下させる。刺身等の生食用食材として利用する場合は添加物を使用することはできない。

私の研究室では魚肉中に含まれるアデノシン三リン酸（ATP）が示すタンパク質変性抑制作用に着目して、魚類筋原線維の冷凍変性やミオグロビンのメト化および魚類筋小胞体 Ca-ATPase の変性に対する ATP の作用について基礎研究を進めた。その結果、生理的な濃度の ATP は魚肉タンパク質の冷凍変性を強烈に抑制すること、特に、魚肉血合肉に多量に含まれるミオグロビンの冷凍保存におけるメト化進行を抑制することを明らかにすることができた。

これらの研究成果を基に、ブリ類の高品質冷凍品の生産と流通を可能とするための実用化技術開発を行い、この技術を使った冷凍ブリフィレの EU への輸出が始まり、バイヤーから高品質であるとの評価が得られている。また、ATP の変性抑制作用を利用した水産物の高品質冷凍品の製造・流通技術は、鹿児島の島嶼圏水産物の高付加価値化をもたらす技術としても応用することができ、与論島の水産物について高濃度 ATP を残した冷凍フィレ商品の製造と流通が開始された。

以上に示した基礎研究から応用研究に関する成果に対して水産学技術賞が授与された。



大田伊久雄氏の一連の業績は、欧米諸国および日本の国有林を中心とする公的森林管理のあり方についての実態解明と比較考察である。

まず、アメリカに関しては、国有林とそれを管理する農務省森林局に焦点を当て、組織の形成段階から現代にいたる歴史の変遷を丹念に調査した。そして、大恐慌や戦争、経済成長や環境保護運動の台頭という 20 世紀の激動の歴史の中で、専門家集団としての森林局が国民の財産である国有林を責任を持って管理するという理念の一貫性について考察した（業績 1, 2, 3）。

次にヨーロッパに関しては、EU における森林・林業施策の発展段階に着目し、バイオマス利用や森林認証制度の広がりから森林管理の社会的重要性を論じた。さらにフランスにおける林業公社の役割と国

有林・公有林管理の実体解明、森林法典の改正とそれに伴う制度改革、ポーランドにおける森林・林業の現状と国有林管理の組織・制度の詳細や地域における国有林フォレスターの位置付け、スロバキアにおける共有林制度の歴史の変遷と森林管理に対する人々の思い等を現地調査により解明した（業績 4, 5, 6, 8）。

また、日本の国有林問題に関しては、既存研究を踏まえた上で海外との比較という視点を採り入れた新しい研究領域を開拓している。業績 7 では、19 世紀終盤のほぼ同時期にヨーロッパから林学を採り入れた日本とアメリカとの法制度や国有林組織、林業研究や大学教育の発展の時代的な比較を通し、我が国の国有林管理の現状における問題点を指摘した。さらに業績 9 では、国有林制度の歴史上での存在目的の変遷を分析し、諸外国の事例との比較を通じた評価を行った。

以上のように大田氏の研究の特徴は、現地調査を踏まえた実体解明を徹底していること、歴史的な流れを踏まえた現状認識を重視していること、世界的な視野での比較検討を通じた課題の抽出を試みていること、と要約することができる。いずれの業績も海外林業分野ならびに国有林研究分野において林業経済研究の進展に大きく貢献するものであり、林業経済学会賞（学術賞）受賞に値するものである。

受賞理由業績一覧

- (1) 大田伊久雄（1998）『アメリカ林業と環境問題』（村嶋由直編・共著）日本経済評論社 239pp. 第 4 章「国有林経営の実態と木材生産」（p. 77-101）および第 5 章「国有林政策の戦後過程と環境への配慮」（p. 102-128）
- (2) 大田伊久雄（2000）『アメリカ国有林管理の史的展開：人と森林との共生は可能か』京都大学学術出版会 362pp
- (3) 大田伊久雄（2001）「国民の森林という視点からみたアメリカ国有林」日本林学会誌 83（3）：183-190
- (4) 大田伊久雄（2005）『ヨーロッパの森林管理：国を超えて・自立する地域へ』（石井寛・神沼公三郎編著・共著）日本林業調査会 333pp. 第 8 章「フランス森林法典の改正と森林公社改革」（p. 227-258）および第 11 章「ポーランドの森林・林業」（p. 307-333）
- (5) 大田伊久雄（2008）「ポーランドにおける国有林管理の現状と課題」林業経済研究 54（2）：28-40
- (6) 大田伊久雄（2009）「存在感を高めるヨーロッパの森林政策と持続可能な森林管理の広がり」林業経済研究 55（1）：21-34
- (7) 大田伊久雄（2013）『農林資源開発の世紀：資源化と総力戦体制の比較史』（野田公夫編・共著）

京都大学学術出版会 502pp. 第4章「森林の資源化と戦後林政へのアメリカの影響」(p. 175-225)

(8) 大田伊久雄 (2015) 『森林経営をめぐる組織イノベーション：諸外国の動きと日本』(岡裕泰・石崎涼子編著) 広報ブレイス 331p. 第7章「スロバキアの林業と共有林経営」(p153-180)

(9) 大田伊久雄 (2015) 「我が国における国有林の存在意義に関する一考察」 林業経済研究 61(1):3-14

◇連大行事と活動

平成 29 年度 連合農学研究科学位記授与式（後期）

3月16日、平成29年度大学院連合農学研究科後期学位記授与式が挙行政され、授与式に出席した8名に前田芳實学長から学位記が授与されました。

前田学長から、「今日から皆さんは独立した研究者、専門技術者あるいは教育者として新たな目標に向かって出発されますが、本連合農学研究科で切磋琢磨し、自らの学修と研究目標を達成されたことに誇りを持ち、今後ますます高い志を持ってご活躍していただきたい」と告辞があり、続いて構成大学である佐賀大学の宮崎耕治学長の代理として有馬進農学研究科長、琉球大学の大城肇学長の代理として井上章二農学研究科長からそれぞれ祝辞がありました。

修了生を代表して佐賀大学配属の安達修平さんから「荣誉ある称号を頂けたのは、多くの方々の支えがあったからにほかなりません。今後も連大で学んだことを十分に活かし、向上心を忘れず、社会の発展に積極的に貢献できるよう精進して参ります」と謝辞がありました。

式には指導教員や学位取得者のご家族も出席し、新しい博士の誕生を喜びました。

また、式典後の祝賀会では、今年度の修了者で特に優秀な2名の学生が、靱井連合農学研究科長から、連合農学研究科優秀学生として表彰されました。

【平成 29 年度後期の博士学位取得者 10 名】

<課程博士 10 名>

- ・日本人 5 名
- ・外国人留学生 5 名（タンザニア 1 名、バングラデシュ 1 名、インドネシア 1 名、エジプト 1 名、韓国 1 名）

（学位記を授与する前田学長）



（修了生を代表して謝辞を述べる安達さん）

（左から靱井研究科長、優秀学生のコンスタンチンさんと
溝部さん、前田学長）



平成 30 年度 連合農学研究科入学式

鹿児島大学大学院連合農学研究科では、4月13日、平成30年度入学式を挙行し、社会人4名、5カ国からの外国人留学生8名を含む24名が入学しました。

前田芳實学長から24名の入学許可が行われた後、入学生を代表して鹿児島大学附属の生物生産科学専攻 中尾 祥宏さんが「高度な研究能力を培い、学識の習得に専念することを誓います」と宣誓しました。

前田学長からは、「今年設立30周年を迎える連合農学研究科において、社会との関わりの中での研究を深め、多様な物の考え方、グローバルな視野と行動力、高度研究者としての基礎力をしっかりと身につけ、人類社会の持続的発展と、この素晴らしい地球のために皆さんの惜しみない努力と情熱が注がれることを心から祈念します。」と告辞がありました。引き続き、構成大学である佐賀大学の宮崎耕治学長の代理として有馬進農学研究科長、琉球大学の大城肇学長の代理として井上章二農学研究科長から、それぞれ祝辞が述べられました。

【留学生の国内訳：8名】

中国4名、バングラデシュ1名、ベトナム1名、インドネシア1名、スリランカ1名

(入学生代表 鹿児島大学附属生物生産科学専攻
中尾祥宏さんによる宣誓)



(写真中：前田芳實学長による告辞)

平成30年度入学式告辞

鮮やかな楠の若葉が春の光に輝き、まさに春爛漫の今日、御来賓及び関係者の方々にご出席を賜り、平成30年度の入学式を挙げていただけますことは、鹿児島大学大学院連合農学研究科にとりまして、大きな喜びであります。

本日、新たに本研究科にお迎えすることとなりました、24名の新入生の皆様を心から歓迎いたしますとともに、お祝いを申し上げます。

新入生24名の内訳は、生物生産科学専攻9名、応用生命科学専攻9名、農水圏資源環境科学専攻6名となっており、佐賀大学配属の学生が4名、琉球大学が8名、鹿児島大学が12名であります。入学生の中には社会人の方が4名おられ、仕事と研究を両立させながら研究と論文作成に励むこととなります。

また、新入生の中には5カ国から8名の熱い志を持った外国人留学生在が入学されました。留学生の皆さんが本研究科で勉学・研究に研鑽を積まれるとともに、日本の生活・風土に触れ、日本文化への理解も深められますことを期待致します。遠く祖国を離れ、言葉や生活習慣など、いろいろ慣れないこともあるかと思いますが、指導教員をはじめ多くの人々との交流がなされ、学ぶ事、研究する事の楽しさを味わい、目的を成し遂げられることを祈っております。

本研究科は、今年設立30年目を迎え、佐賀大学、琉球大学、鹿児島大学が参画する農林水産学系博士課程の大学院で、西日本及び広くアジア・アフリカを視野に入れた、熱帯・亜熱帯の特徴ある農業、林業、水産業と密接に関係した教育・研究が高く評価されています。

本研究科では、先端的生命科学を駆使した食料生産、生物資源の有効利用、農林水産学を取り巻く環境保全、食の安全・安心を基軸にした品種改良などの技術革新、国際化、地域貢献を目指して、それぞれの分野のリーダーとなる人材の養成を行っています。皆さんの研究テーマも、最先端の生命科学の研究から、農林水産業の基礎となる研究、地域に密着した研究、生物資源の開発と有効利用に関する研究、持続可能な農業や資源再生などの環境保全に関する研究など、多岐にわたっています。この中から、世界に輝く研究が生まれてくると信じております。

近年の科学技術の飛躍的發展はグローバル化の進行と共に、我々の日常生活に大きな影響をもたらし、社会を大きく変貌させる事となりました。

このような中で、温室効果に由来する地球環境の変化や自然災害、地球人口の急増と食料資源の生産、新たなエネルギー社会の構築や資源節約の克服のための革新的技術開発、貧困・較差・差別・紛争・感染症の脅威や新たな冷戦の懸念などが挙げられ、また、国内的課題として、急速な少子高齢化の進行と労働人口の減少や地域コミュニティの衰退、さらに、東日本大震災や熊本地震からの復興と再生の取り組みなど、様々な課題が立ちはだかっています。私達はこれらの課題に対して、知恵を出し合い、希望ある未来と安定的かつ持続的な社会の実現に向けて貢献しなければなりません。

鹿児島大学大学院連合農学研究科は、その責務として、社会の変革と発展にリーダーシップを発揮する人材、グローバル社会で活躍する人材、また、イノベーションの創出に貢献する人材の養成を行います。

本日、入学を果たされた皆さんは、本研究科での学びや出会いを通して、専門性を深め、高度な技術や解析能力を高めると共に、社会との関わりの中での研究を深め、多様な物の考え方、グローバルな視野と行動力、課題発見力、発信力、コミュニケーション力など、高度研究者としての基礎力をしっかりと身につけなければなりません。

これまでに本研究科より社会に送り出した910名の修了生は、日本だけでなく、世界各国で高い評価を受けて、農林水産学分野のみならず、さまざまな専門分野で活躍しています。皆さんも、研究面だけでなく、人間的にも成長し、高い倫理観を備えた研究者に成長していただきたいと思います。高い志をもって、日々の研鑽に励んでください。3年後には、日本そして世界の新しいリーダーとして、ここを巣立っていかれることを心より期待します。人類社会の持続的発展とこの素晴らしい地球のために、皆さんの惜しみない努力と情熱が注がれることを、心から祈念して告辞といたします。

平成30年4月13日

鹿児島大学長 前田 芳實

なお、平成29年度前期学位記授与式（前期）は平成29年9月22日（課程博士5名、うち留学生1名：バングラデシュ）に、平成29年度秋季入学式は平成29年10月6日（入学者6名、うち留学生5名：タイ1名、ベナン1名、ベトナム2名、中国1名）に執り行いました。



平成29年度前期学位記授与式

上：告辞を述べられる梶井研究科長

右：修了生を代表して謝辞を述べる、保 聖子さん



平成29年度前秋季入学式

上：入学式参列者

右：構成大学研究科長祝辞を述べられる
琉球大学農学部研究科 井上研究科長



平成 29 年度 全国連合農学研究科協議会

大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）が置かれている。

協議会は、構成大学全体会議と研究科長会議を包含し、構成大学全体会議は年 1 回、研究科長会議は年 2 回開催することとされ、さらに、研究科長会議は特に必要な場合は臨時に開催することができることとされている。

開催時期は、基本的に 6 月に構成大学全体会議と研究科長会議を東京農工大学大学院連合農学研究科が幹事となり開催し、研究科長会議は 10 月又は 11 月に東京農工大学以外の 5 連大の持ち回りにより開催している。

なお、平成 29 年度の秋の同研究科長会議は、愛媛大学の当番で実施され、活発な意見交換があった。

全国連合農学研究科協議会規約

(昭和60年 5月28日制定)

(目的)

第 1 条 大学院連合農学研究科における教育及び運営等に関する諸問題を協議し、連合農学研究科の充実と発展を図ることを目的として、全国連合農学研究科協議会（以下「協議会」という。）を置く。

(組織)

第 2 条 協議会は、次の二種の会議を包含し、それぞれの会議は次の職にある者をもって組織する。

- 一 構成大学全体会議：各連合農学研究科の研究科長・専任教官及び各構成大学の農水産学部長（単科大学長を含む。）
- 二 研究科長会議：各連合農学研究科の研究科長及び専任教官

(委員以外の者の出席)

第 3 条 協議会が必要と認めたときは、議題により関係者の出席を求めることができる。

(会議の開催)

第 4 条 協議会の開催は、次のとおりとする。

- 一 構成大学全体会議は、国立大学農学系学部長会議の開催に合わせて、年 1 回開催する。
- 二 研究科長会議は、年 2 回開催する。ただし、特に必要がある場合は、臨時に開催することができる。

(庶務)

第 5 条 協議会の庶務は、東京農工大学大学院連合農学研究科が各構成大学の協力を得て処理する。

(雑則)

第 6 条 この規約に定めるもののほか、協議会の運営に関して必要な事項は、協議会が定める。

附 則

この要項は、昭和 60 年 5 月 29 日から実施する。

附 則 (昭和 63 年 7 月 1 日)

この要項は、昭和 63 年 7 月 1 日から施行する。

附 則 (平成 3 年 6 月 7 日)

この要項は、平成 3 年 6 月 7 日から施行する。

附 則 (平成 6 年 6 月 8 日)

この規約は、平成 6 年 6 月 9 日から施行する。（連合農学研究科間連絡会議要項の改正。）

附 則 (平成 8 年 6 月 7 日)

この規約は、平成 8 年 6 月 8 日から施行する。

附 則 (平成 11 年 6 月 4 日)

この規約は、平成 11 年 6 月 5 日から施行する。

最近の秋の当番大学、開催日、実施場所は次のとおり

平成15年度	鹿児島大学	10.30(木)～31(金)	鹿児島東急イン
平成16年度	鳥取大学	10.28(木)～29(金)	ウエルシティ鳥取
平成17年度	岩手大学	10.27(木)～28(金)	ホテル安比グランド「花輪」
平成18年度	岐阜大学	11.16(木)～17(金)	ひだホテルプラザ
平成19年度	愛媛大学	11.1(木)～2(金)	メルパルク松山
平成20年度	鹿児島大学	10.30(木)～31(金)	ホテルレクストン鹿児島
平成21年度	鳥取大学	11.5(木)～6(金)	ホテルモナーク鳥取
平成22年度	岩手大学	11.4(木)～5(金)	いろり火の里「なの花ホール」(山形県)
平成23年度	岐阜大学	10.20(木)～21(金)	岐阜大学、ホテルグランヴェール岐山
平成24年度	愛媛大学	10.25(木)～26(金)	メルパルク松山
平成25年度	鹿児島大学	10.24(木)～25(金)	ウエルビュー鹿児島
平成26年度	鳥取大学	10.30(木)～31(金)	ホテルモナーク鳥取
平成27年度	岩手大学	10.22(木)～23(金)	ホテルメトロポリタン盛岡
平成28年度	岐阜大学	10.27(木)～28(金)	クーポール会館(静岡県)
平成29年度	愛媛大学	10.19(木)～20(金)	愛媛大学
平成30年度	鹿児島大学	10.25(木)～26(金)	鹿児島大学

連合一般ゼミナール「農学共通講義」

「農学共通講義」は、全国6つの連合農学研究科が合同で行う集中講義形式授業であり、年2回（前期：日本語，後期：英語）開講される。SINETによる「多地点制御遠隔講義システム」を活用し、6連合農学研究科（18構成大学）が連携し、高い専門性，幅広い分野の講師を年度ごとに選定して開講している。

本特別講義は、前期連合一般ゼミナール、後期連合一般ゼミナールとして平成21年度から、全国6連合農学研究科連携のもと、選択科目として開講されたもので、全3日間で90分授業を12コマ用意している。

開催にあたっては、6連合農学研究科の持ち回り担当にて、後期（英語）及び前期（日本語）を1サイクルとしている。鹿児島大学は、平成28年度後期（英語）、平成29年度前期（日本語）を担当した。

当該ゼミナールの講義名、修得コマ数及び付与単位に関しては、各連合農学研究科に委ねられており、本研究科においては、前期（日本語）に関しては「農学共通講義Ⅰ（日本語）」、後期（英語）に関しては「農学共通講義Ⅱ（英語）」として開講している。また、単位に関しては4コマ修得で0.5単位、8コマ以上で1単位としている。

平成29年度前期（日本語）は平成29年6月14日（水）～16日（金）まで実施され、鹿児島連大から玉置 尚徳 鹿児島大学農学部教授と、草場 基章 佐賀大学大学院農学研究科准教授が講師を務めた。また、平成29年度後期（英語）は岩手大学担当にて、平成29年11月15日（水）～17日（金）まで実施され、鹿児島連大からは講師として、バスケス・アーチデル・ミゲル 鹿児島大学水産学部教授と、芝正己 琉球大学農学部教授が参画した。

前期日本語の講義はすべて日本語で、後期英語の講義はすべて英語で行われるもので、専門的知識を修得するとともに、他連大の学生と講義を共有することにより幅広い視野を持てるものと期待している。

本特別講義は、SINETを利用して18構成大学が同時受講する。



左：スクリーンには、最高 16 大学の講義室が映し出される



実際の講義時の様子(平成29年6月前期時)
 玉置教授の講義を、SINETのカメラを通して各連大のモニターに投影。
 スクリーンでは、講師を中心として周りに最大7大学が、交互に映し出されるようになっている。



鹿児島大学大学院連合農学研究科棟3階会議室での受講の様子(平成29年11月後期時)
 左側スクリーンには講師を中心に、構成大学の講義室が映し出される。
 右側スクリーンには合議資料が映し出される。

全国18構成大学は、次のとおりである。

- (1) 岩手大学大学院連合農学研究科(岩手大学、弘前大学、山形大学、帯広畜産大学)
- (2) 東京農工大学大学院連合農学研究科(東京農工大学、茨城大学、宇都宮大学)
- (3) 岐阜大学大学院連合農学研究科(岐阜大学、静岡大学)
- (4) 鳥取大学大学院連合農学研究科(鳥取大学、島根大学、山口大学)
- (5) 愛媛大学大学院連合農学研究科(愛媛大学、香川大学、高知大学)
- (6) 鹿児島大学大学院連合農学研究科(鹿児島大学、佐賀大学、琉球大学)

中間発表会

本研究科概要には、本研究科のアドミッション・ポリシーを掲載するとともに、各専攻・連合講座毎に、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等についての方針が記述されている。これらについては本研究科のホームページにも掲載し、広く学内外に周知している。学生の指導は、学生1名に対し、主指導教員1名と副指導教員2名の計3名の指導教員があたっているが、1年次の学生については「中間報告会」、2年次の学生については研究成果の「中間発表会」を行い、その達成状況を検証している。特に、2年次学生による中間発表会には、多地点遠隔講義システム（SINET）により、各構成大学に配信され、学部生、修士学生及び教職員だれでも聴講することができるため、特に学生においては、他の学生の研究進捗状況を知る手段となり、自己研鑽の最適の要素となるものである。

中間報告会後の研究指導報告書には、1) 研究経過及び指導内容、2) 研究の進捗状況（学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性）、3) アドミッション・ポリシーについて（アドミッション・ポリシーに当該学生が沿っているか）の項目を設け、「中間発表会」終了報告書には、1) 研究の進捗状況（学会誌への投稿状況及び3年以内に学位論文が提出できる可能性）、2) 今後の指導方針の項目を追加し、研究教育指導達成状況をより具体的に把握できるようになっている。

平成29年度の中間発表会

平成27年10月入学者
平成28年10月入学社会人早期修了希望者 } 平成29年9月に実施

平成28年4月入学者・・・平成29年12月に実施



中間発表会風景。
同研究室の修士生や
学部生の前での発表
の様子。

SINET を利用することで、他構成大学配属の副指導教員へも中間発表を配信することが可能。



ティーチング・アシスタント（TA）研修会

本研究科では在學生を修士課程及び学士課程の教育補助者（ティーチング・アシスタント：TA）、あるいは研究補助者（リサーチ・アシスタント：RA）として採用し、教育研究指導者としてのトレーニングの機会を提供している。

平成18年度からTAの手引きを作成し、任務遂行のために必要な基本事項の周知を図ると共にTA活動実施報告書の提出を義務づけている。さらに平成19年度からは教育者の資質を効果的に向上させるシステムの一環として、TA活動の実態をより詳しく把握するため、アンケート形式のTA活動評価調査を開始した。TAを行った本人が提出する活動報告書ならびにTAによる指導を受けた學生を対象とした活動評価調査の結果は、集計後、TAを行った本人達へフィードバックしている。

さらに、平成20年度からは各構成大学にて、本研究科學生を対象としたTA研修会を連大主催で開催し、「TAは大学の非常勤職員の扱いとなり、教職員と同じ立場である」という点も、強く認識してもらうよう図っている。

平成19年度から平成29年度のアンケート形式のTA活動実施報告書によれば、TAを行ったことにより、将来學生を指導する際のトレーニングとして「とても役に立った」とする意見が圧倒的であり、「まあまあ役に立った」を含めると9割以上の學生がTA制度について有意義であると感じている。

次表は、平成23～29年度のTA, RAの採用状況である。ここ数年の現象傾向は、入學者の減少によるものである。

TA と RA の構成大学別年度採用数

年度 職種 構成大学	23		24		25		26		27		28		29	
	TA	RA												
佐賀大学	32	3	28	4	17	4	7	3	12	2	10	2	13	3
琉球大学	13	6	18	4	20	5	11	5	19	2	20	3	21	2
鹿大農学部	16	3	12	8	8	10	7	5	10	8	10	4	8	3
鹿大水産学部	11	5	11	6	6	4	18	4	5	6	8	4	5	10
連大	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	0
合計	72	17	69	22	51	23	43	17	46	18	48	13	48	18

代議委員による TA
研修会の様子
(平成29年6月20日
鹿児島大学にて)



連合農学研究科「男女共同参画セミナー」と「ハラスメント防止のための講演会」を開催

佐賀大学，鹿児島大学，琉球大学の連合農学教員が一堂に会する数少ない機会である平成29年9月8日の連合農学研究科教授会の前に、当日出席した93名の教員に対し、「鹿児島大学における男女共同参画の推進」について、鹿児島大学男女共同参画推進センター 浅野 陽樹副センター長が講演した。

その後、「ハラスメント防止のための講演会」を鹿児島大学大学院臨床心理学研究科 中原 睦美研究科長を講師として開催した。

両講演とも、教員の立場として常に意識しなければならないことや、それらが及ぼす悪影響など、事例・実例を交えて分かりやすくご説明いただいた。

また今回は公演後に参加者へアンケートの協力をいただき、講演の感想や自分たちが気をつけなければならない事などを記述いただき、各人の気付きにも繋がった。

本セミナーは平成26年度から引き続き開催されており、平成29年度で4回目となる。



鹿児島大学男女共同参画推進センター
浅野 陽樹副センター長



鹿児島大学大学院臨床心理学研究科
中原 睦美研究科長



分野別セミナーの開催

構成大学間の連携を促進し、さらに地域特性に根ざした産学官の連携も視野に入れて、連大生を中心とした若手研究者の意欲の向上に資することを目的として、平成 24 年度より「分野別セミナー」を開催している。

平成 29 年度は、次の 2 件が開催された。

代 表 者	所属大学名	鹿児島大学水産学部
	専 攻 名	農水圏資源環境科学
	連合講座名	水産資源環境科学
	氏 名	越塩俊介
分野別セミナーの名称	東南アジア域で展開する農水産学における国際研究協力の展望	
開 催 日 時	平成 29 年 9 月 6 日 9 時～11 時 30 分 鹿児島大学附属図書館水産分館	
セミナーの概要		
<p>【セミナーの実施内容】</p> <p>長崎大学研究員 Helen Marcial 氏より“Nagasaki University goes international: achievements and lessons learned”の講演タイトルで、長崎大学及び JICA による国際共同研究および研究支援事業についての紹介がなされた。</p> <p>次にベトナム・カントー大学の Tran Nguyen Duy Khoa 氏と Nguyen Thi Kim Quyen 氏によるベトナム・カントー大学と JICA・ODA によるメコンデルタ流域の増養殖に関する研究支援事業とカントー大学水産増養殖学部の国際共同研究事業に関する事例報告がなされた。</p> <p>最後に日本学術振興会研究員として鹿児島大学農学部に滞在中の Roger A. Luyun Jr.氏（フィリピン大学 ロスバニョス校准教授）より海岸域淡水地下水資源の開発と管理に関する国際共同研究について紹介がなされた。</p> <p>【得られた成果・意義】</p> <p>JICA-ODA などによる国際共同研究および研究支援事業に関する講演が行われ、聴講した留学生にとっては、帰国後の日本との共同研究や国際協力に関するアイデアを得る貴重な機会となったと考えられる。また、日本人学生にとっては今後の国際協力に貢献する具体的なイメージを抱くことができたと思われる。</p> <p>連合農学研究科としては、今後こうした国際的な研究協力に対応できる体制を構築することも必要であることが再認識された。</p>		
参加者数	教員 11 名	学生 11 名 計 22 名

代 表 者	所属大学名	鹿児島大学	
	専 攻 名	応用生命科学専攻	
	連合講座名	生物機能化学連合講座	
	氏 名	北原 兼文	
分野別セミナー の名称	農芸化学分野の教員・院生による分野別セミナー		
開 催 日 時	2018年3月8日(木)～3月9日(金)		
セミナーの概要			
<p>【セミナーの実施内容】</p> <p>セミナーには、講師2名、連大教員15名、連大生8名、連大進学予定修士学生3名、修士学生7名、修士進学予定学部学生5名の計40名が参加した。初日に、外部講師による先端講演会（「腸内細菌叢とビフィズス菌」森永乳業(株) 小田巻俊孝 氏、「リナロール香気誘発性鎮痛と芋焼酎香気」鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 柏谷英樹 氏）を開催し、その後、学生23名によるポスター発表と質疑応答を実施した。さらに、交流会で情報交換を行うとともに、参加者間で親睦を深めた。翌日には、農芸化学分野関連地域産業（発酵産業）を視察した。まず、鹿児島では初めてのウイスキー工場である本坊酒造(株)マルス津貫蒸留所を見学し、鹿児島大学大学院農学研究科焼酎学講座修了生の草野辰朗氏から説明を受けた。次に、鹿児島特産の芋焼酎の製造所である薩摩酒造(株)明治蔵を見学し、所長の竹山昌克氏から説明を受けた。最後に、地域発酵特産物であるかつお節工場の田畑薩男商店を見学し、代表の田畑洋幸氏から説明を受けた。</p> <p>【得られた成果・意義】</p> <p>参加学生は、先端講演、ポスター発表および交流会等を通して、分野の近い学生同士や教員との情報交換により、今後の博士論文研究の遂行と論文作成に大いに役立ったと思われる。また、農芸化学分野に関わる地域産業の視察により、実社会の理解と就職への関心を高める良い機会となり、留学生にとっては日本の物作りの現場を体験できる数少ない機会となったであろう。今回は、修士学生や学部学生の参加も多く、連大への進学をアピールすることもできた。</p>			
参加者数	教員および講師 17名	学生 23名	計 40名

平成29年度 連合農学研究科（博士課程） 「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」実施報告

鹿児島大学水産学部
木村 郁夫
西 隆一郎

平成29年度鹿児島大学大学院連合農学研究科（博士課程）「農学特別講義Ⅰ（一般セミナー）」が平成29年11月8日（水）から11月10日（金）までの3日間の日程で行われた。このセミナーの趣旨は、「鹿児島大学大学院農学研究科に在役する学生を対象とし、連合大学院教育の理念に基づき実施する」ことである。本年度は鹿児島大学水産学部が担当となり、鹿児島市内のジェイドガーデンパレスを会場とし開催した。実施内容は外部講師等によるセミナー（4コマ）、1年生による専攻セミナーおよび2年生による情報交換セミナー、水産食品生産施設・練習船見学、交流会である。参加学生数は75人（内訳：1年生34人、2年生38人、3年生3人；日本人学生34人、留学生41人）であった。

初日（11月8日（水））

開講式は14時45分より開始し、靱井研究科長による挨拶、当番校の越塩鹿児島大学水産学研究科長による挨拶および司会担当（鹿児島大学水産学部木村代議委員）によるセミナー日程説明が行われた。開講式終了後、全員の記念撮影が行われた。（Newsletter No.38 奥付 写真参照）

15時30分より初日セミナーとして竹内 裕先生（鹿児島大学水産学部助教）による「魚類の生殖細胞移植技術：サバにマグロを産ませる」をテーマに講義が17時まで行われた。魚の種苗生産では、クロマグロなどの大型海産魚の良質な卵を



計画的に産ませる技術の開発が重要である。体が小さいマサバやマアジなど小型海産魚の体を借りて、クロマグロやブリなど体サイズが大きく性成熟まで長期間を要する大型海産魚の卵や精子を生産させる代理親魚技術の確立を目指した研究戦略と成果について詳細に紹介された。活発な質疑が行われ、また、インパクトファクターの高い雑誌への投稿時のエディターとのやり取りに関する経験など学生にとって興味深い内容であった。

17時より交流会が行われ、とても美味しい食事や芋焼酎、飲み物およびハラルに対応した食事も用意され、楽しく歓談の時間を持つことができた。学生からの元気の良い自己紹介などもあり、大変盛り上がった。

2日目（11月9日（木））

9時より村山 盛一先生（琉球大学名誉教授）による「稲の一代雑種における雑種強勢と生理および形態特性」、10時40分からはRalandison Tsilavo先生（京都大学大学院経済学研究科特任助教）による「アフリカ諸国における農業協同組合－役割と課題－」、昼食後の13時10分より松浦純生先生（京都大学防災研究所教授）による「季節積雪層の形成地帯における斜面変動」が講演された。村山先生には稲の一代雑種が生育の旺盛化と収量の増大となることについて、雑種強勢の程度やその発現の様相、交雑組み合わせで遺伝的に遠い品種との交配が有効となることなどについて研究成果のご紹介をしていただいた。Tsilavo先生にはアフリカにおける農業協同組合の機能と課題について、成功事例、失敗事例等を参



考に成功要因を探り、農業協同組合の組織の作り方、組合運動に必要とされる要件について研究成果のご紹介をしていただいた。松浦先生には日本海側地方の多量の降雪に関する気象メカニズムや季節積雪層形成と融解時の水資源としての利用および水象災害や土砂災害の発生等について迫力のある動画を含めた研究成果のご紹介をいただいた。いずれのご講演も興味深い研究内容であり、活発な質疑が行われ、学生の関心の高さが伺われた。

14時50分より専攻セミナーが行われた。セミナーへの学生のグループ分けは、昨年度と同様に、分野間の交流を促すことを意図して専攻に関わらない振り分けを行った。また、グループは、学生の発言の時間を確保するために5班（昨年4班）とし、グループの人数を少なくした。司会進行は鹿児島大学水産学部の連大教員が行い、代議委員はそれぞれのグループに2から3名参加した。1年生はPC資料を用いた研究紹介プレゼン（5分間）、2年生は口頭による自己紹介を行った。研究紹介を短時間にまとめて行うことや学生同士による質疑を行うなど、専門外の研究者に対するプレゼンの仕方の訓練として、また、お互いの研究に関心を持つ良い機会となった。



16時30分より情報交換セミナーとして2年生によるポスターセッションが行われた。発表は先ず発表番号の奇数と偶数による順番分けをして行い、その後個別の自由討論や質疑を行ったが、ポスターセッション開始時間前から既に各人が大変熱心に説明をしていたため、説明の順番がバラバラになったところもあったようである。学生は大変積極的に発表するので、ポスターセッション前の全体説明時にポスターセッションのルール説明をしておく必要があると思われた。ポスターによるプレゼンは視覚に訴える工夫がなされ、プレゼン学生による積極的な説明もあり、大いに盛り上がった。代議委員の投票により、ポスター賞を3名選考した。



3日目（11月10日（金））

3日目は施設見学と閉講式が行われた。施設見学先は2か所で、一か所は鹿児島の食文化の一つであるさつま揚げについて、製造工程や製品管理を理解する目的で、南海食品株式会社のさつま揚げ工場を見学した。受け入れ人数の都合により、1グループ30名のグループで3班に分けて訪問した。瀧本社長の全体説明の後に、担当社員の皆様による見学通路からの製造工程や製品管理に関する説明が行われた。見学時には学生から種々質問がなされた。見学の最後はさつま揚げの試食が用意され、さつま揚げを賞味することができ好評であった。南日本新聞の記者も取材に来られて、後日、11月12日の南日本新聞に当日の様子と本セミナーの内容が報道された。施設見学の2か所目は、鹿児島大学の練習船である「かごしま丸」を見学していただいた。内山船長はじめスタッフから、船内設備や研究・教育活動に関する説明が行われた。水産の研究以外の学生には、船での研究活動はイメージできないものと思われるが、このような見学会を通して研究活動の幅を広げる機会となることを意図して企画した。3グループに分けて2か所の施設見学となり、時間調整などで待ち時間があったなど、運営の課題点については今後の参

考にしていただければと考えている。

12時20分より閉講式の前にポスター賞の3名の受賞が発表され、副賞には西隆一郎先生手製の貝の飾り物が記念として手渡されました。続けて、閉講式となり、靱井研究科長の挨拶、越塩水産学研究所長の挨拶、松井 英明学生代表の挨拶に続き、次期当番校の佐賀大学農学部染谷先生より引き継ぎの挨拶が行われ一般セミナーは終了した。

3日間にわたる一般セミナーの運営は、事前の準備も含め講師の選定、受託要請対応とご講演、スケジュール作成、学生からの参加登録、発表要旨作成やポスター準備、施設見学先のご協力、連大教職員のご対応などがあって、円滑に遂行することができました。紙面を借りて皆様に感謝申し上げます。

平成29年11月12日（日）南日本新聞より

大波小波

薩摩の食文化学△
鹿児島大学大学院連
合農学研究所で学ぶ大
学院生約90人が10日、
鹿児島市谷山港3丁目
の南海食品「月揚庵」
さつま揚げ工場を見学
した。写真。外国人学
生も多数参加し、鹿児
島の食文化への理解を
深めた。

連合農学研究所は、
鹿大と佐賀大学、琉球
大学が連合した農水産
学系の博士課程大学
院。この日は、3大学
の合同授業の一環とし
て各大学で学ぶ学生ら
が参加して開かれた。
工場では、瀧本敏雄
社長（46）らが、さつま
揚げづくりの工程を説
明した。学生らは、実
際に商品の詰め合わせ
をする現場などを密着
しに見学。繁忙期の態
勢や作業手順などを熱
心に質問していた。

熊本市から鹿大に通
う後藤秀章さん（47）は
「とても清潔な工場で
製造されており、食の
安全への信頼性が高ま
った」と話した。



平成29年度 連合農学研究科「人材養成学生支援セミナーI」実施報告

鹿児島大学農学部
北原兼文
三好和睦
豊 智行

平成29年8月10日（木）に鹿児島大学連合農学研究科会議室をメイン会場として、鹿児島大学水産学部、佐賀大学農学部および琉球大学農学部の会場をSINETで結び、「人材養成学生支援セミナー I 2017」が開催された。昨年度と同様、各会場に講師をお招きして講義をしていただく方式で実施され、4つの会場から1つずつの演題が配信された。幸い、配信機器などのトラブルもなく、充実した内容のセミナーとなった。参加学生は、連大の学生16名、連大以外の学生13名の計29名であった。

セミナーは4つの講演と総合討論からなり、その概要は以下の通りである。

講演1 古賀 重成 氏（元国際協力機構 上級審議役）

題目：農村開発と貧困削減

現在、全世界人口の8割に当たる約60億の人たちが、開発途上国で暮らしている。本講演では、これまでのご経験をもとに途上国の現状、それらの国々の経済発展に農林水産業が果たしてきた役割、日本からの援助の効果および今後の方向性などを紹介していただいた。さらに、この援助・開発協力に関わる分野や機関などと、それぞれに必要な技術・ノウハウならびにそのためのキャリアパスなどに関する基礎情報を提供していただいた。

講演2 高橋 修一郎 氏（株式会社リバネス 代表取締役社長COO）

題目：科学技術と社会をつなぐ知識プラットフォーム～個の Passion から生まれる新たな価値～

平成14年6月14日に、ビジネス経験をほとんど持たない理工系の大学生および大学院生15名が集まって、株式会社リバネスが設立された。当初は手製の実験教材を携えて学校向けの出前実験教室を行う教育事業のみであったが、現在では国内外において研究開発、人材開発およびベンチャーの創業支援など幅広い分野での事業を展開されている。本講演では、研究者が立ち上げた会社がこの15年間で何を考え、何をしてきたのかお話ししていただくとともに、個の情熱から新たな価値を社会に生み出した事例について紹介していただいた。

講演3 黒木 豊 氏（日本たばこ産業株式会社 経営企画部 次長）

題目：企業が期待する博士人財とは

現在、博士課程修了後に企業へ就職する学生の割合は低い値にとどまっている。企業における博士のキャリアにはスペシャリストキャリアおよびゼネラリストキャリアの2つがあるが、本講演ではまず、その違いについて説明していただいた。次に、人事部の採用責任者は博士採用面接においてどこを見ているのか、どこを評価しているのかについて、企業側の視点から紹介していただいた。最後に、企業が博士人財に期待していることについて、お話ししていただいた。

講演4 綿貫 啓 氏（株式会社アルファ水工コンサルタンツ 東京本社 執行役員）

題目：沿岸域の環境保全－磯焼け対策やサンゴ増殖の課題－

浅海域の岩礁上に生育するコンブやホンダワラなどの海の森（藻場）やサンゴ礁は、沿岸域の生態系や水産業にとって極めて重要な存在である。これまで沿岸域開発のために貴重な浅場が埋め立てられ、豊かな生態系が失われたことから、藻場・干潟・サンゴ礁の保全・修復が注目されている。本講演では、藻場が衰退する磯焼けや環境インパクトを受けて衰退するサンゴ礁の現状および対策の課題について、

紹介していただいた。

総合討論

4つの講演の後、総合討論が行われた。各会場より質問が寄せられ、それに対して講師の方々から示唆に富む回答がなされた。反省点としては、午前に講演していただいた講師が帰られたため、やや盛り上がり欠けた点が挙げられる。今後、各講演の後に討論の時間を設けるなどの対策が必要かもしれない。

最後に本セミナーを開催するにあたってご協力いただいた講師の方々に厚く御礼申し上げますとともに、各会場で機器のセットアップや講演の準備をしていただいた各構成研究科の代議委員および事務職員の皆様に感謝致します。このセミナーが連大生の今後の人生や将来のキャリア形成に役立つことを祈念致します。

以上、平成 29 年度「人材養成学生支援セミナー I」の実施報告とさせていただきます。



黒木 豊氏の講演（講演3）。ご自身が入社後にキャリアに関して経験したこと、人事担当として企業が求める博士の人材について、ユーモラスに語っていただいた。



毎年、各会場を SINET で接続し、学生が所属する構成大学の会場で受講してもらっている。

先進的研究推進事業成果発表会を開催

鹿児島大学連合農学研究科では、先進的研究事業を推進するため、研究科長裁量経費の一部を「連合農学研究科先進的研究推進事業」支援に充てている。平成 29 年度も連大教員に対して募集を行ったところ、15 件の応募があり、代議委員会委員による審議の結果、5 件の事業を採択した。

採択となった研究代表者、分担者、協力者には約半年間研究に取り組んでもらい、各報告書を提出いただいているが、平成 29 年度より、研究代表者による成果発表の場を設けることとした。

第 1 回目となる本年度は各構成大学を SINET にて接続し、下記内容で開催した。

日時：平成 30 年 3 月 28 日（水）13：30～15：30

会場：各構成大学の SINET 設置部屋

- ・佐賀大学農学部 1 号館南棟 1 階学生演習室
- ・琉球大学農学部 2 階会議室
- ・鹿児島大学大学院連合農学研究科棟 3 階会議室

研究課題及び構成メンバー：（ ）は所属大学、勤務先等

・スサビノリに含まれるフロリドシドの高度利用に向けた研究

代表者：光武 進（佐）

分担者：濱 洋一郎（佐）、石丸 幹二（佐）、稲岡 司（佐）、古藤田 信博（佐）、
辻田 忠志（佐）、川添 嘉徳（佐）、川口 真一（佐）

協力者：三根 崇幸（佐賀県有明海水産振興センター）

・「黒麹菌・白麹菌研究拠点形成」に向けた網羅的遺伝子発現解析とネットワーク構築

代表者：外山 博英（琉）

分担者：後藤 正利（佐）、永野 幸生（佐）、高峯 和則（鹿農）、二神 泰基（鹿農）、
平良 東紀（琉）

協力者：水谷 治（琉）、山田 修（酒類総合研究所）

・地すべり発生の早期検知を実現する IoT 減災クラウドシステムの構築

代表者：中村 真也（琉）

分担者：宮本 英揮（佐）、徳本 家康（佐）

・食品機能成分におけるバイオアベイラビリティ予測のためのモデル構築

代表者：坂尾 こず枝（鹿農）

分担者：高良 健作（琉）

協力者：侯 徳興（鹿農）、和田 浩二、小松 正治（鹿水）、永尾 晃治（佐）

・高速かつ安定的に豚糞を処理するメタン発酵種汚泥の解析と開発

代表者：石橋 松二郎（鹿農）

分担者：紙谷 喜則（鹿農）

協力者：平良 英三（琉）、鶴丸 博人（鹿農）、濱中 大介（鹿農）

代表者全員の発表後、靱井研究科長より、これらの研究が益々発展して、連合農学研究科の基盤的研究となり外部資金の獲得に繋がっていくことや連大生の教育研究に大いに貢献することを期待している。

今後ともこのような先進的研究事業に支援を行い、連大の評価を高めていくことは勿論ですが、先生方の財産となるように活用して頂くことを願っていると、締めの挨拶があった。



過去平成 26 年度からの報告書については、鹿児島大学大学院連合農学研究科 HP に掲載。

HP 内メニュー 「各種報告書」－「先進的研究推進事業報告書」

(平成 30 年 8 月現在の情報です。以降、予告なく HP のメニュー名等が変更となる場合があります。)

◇ 資 料

学生数・教員組織等

年度別入学者数

平成30年4月1日現在

() 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

		年度	昭和63年度	平成元年度	平成2年度	平成3年度	平成4年度	平成5年度	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度	平成10年度
		入学定員	18	18	18	18	22	22	22	22	22	22	22
		志願者数	25	18	30	25	40	39	58	55	46	47	62
入学者数	構成大学※より	計	(社会人) 16 (留学生) (8)	(0) 14 (9)	(0) 21 (9)	(3) 15 (6)	(5) 23 (9)	(1) 28 (15)	(4) 45 (24)	(2) 44 (25)	(1) 36 (11)	(5) 34 (13)	(2) 43 (25)
	他大学より	計	(社会人) 9 (留学生) (5)	(0) 4 (3)	(0) 9 (8)	(0) 10 (8)	(1) 17 (14)	(0) 10 (9)	(1) 11 (10)	(1) 11 (9)	(0) 9 (8)	(1) 13 (10)	(2) 17 (12)
	計	計	(社会人) 25 (留学生) (13)	(0) 18 (12)	(0) 30 (17)	(3) 25 (14)	(6) 40 (23)	(1) 38 (24)	(5) 56 (34)	(3) 55 (34)	(1) 45 (19)	(6) 47 (23)	(4) 60 (37)
構成大学別配属内訳	佐賀大学(農)	計	(社会人) 7 (留学生) (4)	(0) 6 (4)	(0) 10 (4)	(1) 5 (1)	(1) 7 (2)	(0) 6 (5)	(0) 10 (7)	(0) 4 (3)	(0) 13 (3)	(1) 9 (5)	(0) 8 (5)
	宮崎大学(農)	計	(社会人) 8 (留学生) (3)	(0) 4 (3)	(0) 7 (4)	(2) 8 (4)	(1) 9 (6)	(0) 10 (5)	(1) 16 (9)	(1) 26 (16)	(0) 12 (7)	(3) 17 (7)	(0) 21 (16)
	鹿児島大学(農)	計	(社会人) 4 (留学生) (3)	(0) 3 (1)	(0) 9 (5)	(0) 8 (7)	(0) 9 (7)	(1) 6 (4)	(0) 14 (10)	(1) 9 (6)	(1) 7 (2)	(1) 5 (2)	(3) 12 (5)
	鹿児島大学(水)	計	(社会人) 6 (留学生) (3)	(0) 5 (4)	(0) 4 (4)	(0) 4 (2)	(3) 11 (6)	(0) 10 (7)	(0) 10 (7)	(1) 10 (6)	(0) 8 (3)	(0) 6 (4)	(1) 12 (7)
	琉球大学(農)	計	(社会人) /	/	/	/	(1) 4 (2)	(0) 6 (3)	(4) 6 (1)	(0) 6 (3)	(0) 5 (4)	(1) 10 (5)	(0) 7 (4)
	計	計	(社会人) 25 (留学生) (13)	(0) 18 (12)	(0) 30 (17)	(3) 25 (14)	(6) 40 (23)	(1) 38 (24)	(5) 56 (34)	(3) 55 (34)	(1) 45 (19)	(6) 47 (23)	(4) 60 (37)
	国籍別入学者数	国名	入学者数	日本 12 インドネシア 3 タイ 2 韓国 1 中国 4 バングラデシュ 2 西ドイ 1	日本 6 インドネシア 3 韓国 2 中国 4 バングラデシュ 1 フィリピン 1 マレーシア 1	日本 13 インドネシア 3 タイ 3 韓国 2 中国 3 バングラデシュ 1 フィリピン 2 マレーシア 2 エジプト 1	日本 11 スリランカ 1 インドネシア 2 タイ 3 韓国 4 中国 5 バングラデシュ 4 フィリピン 1 ミャンマー 1 アルゼンチン 1 グアテマラ 1 スペイン 1	日本 17 インドネシア 1 タイ 1 韓国 3 中国 4 バングラデシュ 5 フィリピン 4 ミャンマー 1 アルゼンチン 1 グアテマラ 1 スペイン 1	日本 14 インドネシア 1 タイ 1 韓国 2 中国 6 バングラデシュ 1 フィリピン 2 ミャンマー 1 コスタリカ 1 ブラジル 1 エジプト 1 ナイジェリア 1 セネガル 1 チュニジア 1	日本 22 インドネシア 9 スリランカ 1 タイ 2 韓国 2 中国 5 バングラデシュ 6 フィリピン 5 ミャンマー 1 コスタリカ 1 ブラジル 1 エジプト 1 ナイジェリア 1 セネガル 1 チュニジア 1	日本 21 インドネシア 7 タイ 1 韓国 3 中国 10 バングラデシュ 1 マレーシア 1 バブアニューギニア 1 フィリピン 1 ボリビア 1 ガーナ 1 ケニア 1 セネガル 1	日本 26 インドネシア 2 韓国 3 タイ 8 中国 4 バングラデシュ 1 フィリピン 2 ボリビア 1 ガーナ 2 ケニア 1 セネガル 1	日本 24 インドネシア 1 スリランカ 3 タイ 1 韓国 6 中国 5 バングラデシュ 5 フィリピン 2 ボリビア 1 ガーナ 2 ケニア 1 セネガル 1

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

年度別入学者数

平成30年4月1日現在

() 内数字：上段は社会人、下段は留学生で内数

		年度		平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度											
		入学定員		22	22	22	22	22	22	23	23	23	23	23											
		志願者数		44	55		55	67	67	39	50	30	40	40											
入学者数	構成大学※より	計	(社会人) (留学生)	31 (2) (16)	37 (4) (23)	49 (7) (25)	37 (2) (19)	46 (4) (22)	62 (6) (20)	31 (3) (12)	36 (2) (19)	25 (3) (13)	30 (2) (16)	29 (5) (16)											
	他大学より	計	(社会人) (留学生)	12 (1) (10)	18 (3) (8)	14 (2) (7)	13 (5) (4)	18 (4) (12)	5 (1) (3)	7 (2) (5)	13 (3) (6)	3 (0) (2)	10 (2) (6)	11 (0) (10)											
	計	(社会人) (留学生)	43 (3) (26)	55 (7) (31)	63 (9) (32)	50 (7) (23)	64 (8) (34)	67 (7) (23)	38 (5) (17)	49 (5) (25)	28 (3) (15)	40 (4) (22)	40 (4) (22)	40 (5) (26)											
構成別大学数	佐賀大学(農)	計	(社会人) (留学生)	13 (2) (9)	11 (1) (6)	11 (0) (5)	7 (0) (5)	10 (1) (5)	17 (1) (8)	10 (1) (5)	13 (1) (6)	7 (0) (2)	10 (0) (6)	12 (1) (8)											
	宮崎大学(農)	計	(社会人) (留学生)	7 (1) (1)	12 (1) (8)	19 (3) (9)	10 (2) (3)	21 (4) (7)	15 (2) (5)	5 (1) (1)	8 (2) (3)														
	鹿児島大学(農)	計	(社会人) (留学生)	7 (0) (6)	13 (1) (8)	12 (2) (7)	17 (5) (7)	11 (1) (7)	13 (2) (4)	7 (1) (4)	13 (0) (7)	11 (2) (6)	13 (2) (6)	5 (1) (3)											
	鹿児島大学(水)	計	(社会人) (留学生)	8 (0) (6)	11 (2) (7)	12 (0) (7)	9 (0) (5)	12 (1) (9)	8 (0) (4)	5 (0) (4)	4 (0) (4)	4 (0) (4)	7 (6) (4)	12 (1) (9)											
	琉球大学(農)	計	(社会人) (留学生)	8 (0) (4)	8 (2) (2)	9 (4) (4)	7 (0) (3)	10 (1) (6)	14 (2) (2)	10 (2) (3)	10 (3) (5)	6 (0) (3)	10 (2) (4)	11 (2) (6)											
	連携大学院	計	(社会人) (留学生)								1 (0) (0)	1 (0) (0)	0 (0) (0)	0 (0) (0)	0 (0) (0)										
計	(社会人) (留学生)	43 (3) (26)	55 (7) (31)	63 (9) (32)	50 (7) (23)	64 (8) (34)	67 (7) (23)	38 (5) (17)	49 (6) (25)	28 (15) (15)	40 (4) (22)	40 (5) (26)													
国籍別入学者数	国名	日本	17	日本	24	日本	31	日本	27	日本	30	日本	44	日本	21	日本	24	日本	13	日本	18	日本	14		
		インド	1	インド	1	インド	1	インドネシア	3	インド	1	インド	1	インド	1	インドネシア	2	インドネシア	4	インド	1	インドネシア	9		
		インドネシア	8	インドネシア	7	インドネシア	4	カンボジア	1	インドネシア	3	インドネシア	2	タイ	1	インドネシア	1	スリランカ	1	インドネシア	1	スリランカ	2		
		韓国	3	スリランカ	1	カンボジア	1	スリランカ	1	カンボジア	1	韓国	1	韓国	1	韓国	1	タイ	1	スリランカ	3	タイ	1		
		中国	3	スリランカ	3	スリランカ	2	中国	7	スリランカ	1	スリランカ	2	中国	6	中国	6	韓国	1	タイ	2	韓国	1		
		ネパール	1	中国	9	タイ	2	バングラデシュ	1	タイ	2	タイ	1	バングラデシュ	1	バングラデシュ	4	中国	1	中国	3	中国	2		
		バングラデシュ	4	バングラデシュ	6	中国	8	エジプト	2	韓国	3	中国	7	バングラデシュ	2	フィリピン	1	バングラデシュ	2	バングラデシュ	1	バングラデシュ	2		
		フィリピン	2	フィリピン	1	バングラデシュ	2	ベトナム	2	中国	9	バングラデシュ	1	バングラデシュ	1	ベトナム	2	フィリピン	2	バングラデシュ	4	バングラデシュ	1		
		マレーシア	1	マレーシア	1	フィリピン	1	マレーシア	2	バングラデシュ	1	バングラデシュ	1	エジプト	1	マレーシア	1	マレーシア	1	ベトナム	1	ブータン	1	フィリピン	1
		メキシコ	1	コロンビア	1	ベトナム	3	ミャンマー	2	フィリピン	3	フィリピン	3	カンボジア	1	ミャンマー	2	ミャンマー	1	フィリピン	1	ベトナム	2	ベトナム	2
		イラン	1	エジプト	1	ミャンマー	3	メキシコ	1	ベトナム	2	グアテマラ	1		1	コロンビア	1	カンボジア	1	キューバ	1	ミャンマー	2	ミャンマー	2
		タンザニア	1			アメリカ	1	モリタニア	1	ミャンマー	2	トルコ	1		1	オマーン	1		1	ケニア	1	台湾	1	台湾	1
						ブラジル	1			アルゼンチン	2	ヨルダン	1		1	コートジボワール	1		1	タンザニア	2	ケニア	1	ケニア	1
						ルーマニア	1			イエメン	1	ガーナ	1		1	ナイジェリア	1		1	チュニジア	1	タンザニア	1	タンザニア	1
						ヨルダン	1			トルコ	1	ケニア	1		1	マダガスカル	1		1						
						イラン	1			ケニア	1	マラウイ	1		1	リビア	1		1						

※佐賀大学農学部、琉球大学農学部、鹿児島大学農学部、鹿児島大学水産学部、宮崎大学農学部出身者数。
宮崎大学農学部は昭和63年～平成18年度まで、琉球大学農学部は平成4年度より構成大学である。

平成 29 年 10 月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍)(性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補指導補助教員	備考
生物生産科学	動物資源 生産科学	ウーナポン チャンタシン Weenaporn Juntasin (タイ)(女)	川本 康博(琉)	①伊村 嘉美(琉) ②岡本 新(鹿農)	
	地域・国際 資源経済学	グエン ティ キム クエン Nguyen Thi Kim Quyen (ベトナム)(女)	佐野 雅昭(鹿水)	①久賀 みず保(鹿水) ②越塩 俊介(鹿水)	
応用生命科学	生物機能化学	ウスアゾ フィファメ オリアン Oussou-Azo Fifame Auriane (ベナン)(女)	MCM フェスターガード(鹿農)	①二神 泰基(鹿農) ②小林 元太(佐)	
農水圏資源 環境科学	生物環境 保全科学	タコシ メグミ 竹腰 恵 (日本)(女)	境 雅夫(鹿農)	①池永 誠(鹿農) ②染谷 孝(佐)	
	水産資源 環境科学	トラン グエン トゥイ ホア Tran Nguyen Duy Khoa (ベトナム)(男)	石川 学(鹿水)	①小谷 知也(鹿水) ②竹内 裕(鹿水)	
		チョウ ヨウコン 張 煜坤 Zhang YuKun (中国)(男)	石川 学(鹿水)	①越塩 俊介(鹿水) ②竹内 裕(鹿水)	

平成30年4月入学生及び指導教員名簿

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍)(性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補指導補助教員	備考
生物生産科学	熱帯資源・ 植物生産科学	レトロンル Le Trong Lu (ベトナム)(男)	川満 芳信(琉)	①嬉野 健次(琉) ②山本 雅史(鹿農)	
		アリナル ハ イザウチイヌラマ Arinal Haq Izzawati Nurrahma (インドネシア)(女)	坂上 潤一(鹿農)	①岡本 繁久(鹿農) ②川満 芳信(琉)	
		ナカオ ヨシヒロ 中尾 祥宏 (日本)(男)	坂上 潤一(鹿農)	①朴 炳宰(鹿農) ②鄭 紹輝(佐)	
		ヒヤネ シンイチ 比屋根 真一 (日本)(男)	川満 芳信(琉)	①平良 英三(琉) ②鄭 紹輝(佐)	
		ランミツ ケント 蘭光 健人 (日本)(男)	一色 司郎(佐)	①辻田 有紀(佐) ②嬉野 健次(琉)	
	動物資源 生産科学	オヤマ ヒデミ 小山 秀美 (日本)(女)	下桐 猛(鹿農)	①岡本 新(鹿農) ②川本 康博(琉)	
	地域・国際 資源経済学	マレイコン 馬 麗坤 Ma LiKun (中国)(女)	坂井 教郎(鹿農)	①田代 正一(鹿農) ②内藤 重之(琉)	
		セーパ ーラ ムデ ーイヤンセーラ ーゲ チンカ バンタ ーラ カラリヤッタ Sepala Mudiyansele Chinthaka Bandara Karalliyadda (スリランカ)(男)	藤村 美穂(佐)	①辻 一成(佐) ②坂井 教郎(鹿農)	
		キトウ ケイコ 鬼頭 景子 (日本)(女)	佐野 雅昭(鹿水)	①久賀 みず保(鹿水) ②安樂 和彦(鹿水)	
	応用生命科学	生物機能化学	ヤギ ハルカ 八木 永 (日本)(男)	金子 哲(琉)	①高島 幸司(琉) ②藤田 清貴(鹿農)
トカキ ジキアン 渡嘉敷 直杏 (日本)(男)			外山 博英(琉)	①水谷 治(琉) ②二神 泰基(鹿農)	
コバヤシ ミユ 小林 未侑 (日本)(女)			外山 博英(琉)	①橘 信二郎(琉) ②坂尾 こず枝(鹿農)	
ツウ テントウ 曾 伝濤 Zeng ChuanTao (中国)(女)			吉崎 由美子(鹿農)	①高峯 和則(鹿農) ②橘 信二郎(琉)	
食品機能科学		ホンダ アキフ 本田 晃伸 (日本)(男)	塩崎 一弘(鹿水)	①小松 正治(鹿水) ②藤田 清貴(鹿農)	
		ムロイ ユキコ 室井 由起子 (日本)(女)	和田 浩二(琉)	①高良 健作(琉) ②渡邊 啓一(佐)	

専攻	連合講座	フリカナ 氏名 (国籍)(性別)	主指導教員	① 第1副指導教員 ② 第2副指導教員 補 指導補助教員	備考
応用生命科学	先端応用 生命科学	アブ ユスフ ホッシン Abu Yousuf Hossin (パングラデシュ)(男)	屋 宏典(琉)	①岩崎 公典(琉) ②永尾 晃治(佐) 補稲福 征志(琉)	
		マエダ マユミ 眞榮田 麻友美 (日本)(女)	平良 東紀(琉)	①外山 博英(琉) ②後藤 正利(佐)	
		シヤ クン 謝 堃 Xie Kun (中国)(男)	侯 徳興(鹿農)	①坂尾 こず枝(鹿農) ②屋 宏典(琉)	
農水圏資源 環境科学	生物環境 保全科学	シバガキ トモオ 側垣 共生 (日本)(男)	野間口 眞太郎(佐)	①徳田 誠(佐) ②辻 瑞樹(琉)	
		マツムラ タカシ 松村 崇志 (日本)(男)	早川 洋一(佐)	①鈴木 章弘(佐) ②坂巻 祥孝(鹿農)	
	水産資源 環境科学	ワダ ヒデトシ 和田 英敏 (日本)(男)	本村 浩之(鹿農)	①寺田 竜太(鹿水) ②山本 智子(鹿水)	
		ハヤカ ヒロキ 早坂 央希 (日本)(男)	小谷 知也(鹿水)	①竹内 裕(鹿水) ②安樂 和彦(鹿水)	
		シマダ ナツミ 島田 菜摘 (日本)(女)	寺田 竜太(鹿水)	①山本 智子(鹿水) ②本村 浩之(鹿農) 補遠藤 光(鹿水)	
		ウー ライ 曹 磊 Cao Lei (中国)(男)	吉川 毅(鹿水)	①前田 広人(鹿水) ②宇野 誠一(鹿水)	

平成29年度奨学金及び研究助成金受給状況

奨学金

名 称	申請者数	採用者数
国内採用による国費外国人留学生	0名	0名
公益財団法人平和中島財団	1名	0名
公益財団法人ロータリー米山記念奨学会	4名	3名
公益財団法人日揮・実吉奨学会（第三種給与奨学金）	1名	1名
公益財団法人旭硝子奨学会	1名	1名

日本学生支援機構奨学生

学 年	申請者数	採用者数
1年次（第一種）	6名	6名

平成29年度入学料及び授業料免除状況

入学料免除

\	申請者数	全額免除者数	半額免除者数	不許可者数
4月入学	3名	0名	3名	0名
10月入学	2名	0名	2名	0名

授業料免除

\	申請者数	全額免除者数	半額免除者数	不許可者数
前 期	31名	19名	9名	3名
後 期	32名	19名	9名	4名

学位記授与状況

I. 課程博士

H30.4.1現在

専攻名	年度	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
生物生産科学		4 (3)	5 (4)	4 (4)	3 (2)	5 (5)	9 (7)	14 (8)	12 (9)	14 (9)	14 (8)	9 (7)
生物資源利用科学		3 (3)	1 (1)	2 (2)	4 (1)	4 (1)	8 (3)	10 (7)	13 (10)	7 (2)	7 (1)	9 (3)
生物環境保全科学		1 (1)	2 (2)	6 (3)	6 (5)	6 (4)	2 (2)	15 (11)	15 (10)	6 (5)	12 (9)	11 (6)
水産資源科学		4 (2)	6 (4)	7 (5)	7 (6)	9 (7)	10 (8)	7 (7)	7 (5)	5 (3)	10 (4)	9 (2)
計		12 (9)	14 (11)	19 (14)	20 (14)	24 (17)	29 (20)	46 (33)	47 (34)	32 (19)	43 (22)	38 (18)

専攻名	年度	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
生物生産科学		10 (7)	16 (10)	19 (12)	9 (8)	20 (14)	12 (8)	13 (7)	16 (9)	9 (5)	6 (3)
生物資源利用科学		8 (6)	14 (5)	7 (5)	19 (9)	9 (3)	10 (3)	9 (3)	10 (2)	9 (2)	7 (2)
生物環境保全科学		8 (7)	6 (3)	5 (2)	7 (3)	6 (3)	9 (3)	6 (5)	10 (6)	9 (5)	8 (2)
水産資源科学		10 (6)	11 (5)	10 (7)	9 (4)	10 (6)	9 (7)	7 (3)	8 (7)	6 (4)	5 (4)
計		36 (26)	47 (23)	41 (26)	44 (24)	45 (26)	40 (21)	35 (18)	44 (24)	33 (16)	26 (11)

専攻名	年度	23	24	25	26	27	28	29	合計
生物生産科学		8 (4)	2	3 (2)	2	/	/	/	238 (155)
生物資源利用科学		5 (3)	3 (1)		1	/	/	/	179 (78)
生物環境保全科学		2 (1)				/	/	/	158 (98)
水産資源科学		1 (1)	1 (1)			/	/	/	168 (108)
生物生産科学		6 (4)	8 (7)	10 (7)	9 (6)	7 (4)	8 (4)	6 (3)	54 (35)
応用生命科学		2 (2)	7 (6)	5 (3)	7 (4)	8 (5)	12 (4)	3 (1)	44 (25)
農水圏資源環境科学		8 (4)	13 (9)	11 (4)	9 (5)	9 (3)	13 (7)	6 (2)	69 (34)
計		32 (19)	34 (24)	29 (16)	28 (15)	24 (12)	33 (15)	15 (6)	910 (533)

平成21年度4月入学者より、4専攻から3専攻に改組。
 ()内数は、外国人留学生で内数。

平成 29 年度学位取得者名簿

課程博士

学位授与年月日	専攻 連合講座	フリガナ 氏名 (性別)(国籍)	主指導教員
平成 29 年 9 月 22 日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	シマダ アツシ 島田 温史 (男)(日本)	山本 雅史(鹿農)
平成 29 年 9 月 22 日	生物生産科学 動物資源生産科学	ミヅベ ヤマト 溝部 大和 (男)(日本)	三好 和隆(鹿農)
平成 29 年 9 月 22 日	応用生命科学 食品機能科学	タモツ セイコ 保 聖子 (女)(日本)	木村 郁夫(鹿水)
平成 29 年 9 月 22 日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	イスラム エムディ マティウル Islam, M D. Matiul (男)(バングラデシュ)	鄭 紹輝(佐)
平成 29 年 9 月 22 日	応用生命科学 生物機能化学	タイラ ノゾミ 平良 望 (男)(日本)	屋 宏典(琉)
平成 30 年 3 月 16 日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	コンスタンティン ブスング Constantine Busungu (男)(タンザニア)	一谷 勝之(鹿農)
平成 30 年 3 月 16 日	生物生産科学 熱帯資源・植物生産科学	シェイキ モ ハ メ ド マスム Sheikh Muhammad Masum (男)(バングラデシュ)	モハメド アムサド 村山 (琉)
平成 30 年 3 月 16 日	生物生産科学 動物資源生産科学	トウマ シヘイ 當眞 嗣平 (男)(日本)	及川 卓郎(琉)
平成 30 年 3 月 16 日	応用生命科学 食品機能科学	マニクハルダ Manikharda (女)(インドネシア)	和田 浩二(琉)
平成 30 年 3 月 16 日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	アイマン カミス イルサイド Ayman Khamis Elsayed (男)(エジプト)	徳田 誠(佐)
平成 30 年 3 月 16 日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	アダチ シュウヘイ 安達 修平 (男)(日本)	徳田 誠(佐)
平成 30 年 3 月 16 日	農水圏資源環境科学 地域資源環境工学	カジタ ユウキ 楫田 優希 (男)(日本)	弘中 和憲(琉)
平成 30 年 3 月 16 日	農水圏資源環境科学 地域資源環境工学	チネン ヨシユキ 知念 良之 (男)(日本)	芝 正己(琉)
平成 30 年 3 月 16 日	農水圏資源環境科学 水産資源環境科学	カン キョンボン 姜 京範 (男)(韓国)	西 隆一郎(鹿水)
平成 30 年 3 月 16 日	農水圏資源環境科学 生物環境保全科学	オオイシ ケイタ 大石 圭太 (男)(日本)	曾根 晃一(鹿農)

平成29年度学位取得者（課程博）就職状況

職種別

職 種	人 数	
大学教員	4人	27 (%)
研究所・団体等研究員	3人	20 (%)
民間企業研究員（職）	2人	13 (%)
その他（含む研究生等）	4人	27 (%)
自 営	1人	6.5 (%)
未定・不明（含む調査中）	1人	6.5 (%)
計	15人	(100.0%)

就職先等（順不同）

<ul style="list-style-type: none"> ・ 鹿児島大学 ・ 佐賀大学 ・ Khulna University (Bangladesh) ・ Sher-e-Bangla Agricultural University (Bangladesh) ・ St. Augustine University of Tanzania (Tanzania) ・ 済州大学海洋科学大学（韓国） ・ 鹿児島県庁 ・ 沖縄県農林水産部 畜産研究センター ・ 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 九州沖縄農業研究センター ・ 医療法人愛育会 レディースクリニックあいいく ・ 日研トータルソーシング株式会社
--

研究科教員組織

平成30年8月1日

専攻名	連合講座	鹿児島大学農学部		鹿児島大学水産学部		佐賀大学		琉球大学		合計													
		教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	教授	准教授・講師・助教	計											
生物生産科学	熱帯資源・植物生産科学	a2 遠城 道雄 A 坂上 明夫 A 志水 勝好 A2 山本 雅史	B 一谷 勝之 b 角 直也 bl 朴 炳幸			A 穴井 豊昭 A 有馬 達 A 一色 司郎 A1 鈴木 章弘 A 鄭 紹輝	b 上笠 喜八 B 古藤田信博 bl 辻田 有紀 B 藤田 大輔 b 福田 伸二 c1 渡邊 啓史	A1 嬉野 健次 A 川満 芳信 A 本村 恵二 A 本村 恵二	bl 赤嶺 光 d 仲村 一郎														
	小計	4	(3)	0	0	5	(5)	6	(2)	4	(4)	2	0	13	(12)	11	(3)	24	(15)				
	動物資源生産科学	A 岡本 新 A 後藤 貴文 A 中西 良孝 A2 三好 和睦	bl 大久津昌治 b 大島 一郎 B 下桐 猛 b 高山 耕二			A 和田 康彦	bl 山中 賢一 b 江原 史雄	A 及川 卓郎 A 川本 康博 A 佐野 文子 A 建本 秀樹	bl 伊村 嘉美 bl 金野 俊洋 d 長嶺														
	小計	4	(4)	4	(1)	0	0	1	(1)	2	0	4	(4)	3	0	9	(9)	9	(1)	18	(10)		
	地域・国際資源経済学	a1 田代 正一 A 枚田 邦宏 A 豊 智行	B 李 哉法 B 坂井 教郎	a 佐久間美明 A 佐野 雅昭	b 佐々木貴文 bl 久置みず保 b 鳥居 享司	A 福岡 司	bl 辻 一成 bl 中井 信介 B 藤村 美穂	A 大田伊久雄 A 内藤 重之	bl 木島 真志 bl 杉村 泰彦 d 陳 碧露														
小計	3	(1)	2	(2)	2	(1)	3	0	1	(1)	3	(1)	2	(2)	3	0	8	(5)	11	(3)	19	(8)	
計	11	(8)	9	(4)	2	(1)	3	0	7	(7)	11	(3)	10	(10)	8	0	30	(26)	31	(7)	61	(33)	
応用生命科学	生物機能化学	A2 北原 兼文 A 玉置 尚徳	bl 花城 勲 B2 藤田 清貴 B 二神 泰基 b 南 雄二 B 吉崎由美子 B MCM2,2,2-カニト			A 北垣 浩志 A2 小林 元太 A2 後藤 正利 A2 光富 勝		A 金子 哲 A1 高島 幸司 A1 寺嶋 芳江 A 外山 博英	bl 石井貴広 bl 橋 信二郎 bl 福田 雅一 bl 水谷 治														
	小計	2	(2)	6	(4)	0	0	4	(4)	0	0	4	(4)	4	0	10	(10)	10	(4)	20	(14)		
	食品機能科学	A 安部 淳一 A1 伊藤 伸一 A1 大塚 彰	B 井尻 大地 b 宮田 健	A 上西 由翁 A 木村 郁夫 A1 小松 正治	B 塩崎 一弘 d 加藤 早苗	A2 永尾 晃治 A 濱 洋一郎 A 林 信行	b 野間 誠司	A 和田 浩二	bl 高良 健作 bl 玉城 一														
	小計	3	(3)	2	(1)	3	(3)	2	(1)	3	(3)	1	0	1	(1)	2	0	10	(10)	7	(2)	17	(12)
	先端応用生命科学	A 石橋 松二郎 A 俣 徳興 A 高峯 和則 A 橋本 文雄	bl 岡本 繁久 bl 清水 圭一 b 吉田理一郎 d1 坂尾こず枝			A2 石丸 幹二 A 宗 伸明 A2 渡邊 啓一	B2 永野 幸生 B1 光武 進 c 辻田 志忠	A 轟 宏典 A 小西 照子 A 平良 東紀	bl 岩崎 公典														
小計	6	(6)	5	(1)	0	0	3	(3)	3	(2)	3	(3)	1	0	12	(12)	9	(3)	21	(15)			
計	11	(11)	13	(6)	3	(3)	2	(1)	10	(10)	4	(2)	8	(8)	7	0	32	(32)	26	(9)	58	(41)	
農水圏資源環境科学	生物環境保全科学	A 岩井 久 A 境 雅夫 A 津田 勝男	B1 池永 誠 B 鶴川 信 B 坂巻 祥孝 b 榑木 直也 bl 中村 正幸 bl 畑 邦彦 bl 濱中 大介 d 赤木 功			A 大島 一里 A 染谷 孝 A 野間口真太郎 A 早川 洋一	B1 上野 大介 B1 草場 基章 B1 徳田 誠 B 吉賀 豊司	A 梶田 忠誠 A 鬼頭 誠 A1 立田 晴記 a 谷口 真音 A 田場 聡 A 辻 瑞樹	bl 金城 和俊 b 関根健太郎 bl 松本 一種 bl 渡辺 信														
	小計	3	(3)	8	(3)	0	0	4	(4)	4	(4)	6	(5)	4	0	13	(12)	16	(7)	29	(19)		
	地域資源環境工学	a 岩崎 浩一 A 岡 勝 A 芝山 道郎 a 地頭園 隆 A 西野 吉彦 A2 粉井 和朗	b 井倉 洋二 bl 伊藤 祐二 bl 紙谷 喜則 b 神田 英司 B1 寺本 行芳 b 服部 芳明			A 近藤 文義 A 田中 宗浩 A1 長 裕幸	b 阿南 光政 b 稲葉 繁樹 b 郡山 益実 b 原口 智和 bl 宮本 英揮 B2 弓削 こずえ	A 井上 章二 A 酒井 一人 A2 芝 正己 A 中野 拓治 A 中村 真也	bl 木村 匠 bl 鹿内 健志 b 瀬戸内秀規 bl 平良 英三 bl 仲村 渠 将 b ラザフィンベ ハ d 安元 純														
	小計	6	(4)	6	(1)	0	0	3	(3)	6	(1)	5	(5)	7	0	14	(12)	19	(2)	33	(14)		
	水産資源環境科学	A 本村 浩之		A 石川 学 A 大富 潤 A 越塚 俊介 A2 重廣 律男 A1 鈴木 廣志 A 寺田 電太 A 中村 啓彦 A1 西 隆一郎 A1 前田 広人 A1 ハスダアツシ A 山本 淳 A 山本 智子 A 吉川 毅	B 安樂 和彦 b 石崎 宗周 B 宇野 誠一 b 江幡 恵吾 B 久米 元知 B 小谷 知也 b 西 統隆 bl 山中 有一 d1 竹内 裕																		
小計	1	(1)	0	0	13	(13)	10	(5)	0	0	0	0	0	0	14	(14)	10	(5)	24	(19)			
計	10	(8)	14	(4)	13	(13)	10	(5)	7	(7)	10	(5)	11	(10)	11	0	41	(38)	45	(14)	86	(52)	
合計	32	(27)	36	(14)	18	(17)	15	(6)	24	(24)	25	(10)	29	(28)	26	0	103	(96)	102	(30)	205	(126)	
専攻名		A 13	B 9	A 9	B 4	A 12	B 4	A 19	B 0	A 53	B 17	70											
		A1 2	B1 2	A1 5	B1 0	A1 2	B1 4	A1 4	B1 0	A1 13	B1 6	19											
		A2 4	B2 1	A2 1	B2 0	A2 6	B2 2	A2 1	B2 0	A2 12	B2 3	15											
		a1 1	b1 8	a1 0	b1 2	a1 0	b1 4	a1 0	b1 17	a1 1	b1 31	32											
		a2 1	b2 1	a2 0	b2 0	a2 0	b2 0	a2 0	b2 1	a2 1	b2 2	3											
		c1 0		c1 0		c1 1		c1 0		c1 1		1											
		c2 0		c2 0		c2 0		c2 0		c2 0		0											
		d1 1		d1 1		d1 0		d1 0		d1 2		2											
	d2 0		d2 0		d2 0		d2 0		d2 0		0												
	21	22	15	7	20	15	24	18	80	62	142												

注) 1 氏名の前の大文字(A・A・B・B)はD名(主指導教員資格者)を示す。 2 小文字(a・b・c・d)はD名(副指導教員資格)を示す。
 3 A(a)は教授を、B(b)は准教授、cは講師、dは助教を示す。 4 A・Bは主指導教員、氏名の数字1は第1副指導教員、2は第2副指導教員、数字のない者は学生を担当していないことを示す。
 5 ()内の数字は、指導教員資格者のうち主指導教員資格者を内数で示す。 6 アンダーラインは女性を示す

代 議 委 員 会 委 員 名 簿

A 任期 平成29年4月1日～平成31年3月31日 (新任)

B 任期 平成30年4月1日～平成32年3月31日 (継続)

専 攻	連 合 講 座	所 属 大 学	氏 名
—	連合農学研究科長	鹿児島大学 (農)	もみ い かず ろう 稔 井 和 朗
	副研究科長	鹿児島大学 (連大)	てら た りゅう た 寺 田 竜 太
生物生産科学	熱帯資源・植物生産科学	琉球大学 (農)	B もはめど あむざど ほさいん モハメド アムザド ホサイン
	動物資源生産科学	鹿児島大学 (農) ※	A み よし かず ちか 三 好 和 睦
		佐賀大学 (農)	B わ だ やす ひこ 和 田 康 彦
	地域・国際資源経済学	鹿児島大学 (農)	A ゆたか とも ゆき 豊 智 行
応用生命科学	生物機能化学	佐賀大学 (農)	A こ ぼやし げん た 小 林 元 太
	食品機能科学	鹿児島大学 (水産)	B こ まつ まさ はる 小 松 正 治
	先端応用生命科学	琉球大学 (農)	A たい ら とう き 平 良 東 紀
農水圏資源環境科学	生物環境保全科学	佐賀大学 (農)	A そめ や たかし 染 谷 孝
		琉球大学 (農) ※	B き とう まこと 鬼 頭 誠
	地域資源環境工学	鹿児島大学 (農)	B しば やま みち お 芝 山 道 郎
	水産資源環境科学	鹿児島大学 (水産)	A にし りゅう いち ろう 西 隆 一 郎

平成30年度年間行事予定表

(鹿児島大学大学院連合農学研究科) H30.2.16 教授会承認済

年 月 日	行 事	備 考
平成30年 4.13(金)	連合農学研究科入学式(11:00~) 連合農学研究科オリエンテーション 代議委員会(第187回)	履修登録(Web) 「Newsletter 第38号」原稿依頼
5.11(金)	代議委員会(第188回) [琉球大学農学部 担当]	研究科教員候補者推薦依頼 (〆切 7.2) 前期学位論文(論博含む)提出 (〆切 5.31) 秋季入学出願資格認定申請受付→審査→報告→通知
6.7(木) ~8(金) 6.13(水) ~15(金) 6.15(金)	平成30年度第1回全国連合農学研究科協議会(当番 東京農工大学) 平成30年度前期連合一般ゼミナール(日本語)(当番 岩手大学) 代議委員会(第189回) [鹿児島大学水産学部 担当] 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出	秋季入学願書受付 (6.11~6.15)
7.6(金) 7.25(水)	代議委員会(第190回) (SINET利用) 秋季入試説明会 入試実施方法	学位論文「公開審査会」・・・1週間前までに公示 授業料免除(後期)申請
8月上旬 8.6(月)	人材養成学生支援セミナーI(琉球大学農学部 担当) 事務会議及び事務連絡会 [場所:琉球大学農学部]	「Newsletter 第38号」発行予定 学位論文審査・最終試験等結果報告 (〆切 8.20)
9.6(木) " " " " 9.7(金) " 9.11(火) 9.18(火) 9.21(金)	秋季入学試験・入試委員会 入試合否判定 代議委員会(第191回) 教員候補者資格審査の付託 専攻会議(第1回) 教員資格審査委員会の設置 教員資格審査委員会 専攻会議(第2回) 教員候補者資格審査結果(報告) 代議委員会(第192回) 学位論文審査結果 研究科教授会(第29回) 入試合否判定 学位論文合否判定 教員資格審査判定 秋季合格者発表 秋季入学手続き(入学料免除申請等)(~20日) 学位記授与式	中間発表会(平成28年10月入学者)9月中旬予定 学位授与申請→授与の可否決定(学長) 秋季合格通知書・入学手続き案内の発送
10.5(金) " " "	秋季入学式 オリエンテーション 連合農学研究科運営会議 代議委員会(第193回)	後期学位論文(論博)提出 (〆切10.19)
10.25(木) ~26(金)	平成30年度第2回全国連合農学研究科協議会(当番 鹿児島大学)(予定)	学生募集要項発表 (下旬)
11.7(水) 11.7(水) ~9(金) 11.16(金) ~26(月) 11.14(水) ~16(金) 11月下旬 11.30(金)	代議委員会(第194回) [佐賀大学農学部 担当] 農学特別講義(一般セミナー)実施 [佐賀大学農学部 担当] 人材養成学生支援セミナーII(洋上セミナー) 開催期間:予定 (鹿児島大学水産学部 担当) 平成30年度後期連合一般ゼミナール(英語)(当番 東京農工大学) 国際農学特論(英語)(隔年開講)(琉球大学農学部 担当) 鹿児島大学大学院連合農学研究科設立30周年記念式典	後期学位論文(課程博)提出 (〆切12.5) 出願資格認定申請受付→審査→報告→通知 研究科教員(特例)候補者推薦依頼 (〆切 12.7) 入学願書受付 (12/10~12/14) 中間発表会(平成29年4月入学者)未定
平成31年 1.11(金) 1.16(水) 2.1(金) " 2.14(木) 2.15(金) " 2.19(火) 3.5(火) 3.15(金) "	代議委員会(第195回) 学位論文の受理及び審査委員会委員の選出 次期代議委員の調整 (SINET利用) 教員候補者(特例)資格審査の付託 入試説明会 入試実施方法 教員資格審査委員会の設置 教員資格審査委員会 代議委員会(第197回) 学位論文審査結果 次期代議委員の決定 入学試験 合否判定(午前) 入試委員会 合否判定(午後) 研究科教授会(第30回) 学位論文の合否判定 合格者発表 入学手続き(入学料免除申請等)(~7日) 代議委員会(第198回) 学位記授与式、構成法人連絡調整委員会	学位論文「公開審査会」・・・1週間前までに公示 学位論文審査・最終試験結果報告 (〆切 1.31) 授業料免除(前期)申請 学位授与申請→授与の可否決定(学長) 合格通知書・入学手続き案内の発送 兼職申請書等作成 秋季入学募集要項発表 (中旬~下旬) 教育研究指導計画書・職務内容調書等の作成依頼

※ 委員会等の日程については、都合により変更することがあります。

平成 29 年度連合農学研究科活動記録

平成 29 年

4 月 14 日(金)	平成 29 年度連合農学研究科入学式・オリエンテーション
〃	第 172 回代議委員会
5 月 12 日(金)	第 1 回入学試験検討委員会(琉球大学にて開催)
〃	第 1 回教務委員会
〃	第 1 回 F D 委員会
〃	第 173 回代議委員会 (〃)
6 月 1 日(木)~2 日(金)	平成 29 年度第 1 回全国連合農学研究科協議会(当番 東京農工大学)
6 月 14 日(水)~16 日(金)	平成 29 年度前期連合一般ゼミナール(日本語)(当番 鹿児島大学)
6 月 16 日(金)	第 2 回入学試験検討委員会(佐賀大学にて開催)
〃	第 2 回教務委員会 (〃)
〃	第 2 回 F D 委員会 (〃)
〃	第 174 回代議委員会 (〃)
6 月 20 日(火)	T A 研修会
7 月 7 日(金)	第 3 回入学試験検討委員会(SINET 使用にて開催)
〃	第 3 回教務委員会 (〃)
〃	第 175 回代議委員会 (〃)
7 月 26 日(水)	秋季入試説明会(SINET 使用にて開催)
8 月 2 日(水)	第 176 回代議委員会(メール会議)
8 月 10 日(木)	人材養成学生支援セミナー I (担当 鹿児島大学)
8 月 7 日(月)	平成 29 年度連合農学研究科構成大学事務会議・事務連絡会 (鹿児島大学で開催)
8 月 23 日(水)	第 177 回, 第 178 回代議委員会(メール会議)
9 月 7 日(木)	秋季入学試験・入試委員会
〃	第 179 回代議委員会
〃	専攻会議、教員資格審査委員会
9 月 8 日(金)	第 180 回代議委員会
〃	男女共同参画の推進, ハラスメント防止のための講演会
〃	第 27 回研究科教授会
9 月 12 日(火)	秋季合格者発表
9 月 22 日(金)	平成 29 年度連合農学研究科学位記授与式(前期)
10 月 6 日(金)	秋季入学式・オリエンテーション
〃	第 18 回(平成 29 年度)鹿児島大学大学院連合農学研究科運営会議
〃	第 181 回代議委員会
10 月 19 日(木)~20 日(金)	平成 29 年度第 2 回全国連合農学研究科協議会(当番 愛媛大学)
11 月 8 日(水)	第 182 回代議委員会(ジェイドガーデンパレス(鹿児島)で開催)
〃	第 4 回教務委員会 (〃)
11 月 8 日(水)~10 日(金)	農学特別講義(一般セミナー)(担当 鹿児島大学水産学部)

11月15日(水)～17日(金)	平成29年度後期連合一般ゼミナール(英語)(当番 岩手大学)
12月15日(金)	第4回入学試験検討委員会
〃	第5回教務委員会
〃	第3回FD委員会
〃	第183回代議委員会
平成30年	
1月5日(金)	第5回入学試験検討委員会(SINET 使用にて開催)
〃	第4回教務委員会 (〃)
〃	第184回代議委員会 (〃)
1月17日(水)	入試説明会(SINET 使用にて開催)
2月2日(金)	第5回教務委員会
〃	第185回代議委員会
2月9日(木)	入学試験・入試委員会
〃	教員資格審査委員会
〃	第28回研究科教授会
2月20日(火)	合格者発表
3月16日(金)	第186回代議委員会
〃	平成29年度鹿児島大学大学院連合農学研究科 構成法人連絡調整委員会
〃	平成29年度連合農学研究科学位記授与式(後期)
3月28日(水)	平成29年度連合農学研究科先進的研究推進事業成果発表会 (SINET 使用にて開催)

代議委員会委員・連大事務室事務係メールアドレス一覧表

所 属	氏 名	E-Mailアドレス
連合農学研究科長	もみい かずろう 榎井 和朗	rendean@ml.agri.kagoshima-u.ac.jp
連合農学研究科 副研究科長	てらだ りゅうた 寺田 竜太	terada@fish.kagoshima-u.ac.jp
佐賀大学農学部	こばやし げんた 小林 元太	gentak@cc.saga-u.ac.jp
	そめや たかし 染谷 孝	someyat@cc.saga-u.ac.jp
	わだ やすひこ 和田 康彦	ywada@cc.saga-u.ac.jp
鹿児島大学農学部	みよし かずちか 三好 和睦	kmiyoshi@agri.kagoshima-u.ac.jp
	ゆたか ともゆき 豊 智行	yutaka@agri.kagoshima-u.ac.jp
	しばやま みちお 芝山 道郎	shibayama@agri.kagoshima-u.ac.jp
鹿児島大学水産学部	にし りゅういちろう 西 隆一郎	nishi24@fish.kagoshima-u.ac.jp
	こまつ せいじ 小松 正治	komatsu@fish.kagoshima-u.ac.jp
琉球大学農学部	たいら とうき 平良 東紀	tokey@agr.u-ryukyu.ac.jp
	モハド アムザド 村山 誠	amzad@agr.u-ryukyu.ac.jp
	きとう まこと 鬼頭 誠	kitou@agr.u-ryukyu.ac.jp
連大事務室長事務代理 (兼務)	もみい かずろう 榎井 和朗	rendean@ml.agri.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室長代理	みなみ ゆうこ 南 祐子	rendairi@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室連大事務係長	かわもと まさのぶ 河本 政展	renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp
連大事務室再雇用職員	あいこう たかのり 愛甲 貴徳	
	にいし あきら 二石 章	
連大事務室連大事務係 補佐員	ふくのうえ てよこ 福之上 天代子	
	いしかわ まゆみ 石川 まゆみ	
	おく こ 奥 あや子	

編集後記

鹿児島大学大学院連合農学研究科ニュースレター第 38 号をここに刊行することが出来たことをご報告させていただきます。今回の表紙には連合農学研究科棟横にあります植物園内の木々を下からのアングルで撮影した写真を、裏表紙には構成研究科とその周辺で見られる景色、連大生の活動を捉えた写真を用いました。38 号の刊行に際して、執筆および資料等を提供して下さった先生方、学生の皆さんにこの場をお借りしましてお礼の言葉を申し上げさせていただきます。また、連大事務室の事務職員の方々にも多大なるご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 10 月

Newsletter 編集委員長

寺田 竜太



平成 29 年度 鹿児島大学大学院連合農学研究科 農学特別講義（一般セミナー）
平成 29 年 11 月 8～10 日 於：鹿児島市ジェイド ガーデン パレス

鹿児島大学大学院連合農学研究科

Doctoral Course Newsletter
第 38 号 平成 30 年 10 月発行

編集 鹿児島大学大学院連合農学研究科

鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号

電話（ダイヤル）市外局番 099

研究科長 285-8780

副研究科長 285-8781

連大事務室長代理 285-8791

連大事務係（総務系）285-8792

連大事務係（学務系）285-8795

FAX 285-8799

URL <http://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>

E-Mail renjimu@kuas.kagoshima-u.ac.jp



鹿児島大学大学院連合農学研究科
 The United Graduate School of Agricultural Sciences
 Kagoshima University
 〒890-0065 鹿児島市郡元 1 丁目 21 番 24 号
 Phone 099-285-8792 FAX 099-285-8799
<http://homeugs.agri.kagoshima-u.ac.jp/>